

新しい風俗文庫誌

奇譚クラブ



口絵
甘美と清潔の描成

5月号

奇譚クラブ

KITAN CLUB

5

定価 百五拾円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



限定版特別号 才四弾!!

別冊奇譚クラブ
(略号 別特)

特價
五百元



第一口絵

- 1 大奥さジョー
- 2 奥番の鎖
- 3 耐苦のハシコ
- 4 墓地に揺れる絞車
- 5 迫り来る渡り船
- 6 木立ちの中の囚女
- 7 煙に咲いた蘭蘭
- 8 非情の鞭
- 9 電灯に揺れる苦悶
- 10 回転木馬
- 11 刺青される女
- 12 苦悶の宙吊り
- 13 アクロバチスト急造
- 14 恐怖のコンクリート部屋
- 15 空倉庫の怪事
- 16 暴虐の部屋

第二回終

- 17 黒板の字
18 ゴム紐との結び
19 受難の瞬間
20 変形舞踏・棒踊り
21 消えぬ灯
22 森の精
23 強まりゆく痛覚
24 迫り来る蓋駢
25 妻と子供との大
26 返上のいけにえ
27 垣わたる美囚
28 車中のもがき
29 踏みにじられる女
30 ハンモック椅子
31 耐苦の座褥
32 燭燭と雄肌

男一クラビヤ

[illegible]

第二グラビヤ

狂れ咲き 揺れるのまなざし	四方 愛子
第63号囚 黒いローブ	柳子
黒星飾り	山越三子
菊花一輪	山越三子
つゝある一髪	大塚 哲子
約束の日常	須川 幸子
哀愁 燈	須川 幸子
白い影壁	須川 幸子
苦しみは時々	春日 千恵子
妻は反転	春日 千恵子
変な結婚	大井 寛子
囚人 衣	柳子
囚妻 衣	柳子
ロームじの斗い	前木 妙子
突つた炸弾	三枝 良子
性質なあげ	三枝 良子



西馬孝氏の作品三十二点に
対し、その場面々々の情景を
活字に依つて描出し、興題を
併加する三十二篇の解説文。

大阪市阿倍野郵便局
私書箱第十四号
天 星 社
須磨口座 大阪五〇〇番二下

緊縛写真
くらっ集

限定版特別号 第三弾！

『緊縛写真グラフ集』

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

画題「縛り人形」
網川文代
花坂道子

限定版特別号につき一切書店宛りは致しません。直接発行所宛お申込み願います。取重包装の上急送致します。

大阪五〇〇四二番
振替口座
天 星 社
私書函第十四号
大阪市阿倍野郵便局
〓お申込先〓

◎豪華な内容とモデル陣◎

巻頭裸身緊縛一頁大扉	ながしめ……………	絹川文代
荒縄全裸緊縛……………	大塚啓子	
落ちた腰巻九態（野外）		
円い乳房……………	要川悦子	
浴室におびえて九態……………	要川悦子	
縄の陶酔……………	絹川文代	
恍惚境悦膚の末……………	絹川文代	
いためられた乳房……………	桜井葉子	
耐えられる？……………	桜井葉子	
月経帯の強制二態……………	大塚啓子	
手吊りと逆手吊り五態……………	大塚啓子	
全裸悦膚態……………	大塚啓子	
白痴美の誘惑……………	大塚啓子	
はねかえす縄……………	大塚啓子	
うろうろ許して……………	大塚啓子	
雪白の肌は縄にまみれて		
六態……………	大塚啓子	
優姿バダガ縛り……………	絹川文代	
忘却の彼方……………	絹川文代	

股間縛り背正面二態……絹川文代
捕われの麗人二態……絹川文代
温責め二態……大塚啓子
浴室にて責める四態……大塚啓子
何にをしようと言うの……桜井葉子
新人鬱態集八景……桜井葉子
いじめぬく二態……絹川文代
メンスバンドの猿書……絹川文代
親念横臥の図二態……絹川文代
変形手足しぼり四態……愛川悦子
裸身をさらして六態……愛川悦子
豊満くらべ九態……桜井葉子
亀甲縛り正背面二態……愛川悦子
怒めしき縄目二態……大塚啓子
後手首腰縄四態……大塚啓子
新人緊縛ボーズ集六態……桜井葉子
隅から隅まで四態……愛川悦子
鏡面万華鏡様(裏し表)……愛川悦子

四十項目 百十五ボーズ





如神志願 高化願望 美七崇拝 族の花園

マゾヒズム特集号 (定価三〇〇円) 奉仕特価二〇〇円 (送共)

満天下Mマニヤの渴望久しきマゾ特集愈々ここに発売

◎口絵並にグラビヤ・フोट、本文の隅から隅に至るまで、総てM派にて独占した「マゾヒズム党」待望のM特集の決定版!

美女にしいたげられ、佳人に騎乗され、麗人に責められる男の姿。マゾストの見果てぬ夢を、ズバリ具現する画筆の牙えとレンズのリアルさ……。

Ⅱ 巻頭豪華口絵 Ⅱ マゾヒスチック画廊

滝 れい子・画

写真版

生きりフト——稽古まわし
 矮人哀歎——執事の祈念
 美妓の嘲笑——揺がぬ重圧
 道場の鬼百合——意趣返し
 グラビア・フोट・セクション
 マゾ・フोट・ギャラリー

ドミナのポーズ 意慢奴隷譴責
 征服者の嘲笑 室内馬に好適
 珍獣出現 屈伏の瞬間
 ドミナの専門マツト スナップ集
 服従の宣誓

マニヤを驚喜させ、熱狂させたマゾヒズム小説の真髓。美女の足下に悶えながら幸福感に酔い痴れるマゾ男性の生態を描き出した数々の問題作……。

Ⅱ 絢爛マゾ読物満載 Ⅱ

二百字讃歌……………真砂十四郎
 あわれ絢一郎……………日文卅古六
 捕虜の洗礼……………出久 信男
 美しい暴君……………馬族 保
 あるマゾ男の告白……………才 昭吾
 幸福なる隷属の告白……………鐘坊 巡
 祭壇に君臨する脚……………馬族 保
 ヴィナスの重石……………真砂十四郎
 囚獄の思い出……………嶺 收一
 美しき悪魔の咲笑……………真木不二夫
 実験室にて……………角田 平八
 牛乳風呂の饗宴……………馬族 保
 サジズムの女……………才 昭吾
 被虐哀歎……………真金鍛次郎
 挿絵・カット……………北原純子、杉原虹児





第一口絵

吊責の種々相	四馬孝画
「苦渋の重石」「サーカスの看板娘」	
「飯面をぬいた男」「宙吊りの女体」	
「非情の取引」「奈落への肉塊」	
「バレリーナの受難」「進る浣腸液」	

第一グラビヤ

甘美と清潔の構成	構成……辻村 隆
棒げられたもの	モデル……大塚啓子
シャッター以前	モデル……南川文代
ある瞬間	モデル……四方清美
苦（くつう）痛	モデル……四方清美
高貴の転落	モデル……梨花悠紀子
地底の白鳥	モデル……梨花悠紀子
鏡売の対象	モデル……梨花悠紀子
美しき結末	モデル……梨花悠紀子
吊り準備完了	モデル……南川文代
私を責めて下さい	モデル……東浦かおる
隠られる顔	モデル……前本妙子

遠藤春一画廊
「いちじく浣腸」「連綿女群」

第二口絵

「炎責愉悦」二題	連れい子・画
女相撲図録	雪崎京人提供
南村俊平戯画集	
「ジガ蜂と蠶」「人喰猿」	南村俊平・画
「鏡の間の脂汗」	

第二グラビヤ

自刃・切腹願望ポーズ	モデル……大塚啓子
妄想の映像（マゾフォト）	モデル……加茂良子
期（き）たい一待	モデル……南川文代
チャンスの把握	モデル……梨花悠紀子
疼痛の階段	モデル……梨花悠紀子
その表情で暫し待ち給え	モデル……梨花悠紀子
変り身	モデル……杉江美津子
放置されて	モデル……大塚啓子



新アブ街散歩「氾濫の中での孤高性」……市川国彦・画
わたしを責めて下さい
古川裕子への手紙……吾妻 新・画
麻生保氏の生活と意見……秋葉マリ・画
公開通信サド女性の井……塔婆十郎・画
雁金城炎上秘史 戦国無残記……阪東秀美・画
女形時代の思い出 私の体験告白……二隅千恵子・画
公開通信 同性を押え込んで……沼 正三・画
新稿 ある夢想家の手帖から……赤松美夫・画
私の意見「正常と異常」……牧 高志・画
続・夢二夜「第三夜」……内田武男・画
揮フアン三題 一「グンタイはたかふんどし」……片桐唯夫・画
バンド・マニヤのために……佐治麻造・画
連載小説 宇宙のどこかで……山田久仁子・画
体験レポ 私の切腹ブレイのすべて……佐 渡 槐・画
連載小説「特選者」五……辻村 隆・画
奇譚三十九夜物語（第五夜）……北沢 操・画
告白 クリストマニヤの日記から……山下 昇・画
体験記「女囚哀歌」……水見龍也・画
首い廃墟「ユニオン家具会社」……柴崎 黎子・画
創作 ママと竜太郎と私……田沼 龍男・画
マゾヒズム天国……黒岩鉄矢・画
悪魔の日（ある切腹マニヤの告白）……古井直也・画
告白 女性化志望者の泣き……大熊清夫・画
追想「伊藤晴雨」その生涯と作品……

奇クサロン
伊藤晴雨氏を偲ぶ
非（ニセ）風流夢譚
異境にありて
「日本愛禪会」
結成提案について
（本号の口絵から）炎責愉悦
「読者の主張」
人生は悪魔的である
少年受難シリーズ
「御小姓仕置所」
見世物小屋の感傷
読者通信

可愛川柳貴風景七態

作保松 画子木

賭けられた

肌かなし
緋縮緬

余

憎くまで

主男

めたる

黒髪は乱れて

凄し

晴雨調

吊られたるリンチの

裾に

隙間風

折檻し

雨の中
腰の白さが

眼に

しみる

荷造りの

うにびの

るて

土間の隅





相々種の責吊

画孝馬四



石重の渋苦

サーカスの看板娘





仮面をぬいだ男



宙吊りの女体

非情の取引



奈落への肉塊





バレリーナの受難



液腸浣る進

甘美と清潔の構成

構成 辻 村 隆



捧げられたもの



モデル 大塚 啓子



シャッター以前





モデル 絹川文代



ある瞬間

モデル 四方清美



苦

痛





高 貴 の 轉 落

地底の白鳥





競賣の對象

モデル 梨花悠紀子



美 し き 結 末





吊り準備完了

モデル 絹川文代





モデル 東浦ひかる



「私を責めて下さい」





翻られる顔

モデル 前本 妙子



遠藤春一画廊

いちじく浣腸



群女縛連



灸責愉悅

〈奇クサロン〉参照



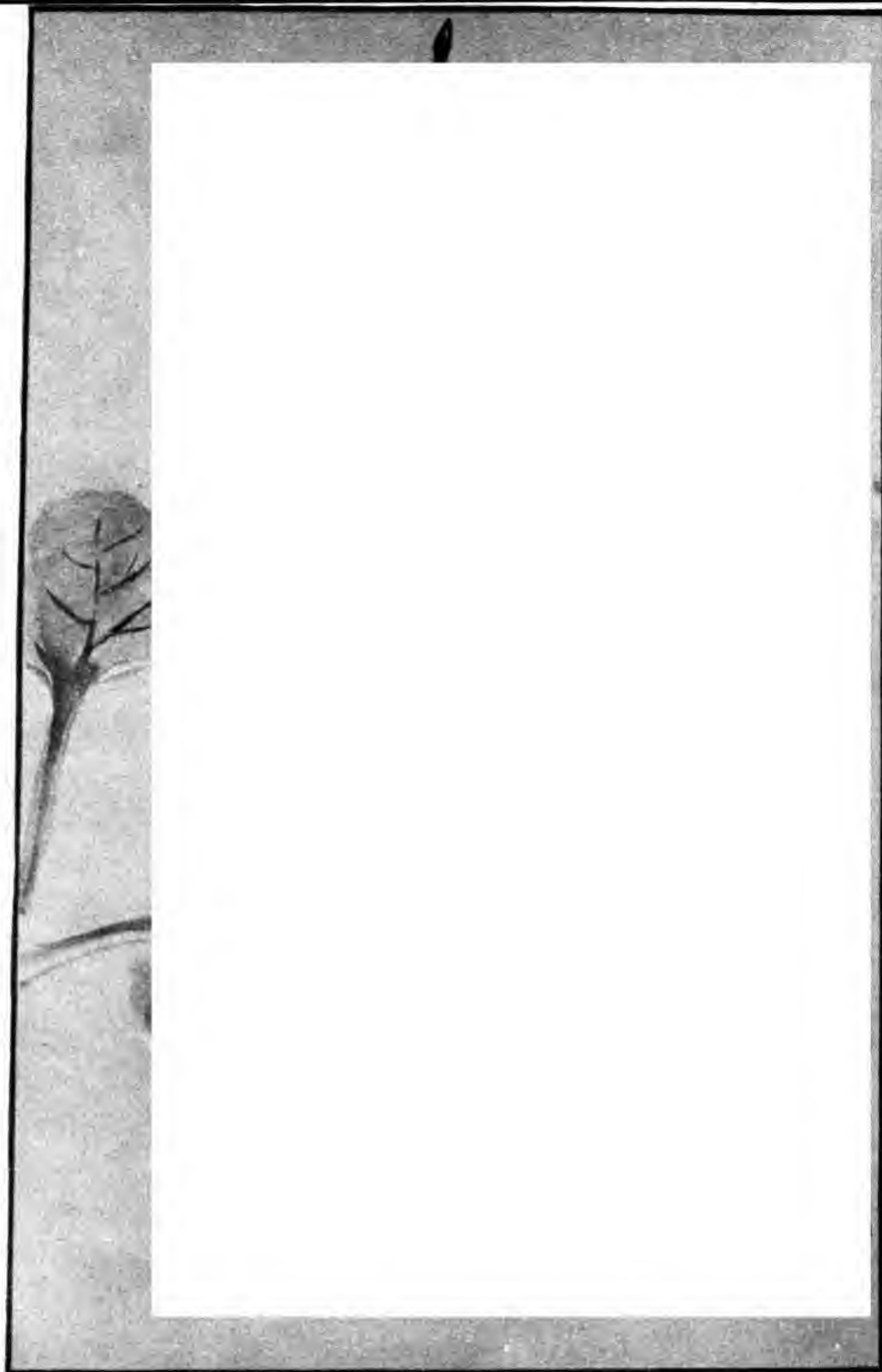


瀧れい子画



女相撲図 絵





ジガ蜂と蝶

『モシモシ本部ですか、こちらはG325号、只今一匹
捕獲、尚他に獲物多数、至急増援願います。』

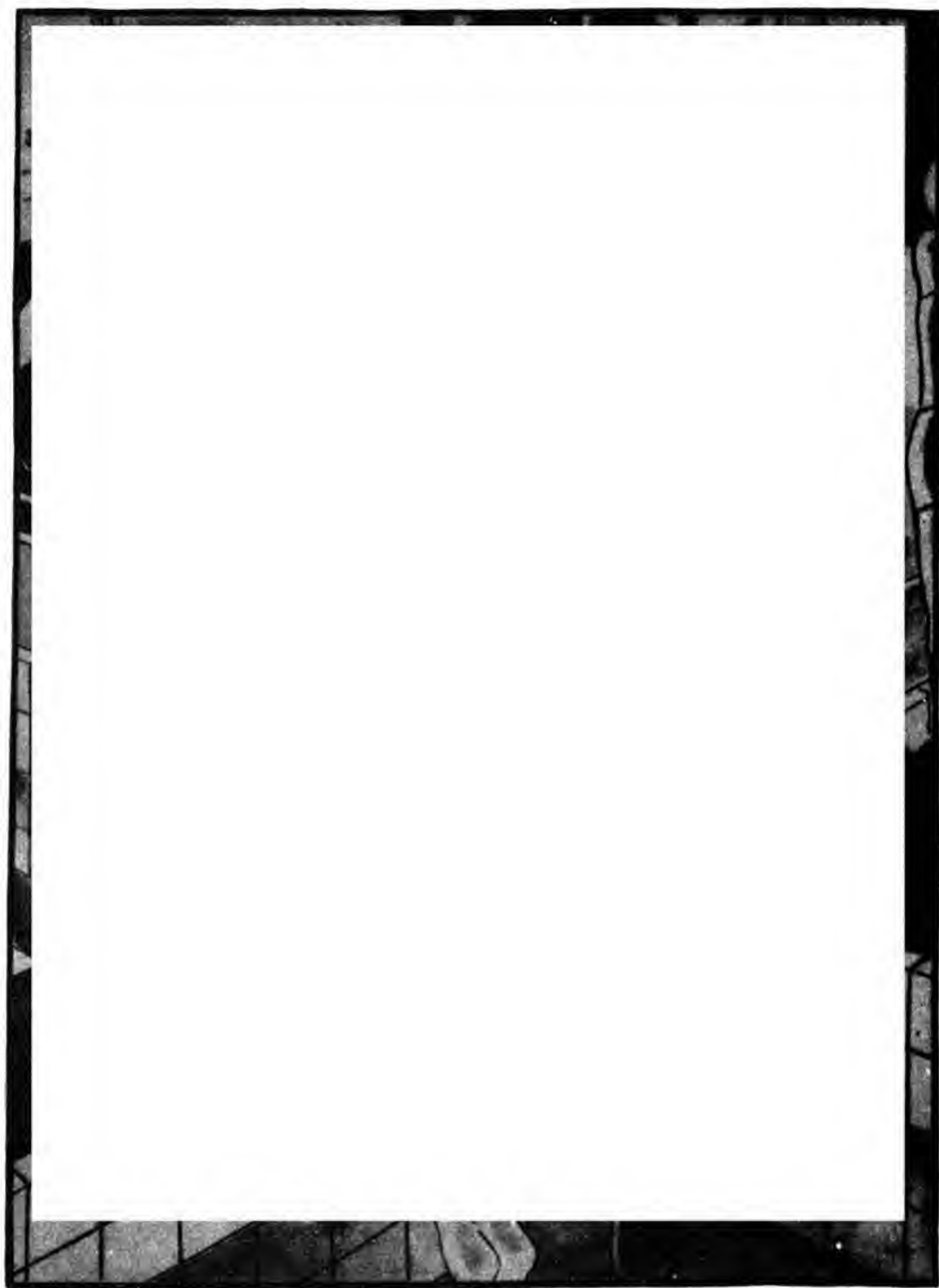
南村俊平戯画集

人喰猿

乙女の柔かい肉を好む人喰猿が無防備の少女
国を襲って猛威を逞ましくした。

人
喰
猿





鏡の間の脂汗

四方鏡を張った部屋に彼女を置けば、周りの鏡に写った自分の姿を見て驚きタラリタラリと脂汗を流す。



自 刃

切腹擬態ポーズ







期
待



モデル 加 茂 良 子







チャンスの把握



モデル 絹川文代

疼痛の階段

モデル 梨花悠紀子





「その表情で暫し待ち給え」



モデル 梨花悠紀子



放置されて



モデル 大塚 啓子

新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装五月特大号

1961年 5 月 号

(第15巻 第5号 通刊第153号)



新アブ街散歩



性高孤の中の氾濫

市川 国彦

1

外村繁氏の「濡標（みをつくし）」―講談社・二九〇円―は、ちかごろ文壇読書人の間で、かなり話題になった作品である。

これは、著者の五十八年にわたる性生活、もしくは性欲史の告白的自伝で、読むとなるほどおもしろい。心理描写が克明で、しかも全篇清らかな抒情に包まれている。性を描いても、露悪的ないやら

しさはすこしも感じられない。推賞に価する一冊といえよう。

ところで、同じ外村氏の自伝的小説「濡れにぞ濡れし」が、本年初頭から「週刊現代」（講談社発行）に連載されている。

これも、われらアブ派にとって、まず、みのがすことのできない秀れた作品になりそうである。

――「私」（外村氏自身）はある日、女中の美代と一緒に、地獄絵を見に行く。半裸で虐げられている女亡者を眺めているとき、私

は美代の肩のやわらかさを知り、生まれてはじめて現実の女を感じる。やがて中学に入学した私は「美少年」と騒がれ、上級生の「少年」にされる。私の内部にはいつか変態的な感情が生まれる……というような生い立ちから、さらに、すこし長い引用をゆるして頂ければ、つぎのような興味ある自己分析があらわれてくる。

——もちろん私も彼を笑うことはできない。しかし私は彼のように彼女の胸に手を差し入れるほどの勇氣はないが、その乳房を男の手に触れられた時の彼女の羞恥を思うと、私の性欲は昂進する。

つまり私の男性の肉体と、私の女性的な感情とが互に倒錯し、更に鬱屈して、かなり特殊な性欲癖を形成したのではないか。

例えば、私は肌を露出することをあまり好まない。私の体は決して筋骨たくましくはない。皮膚も白く、男性美を誇るわけにはいかない。従って、そんな私の裸体を他人に見られると、強い羞恥を感じる。

しかし男である私が、そんな感情を抱くのは、いささか不自然である。嫌らしくさえ感じる。

そこで、私は私の羞恥を、女性の肉体の上に転置する。すると私の感情はかなり自然に流通する。が、逆に女性の羞恥が私に反映し、私は性欲を感じるのである。

更に、私の性欲は異常化する。私は総じて被虐的な感情を抱いた時、私の性欲は昂進するらしい。

数学の試験の時である。私は全部の問題を解き終り、幾分、得意げに読み返していた。が、私がふと計算の違いを発見した時には、殆んど時間が残っていない。私はあせり、却って思考力が乱

れる。

遂に鐘が鳴りだした。突然、私の性欲は昂奮する。

またある時、暴力が弱者を凌辱した新聞記事を読んでいて、突然、私は下着を汚した。

(週刊現代・1月29日号「濡れにぞ濡れし」第六回より)

これだけを読んでも、マゾ派の読者には、この小説のなみなみならぬ価値がおわかりになるだろうと思う。

この告白的心理描写は、緻密で、さすがに適確な筆である。

さらに外村氏は、座談会において自己の被虐心理を、つぎのように語るのだ。

「——初めにもいいましたように、私が知っている女性というのは女房だけなんです。といっても私は別に道徳家でも何でもありません。今ではこんなじいさんですが、若い時には、美少年でした(笑)そして誰からも女形のように考えられていた。

そこで、性欲なんです、女性的な発し方をするんですね。つまり自分から進んで犯す気持ちがちっとも起きない。自分でも変態的だと思っています。

徴兵検査の時です。これはすっぱだかで四ッん這いになって尻や生殖器の検査をするのですが、イヤでイヤでたまらず、わざと身体を低くしてやった。ところが「尻上げエ！」と検査官からどなられた。とたんに性欲をおぼえ、興奮してきたのです。大きな屈じよく感を受けたからですね。

興奮したのはよいが、さあ大へん、困ったことになった。張りきった肉体を検査官が発見でもしたら、とんだことになってしまふ。それでヒヤヒヤしながら検査を受けたものです。



それ以後、このことを思い出しただけでも性欲を感じるようになった。女性の強姦の喜びもそこからくると思います。

(中略) 侵すことの喜びを少しも感じないのです。今日まで芸者買いもしたことがあります、半玉の女と床に入っても、ただ可愛くて可愛くてたまらない。けれども、性欲はぜんぜん起きない。いろんなおもしろい話をしてやるだけで満足でした。

まえの女房とは恋愛結婚でした。彼女はカフェの女給でしたが、最初会ったとき、「あっ俺の女房だ!」と感じましたね。(笑)

それから毎日のように通って一年たったけど、どうしても愛の告白ができない。それは経済的な理由と、それから女給は自分の職業を卑下していて、堅気の男からプロポーズされると、たとえ愛がなくてもひかれる、ということに抵抗を感じたのです。

そんな状態だから、いくら交際はしていても、性交はおろかキッスさえしませんでした。侵す意志がなかったのです。だからもちろん童貞でした。(後略)

(以上は日本社発行の「週刊実話読物」2月6日特大号、座談会記事より抜粋)

これは小説の上に書かれたものでなく、外村氏自身の口から語られた言葉だけに、いっそう親近性と真実味がある。

しかも、この座談会における外村氏の相手は、劇団女優と舞踊家

の二人で、二人とも二十一才とある。

「女の子と一緒に寝ても性欲はおきず、おもしろい話をして彼女をよろこばした」こともまた「女給に惚れて一年間も通い、交際してもキッスすら行なう意志がおきなかった」というのも、あきらかにマゾヒストの心理であろう。

ここで興味ぶかく思えるのは、世のいわゆるアブ性愛者にありがちの、暗い羞恥や、劣等感や、秘密主義、隠蔽主義的なものが、外村氏にはほとんど感じられないことである。

外村氏は年を積まれた純文学作家で、しかも私小説作家だから(それに失礼ながらも「お年だから」)当然といえば当然かも知れないが、それにしてもこの座談会における氏の態度は明かしく、さっぱりしているように感じられた。

むしろ、小説の中で、少年期から思春期の「私」が性に苦悩し、煩悶する場面は数多くでてくるが、それはあくまでも、一般的な、「性」に対してであり、自己の内部に果喰っている「異常」に対してではない。

若い女性二人の前で「自分でも変態的だと思います」などと、シヤアシヤア言うところは、明朗でさえある。

もっとも、若い女性の前に自分のヘンタイを披露して彼女たちの侮蔑をまねき、その屈辱感によるこびを味わう——ことも考えられ

なくはないが、そこまで推理を発展させることもないだろう。

ともあれ、こういう小説が、一流出版社の編集する週刊誌に連載されるということは、うれしいような心強いような気持ちがある。

雑誌社が「異常」を、ことさらに汚ならしく、排他的に、興味本位に書きたてて読者を釣る時代は、もうすぎたのであろうか。(もともと三流誌の場合はべつだが)

日本の性文化(?)が進み、正常と異常の別が、ますます交錯して、過去において侮辱され暗闇に押し込められつづけてきた憐れな「異常」が、堂々と性文化の仲間入りしつつある現象の一つであらうか。

いや、そんな皮相な見方よりも、外村氏の作品の芸術性が、こうしたアブ心理小説を世人の話題にのぼらせた最大の理由とみるべきであらう。

この一文を書いているとき、ちょうど「週刊現代」の2月12日号が配達されてきた。ひらいてみると「文壇すずめ」という欄に「落標」が第十二回読売文学賞にきまったとでている。「落標」は部数が出ない私小説の中では異例の売れ行きで、ベスト・セラーにも入るほどだとある。よろこばしいことだと思った。

さらに「濡れにぞ濡れし」の、より緻密な進展を期待するとともに、本誌においても、ぜひ、万人の心に共感と感銘を抱かせるような文学的力作の登場を期待してやまない。その可能性は大いにあり得ると思う。

2

東京・神田の神保町駿河台界隈は、いわゆる書店街。大小の出

版社、問屋、一般書店、古本屋、ゾッキ本屋、印刷所から製本所まで集結している。

その一劃にある某書店の店内の一隅に、いわゆるアブ雑誌が並べられている。三種類や四種類ではない。新号旧号別冊特大号をふくめて、部数もおよそ三百冊余り。文字どおりの山積である。歩道から舞いこんでくる埃にまみれて、表紙が白っぽくなっている。

アブ雑誌が、稀少価値で売れる時代は、もう去ってしまった、とは思った。稀少価値どころか「氾濫」のようにもみえる。

選りどり見どり、好きなものをどうぞ、という調子だ。

しかし、ちょっと注意してそれらの雑誌を見ると、選ぶまでもなく似たりよったりの感じがする。客観的にみても、群を抜いてすぐれているものは、あまり見当たらない。もっとも読者の眼が麻痺して(あるいは肥えて)しまったせいもある。

雑誌を発行するという仕事は、私なんかシロウトでさっぱりわからないが、身心たいへんな労働だろうと想像する。

編集者が、いくらい狙いをつけて努力しても、経費採算の点、その他の理由で、雑誌の出来映えが思うようにいかない、ということもあるにちがいない。

とにかく月刊雑誌だから、毎月定った日には書店の店頭で並べなければならぬのだ。そのためには、凝りたいところも凝れず、もうすこし手を入れたところも我慢して、発行してしまうようなこともあるのだらう。

以前は、それでもよかったのだ。なにしろ「稀少価値」という絶対の優位があったからである。

しかし、現在のような「氾濫」の状態になってしまっただけは、マル



クスの言をまつまでもなく、量から質への転換は必然であろう。

質への向上がなければ、読者から見捨てられることも考えられないことではない——などと、いっぱしえらそうなことを書いてしまったが、じつはこれから、わが「奇譚クラブ」の時評などをしてみたいと思いつめた次第である。

「奇譚クラブ」の質は、最近たしかに飛躍してよくなったと思う。しかし、異色雑誌の王座をこれからも確保していくためには、いっそうの充実が必要に思われる。

そこで遠慮も儀礼もない私見を述べさせて頂くことをおゆるし願いたい。

三月号は、表紙からしてよかった。

なぜよかったか、といえ、一見して「異色雑誌」の色調が感じられたからだ。ありきたりの娯楽雑誌ではない、というムードがある。古めかしいエキゾチズムがあつて、それが下品ではない。

古めかしいというのは、表紙絵の外国女性の髪型、服飾品、絵としてのタッチが新しくないところからくる。しかし、それがかえって、異様な重厚味を感じさせる。今後とも表紙は、この感覚をつづけて頂きたいものだ。

本文では「読者の声と通信」という特集がよかった。

これは、他誌ではちょっと真似のできない特集だと思う。短かい

文章のなかに、ドキリとするような迫力があつて貴重だった。とくに、中西郁夫氏の「パンティ・マニアの言葉」などは、文章の巧拙を超越した凄みがあつて、読みながら背筋にゾクゾクと寒気がつたわった。

私はべつにパンティ・マニアではないのだが、こうした真実味ズバリの告白には、趣味や傾向を越えた読物としての興味を、ひしひしと感ずる。

自分の傾向のものしか読まない、という読者の方もおられるらしいが、それはいささか偏狭に思える。真実味あふれた異辭の告白文は、他の娯楽雑誌の変わりばえない通俗小説よりも、どれほど魅力的だかわからない。

アブ界(?)には、いわゆる多数派と少数派があるけれども「奇譚クラブ」においては、さほど少数派の軽視はないと思う。(一例として「金色マニアの願い」これなどは、あきらかに少数派である)

一面から考えれば、少数派の記事を載せることによって「文献誌」としての価値も生じてくる。

「文献誌」といえば、「奇譚クラブ」が単なるエロ雑誌だったら、これほどの永続はみられなかったらと思う。もちろん、営利誌である以上、エロ雑誌的要素も必要であらう。しかし、読者というも

のは案外まじめで敏感なものだ。「奇譚クラブ」の文獻的なきまじめさに好感を抱き、信頼感をおぼえ、その信頼感が、永続性を支える一つの要素になっているのではないだろうか。

妙なたとえば「奇譚クラブ」には、酒でいう「コク」がある。ぎっしりと埋まった活字面からは、汲めどつきせぬ味わいが感じられる。

挿絵はすくないが、活字が豊富である。じっくりと楽しむボリュームがある。

「読む雑誌」よりも「眺める雑誌」が、いまの出版界の流行らしいが、アブ雑誌の場合、やはり腰をすえて、密室めいた環境のなかでじっくりと味わう文章も大いに必要だと思う。文章には、空想も飛躍も可能だ。

言葉をかえていえば、私は「奇譚クラブ」に、この氾濫のなかでの孤高性を望みたい。孤高性という言葉は大げさかも知れないが、なにも独善的な、読者を無視した編集、というのではなく、通俗的な、卑猥な、汚ならしさから脱却した香気をもつ異色誌となること、これからの発展の必須条件だと思う。

このことは編集後記の「世間一般の誤解をすくなくするためにも永続的な雑誌の発行を企図するためにも、線香花火的でない内容の充実が必要だと思う」という言葉と一致すると思うのだが。

しかし、いくら「コク」があっても「影の国」（雪俊遙氏）という連載小説は苦痛だった。評論や研究文ならべつだが、これではあまり「コク」がありすぎる。

「奇譚クラブ」は、同人雑誌や学術誌ではなく、すでに一般書店の店頭と並ぶ、娯楽誌の一種なのだから、とくに小説の場合、どんな

読者が読んでも、一応はおもしろく、なっとくがいて、ラクに読めるものでなくてはならないと思う。

文章のはじめから終わりまでが、機械的な即物的な行動の羅列では、読むのにイメージの補足を大量に必要とする。登場人物に、もうすこし生きた心と肉体が欲しい。行動にも必然性がほしい。

「宇宙のどこかで」（佐治麻造氏）にも同じことを感ずるが、こちらにはまだ作者の脳裏に、読者の存在をいくらか意識しているような心づかいがみえる。両者とも、自分だけが楽しんで書いていられるように思えてならないのだが、もうすこし、読む側の身になって頂けるとありがたい。

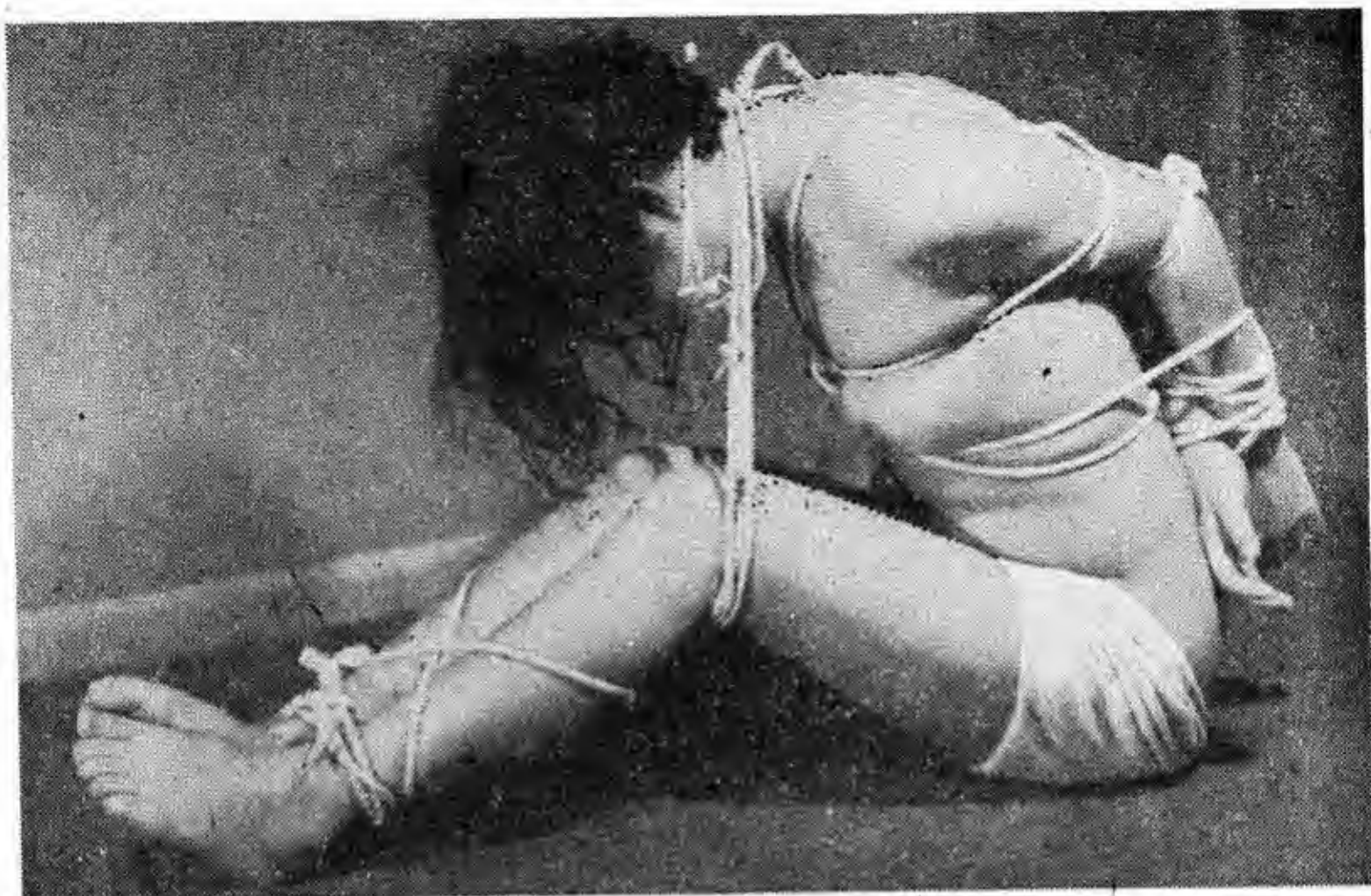
「遠大人悪業記録II地霊の国」（土路草一氏）はさすがに小説の形をなしていて、たしかに人物の登場、展開は、たのしむ余裕があった。

「奇譚三十九夜物語」（辻村隆氏）もおもしろい。

氾濫のなかで老舗の権威を保ち、なおも前進をめざす「奇譚クラブ」としては、この水準を確保してもらいたいものだ。

鉄骨の機械を縛ったり鞭打ったりしても、どうも迫力ある感興はわからない。いくらアブの世界に登場してくる女性でも、血がかよい肉体のあたかみもあり、人間らしい感情を備えていなければ、どんなにはなばなしいサド・マゾ場面を展開したとしても、実感として読者の胸に迫ってこない。こうして考えてみると、アブ小説とは、とくにむづかしいものだ。

とうとう悪口雑言になってしまったが、これもわが「奇譚クラブ」の、いっそうの質的向上を期待する願望のあらわれだとおぼしめして、平にご容赦賜りたい。



わたしを

責めて下さい

辻村 隆

「初めてお手紙差上げます。自己紹介を致しますと、私は封筒に書きました通り、大阪府下の豊中市、螢ヶ池に唯今住居致して居る者でございます。両親は駅前のマーケットで乾物類を営んでおり、私は長女です。弟妹二人を学校に出してやるといつも体があいております。恰度、一年程前、ふと、大阪駅の

専門大店で、何気なく御誌を拝見し、恥かしい思いを忍んで一冊買って帰りましてからというもの、私は御誌に、正直に申しまして取りつかれてしまいました。四馬孝先生の被虐に酔う美女の表情に、胸のときめくような、切ない陶醉感を覚え、絹川文代様や、大塚啓子様、それに最近グラビヤに出てこられた、四方清美様等の、強烈な責め写真に、私もあの様に、さまざまに縛られ、責められたら、どんなに愉しかろうと、ひたすらに考えるよ

うになりました。私のどこかに潜在していたマゾの性が、しきりに私の夢を叶えて下さる人を探し求めるよう急き立てるのです。

編集長様。何卒貴方のお力添えを持ちまして、私を責めて下さる、適当な方をお紹介下さいませ。同封の写真は、今年の正月に私の家の前で撮ったものです。

私のような女でもいいという方がありましたら、なるべく大阪府、又は兵庫県の方で、私より三、四才上の二十五才以上の男性の方を希みます。

午前九時頃から午後の四時頃迄は、私ひとり留守番をしておりますので、私の家へ来て戴いた方が好都合ですが、お差支えあるようでしたら、何とか用事にかこつけて出て参ります。

夜、ひとりっきりになった折、ひそかに腰紐や縄で、自分の体を自分でいましめ、冷たい寝床に転がって見ては、緊縛感を味っておりますが、やはり物足りません。

本当に男性の方にひしひしと縛られて海老責めや逆吊りにされたり、後手の高手小手縛りにされたりすると、ひかるは泣出してしまいかも知れませんが、きっとそのあとで、しみじみと緊縛の愉しみを噛みしめている事で

しよう。

唯一の心配は、私を縛った上で、ひかるの体を汚さないだろうかと案じます。勝手なお願ひではございますが、私の意に反した行為をなさらない信用出来る男性の方をお願い申し上げます。私の体が汚れない限り、私はどんなに責められても決して不足を申し上げませぬし、編集長様にも御迷惑お掛け致しませんことを、堅く誓います。

浣腸は便秘の時、二三次いちちく浣腸を致しました程度で、強いて興味はございませんが、若し、男性の方が浣腸を好まれるようでしたら、辛抱するつもりです。

私は三年前高校を卒業致しまして今年満二十一才の春を迎えました。なるべく教養ある方が望ましく存じ上げます。

私の切なる願ひを、何卒お聞き届け下さいますよう、偏えにお願い致します。

最後に御誌の御発展の程を、心よりお祈り申します。

かしこ

東浦ひかる

箕田編集長様もとへ

○

「どう、辻村君、一度みこしを上げて当てる見る気はないかね。新鮮だよー。それに、君

には、悠紀子さん（鑑賞用女性参照）を紹介して貰った借りもあるしネー」

「この同封の写真を見ると、一寸、いかすじやないか。だけど、乾物屋の娘さんにしては些か大胆だね。相手の男性は二十五才以上とあるからには、僕も勿論二十五才以上かどうか一少し以上すぎて、彼女がっかりしないかな」

「読者の人に紹介してもいいんだが、彼女が念を押している、ホラ、無茶をしないっていう件ね。万一のことがあった場合恨まれるかも知れない。その点、辻村君なら大丈夫だろうー」

「莫迦に信用があるね。緊縛一点張りで、肝心の方は薩張りときていることは確かだけど、彼女果して辻村隆というと、プロ級に考えて、尻込みするんじゃないかな」

「ものは試しさ。君の住所を教えて、直接、君の処へ手紙がゆくよう連絡しておくよー」

「写真の方はどうだろう?」

「先ず最初はダメだろうね。最初にそれを切出すと怖がるかもしれないよ。徐々に口説くんだねー」

「写真をとらずに、緊縛をしたり浣腸したりして時間がもつと思うの? 第一、緊縛への

切っ掛けがないじゃないか」

「緊縛のプレイは辻村式独特の手段で行けばいいじゃないか。今迄随分プレイに関しては書いているじゃないか。今更、尻込みするなんて、君らしくもないぜ」

「じゃ、その時はその時として、万事よろしく頼むよー」

○

『前略御免下さいませ。本日、箕田様からお便り戴き、嬉しさの余り早速ペンをとりました。かねがね奇ク誌上で、モデルの方の構成をなさったり、又、「奇譚三十九夜」などでおなじみの、辻村様に、間もなくお目にかかれるのかと思いますと、今から胸がドキドキして参りますわ。』

お目にかからなくとも辻村様なら、きっと信用出来る紳士の方だと拝察致します。私の都合はいつでも結構でございます。唯、生理日ですと困りますので、その時だけはお避けしたいと思います。私は今月唯今より、辻村様の奴隷になった気でおります。貴方様が、ひかるの顔を靴でふみにじられても、四つ這いになって床を這わせられても、鞭の雨をふらせられても、決していいといたしません。ひかるが若しも泣き出したら、貴方様は、強い強い

猿ぐつわを私にはめて下さい。

羽村京子さんが書かれているような、イルリガートルや、エネマシリンジ（ひかるはどちらもまだ見たことはありませんが）をお使いになって、蛙腹になさっても、きっとひかるは、一杯涙をため乍ら、我慢すると思います。

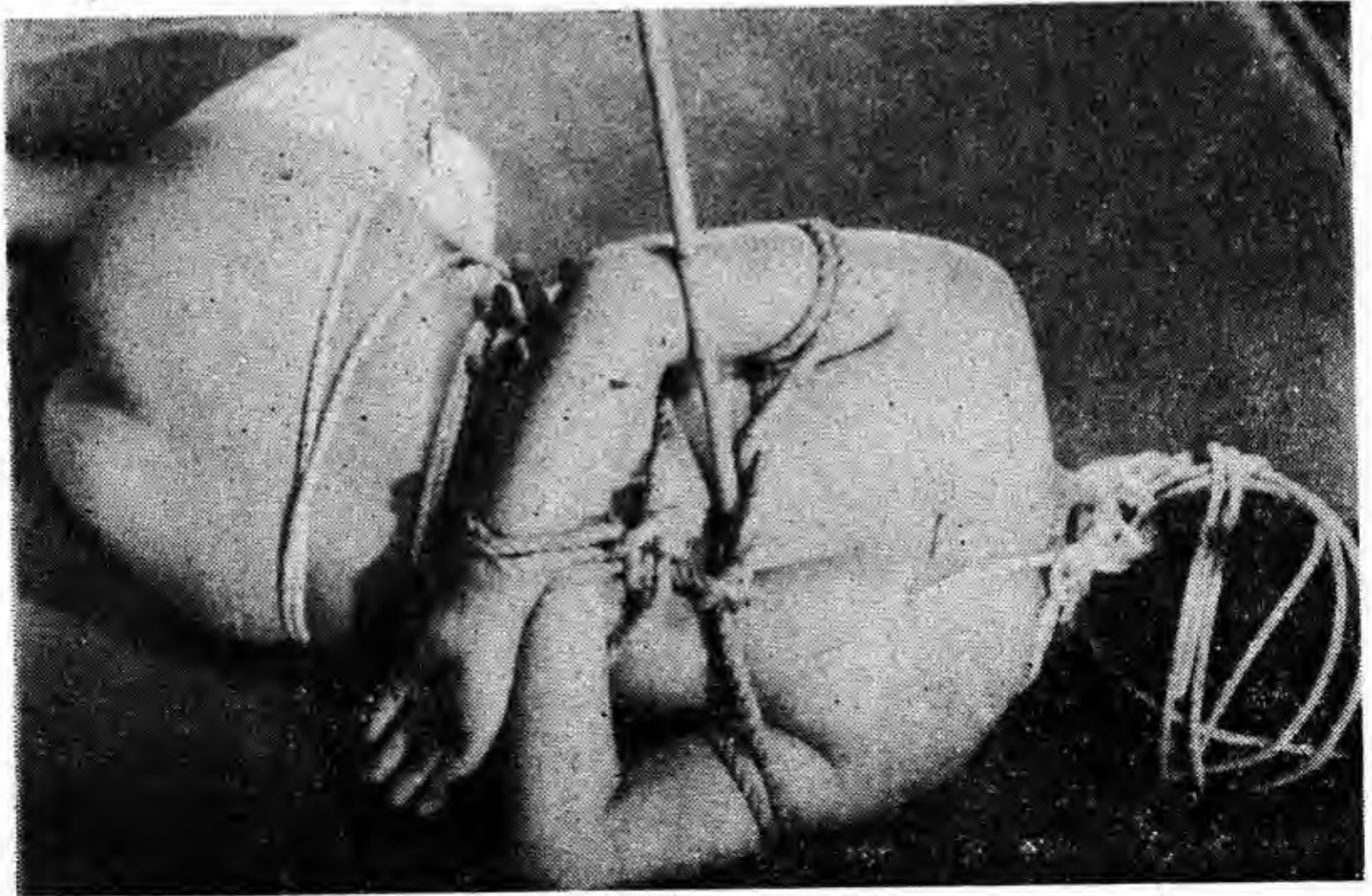
一日も早くお目にかかれる日を愉しみに、御返事お待ち致して居ります。

電話で、豊中局の②局の五×三×番で呼出し下されば、辻村様の御都合のいい場所にお伺い申し上げますし、又は、同封の地図の私の家へお越し下さっても結構でございます。阪急の梅田から、宝塚線の各停の電車にのられて、螢ヶ池でお降り下されば、すぐ分ります。では、その日を一日千秋でお待ち申します。

かしこ

辻村様の奴隷

東浦ひかる



辻村 隆様もとへ

私は螢ヶ池駅を出た。伊丹の飛行場が近いか、爆音をふるわせて、日航機が低空で飛び立っていった。かつては洋パンで賑わった田園都市も、今は静かな落ちつきをとり戻して、駅前には喫茶店や、ドラッグストア、カメラ店、新聞店が軒をつらねている。

駅から約十分許り歩いて、閑静な住宅街に入ると、地図に書かれてあった、東浦ひかるの家はすぐ分った。

意外に大きい二階建ての、可成り年代を経たどっしりとした構えの、植込みの手入れもよく行届いた住居である。

ここ二、三カ月、私は梨花悠紀子の飼育に費いやして来たが、ノーマルな悠紀子を完全に飼育するには可成りの暇と根気とを必要とした。併し、今これから訪ねようとする、東浦ひかるは、すでに責めを懇請し、マゾを自認しているのである。しかも、彼女は私の奴隷になるとさえ書き送ってきているのである。私は弾む胸を静めて、徐むろにベルを押し

た。時間は午前十時かっきり――
玄関があいて気配と共に、セーターにスラックス姿の若い娘が現われた。

私は一言、――辻村ですーと告げる。

ぱっと瞬間、娘の顔に紅葉が走った。気の毒な程、頬を染めて、彼女は私を凝視するとはにかんで泣いたような顔になって、瞼がヒクヒクとひきつれていた。

「どうぞー、あの、本当に辻村様ですのね」
「……」私は黙ってうなづく。

東浦ひかるは私を招じ入れると、心持ち手を震わせ乍ら、玄関の鍵をかけ、御丁寧にも扉の上下の差込みまではめた。

玄関を上った右手が応接室であった。

彼女は素早く電気ポットのソケットを差込むと、ネッスルのインスタントコーヒを入れ

た。奇妙な沈黙が暫らく続いた。

「大丈夫ですか……」

私は多少の不安と危惧をもって訊ねた。
「両親共、マーケットを終えて戻るのが午後五時頃になると思いますの。弟や妹も多分三時頃までは学校より戻りませんわー」

「何だか落着かなくて……」

そこで二人は顔を見合せて、軽く始めて笑った。プレイへの默契が成立したのである。

「少し寒い様ですねー」

「ああ、すぐガストروبを入れますわー」

彼女は立上って栓をひねった。

私はその背後にすっと立上った。いきなり彼女の手をとって、ぐいと後手にねじ上げた。

「あら、いけませんわ……」

ハッとした様に、彼女は身をよじった。

「もうプレイは始まっているんですよ……」

私は彼女の耳許で軽く囁やくー。

「でも……私、こんな姿の儘で……」

「自然の儘でいいんですよ。この儘で……」

私はプレイに入り易い段階を考えて、予めそのつもりで、背広の上ポケットに入れておいた細紐をとり出すと、苦もなく、免も角も彼女を後手に簡単に縛った。

未知への恐怖が彼女に襲ったようだった。

夢に求め、緊縛を憧れた彼女が、いざとなると、本番におののいていた。

始めて逢った、私とひかるー。僅か十数分前までは、路傍の人だった。顔も見知らぬ私に、後手に縛られて、たしかにひかるは戦慄を五体に走らせていた。

私は持参したバッグを開いて白い縄をとり出した。奥深くカメラが蔵われている。

スラックスの上から両脚を揃えて縛ると、私は彼女の体を抱えて、ソファアの上に転がした。

静寂が流れる――

私はラジオのスイッチを入れる。何でもい
いから雑音の中に身を置きたかったのだ。

「奴隷になる約束だったねー」

私はニヤニヤとして、ひかるを見下した。
無言で彼女はコクリとうなずいた。

「写真をとって上げようか、絹川さんや大塚
さんのように――」

「いやいや。絶対、写真はいやよー」

「どうして――」

「どうしても。でも、私の写真を何かの
機会に本にのせるでしょ」

「そりゃ分らないねー」

「だからいやよ。私、しれたら困るわ」

「顔をうつさない約束で……」

「それでもいや」

「奴隷は素直に云うことをきくもんだよ」

私は足を縛った縄尻でパシリと一つ彼女の
豊かなヒップを軽く叩いた。呀ッと云うよう
に彼女は身体を跳めた。綺麗にのびた眉毛が
ピクリと動く。下ぶくれの白い柔かい顔が、
一寸苦悶を作った。いかにもこの辺りの娘ら
しく、流行のオカマをかぶったような髪型を
追わず、極く平凡なパーマで、無雑作にピン
でとめてあった。それに普段の姿その儘か、

白粉気もなく、口紅も染めていない素顔その
ままであった。素顔の中に、中流家庭の娘の
育ちのよさを物語っていた。

その彼女にして、併も尚、手紙にある様な
奇異な願望のあることを知って、女性の胸の
底の魔性をまさまざと見せつけられる想いが
した。

一見平凡なこの娘に、こうした願望のある
こと自体、私にとっては始めての経験であっ
た。

私は逐次、プレイにとりかかった。既に、
はや彼女は総てを投げ出して、暗黙に私の緊
縛への行為をうながしているかに見えた。

彼女を後手に縛った儘で、私はセーターを
脱がし始めた。首を抜いてセーターは縛った
後手の処にたぐりよせられた。

下着の胸の紐を解き、ボタンを外して、こ
れも両手にたぐりよせた。

可愛いくふくらんだ乳房が覗いた。流石に
羞恥に彼女は眼を閉じた。が、私のなすが儘
に拒みもしない。

二の腕の辺りで後ろに縄で絞るとそれを胸
に廻し、両手を解いても自由にならぬように
してから、後手の柔かい紐をといた。

両腕を後に絞って確っかりと縛り、胸にも

掛けて、上半裸の緊縛を終って、私は静かに
ストラックスを降した。

いやいやと云う様にひかるは二度三度、ヒ
ップを振った。靴下をぬがせ、パンティ一枚
にすると両脚を揃えてしぼる。ついで首から
縄をかけて太腿の辺りと結び合せた。

完全な緊縛体にして、私は応接間の椅子を
取りよけ、赤い絨氈の床に、ひかるの体をこ
ろがした。

「撮るよー」

「いや、とらないで、お願い――」

「奴隷だよ、君は……」

私はわざと荒々しく、靴下の片方を必死に
噛がみする彼女の口をこじ開けて入れ、その
上から、防寒マスクでしっかり猿轡した。

「顔はとらないからねー」

私はそう云って、ひかるの髪を荒々しく乱
して顔に散らばらせた。

「絶対に顔をはっきりさせないから、ウンと
お云い――」

「……」ひかるの応答はない。

私は縄でパシリと彼女の肩を打った。

「かまわないねー」

はつきりと、ひかるはうなずいた。

縛った儘にして、私は早速ライトの準備を

し、カメラを三脚に据えた。ライトの前で、しっかりと彼女は顔を伏せた。

白い肌はライトに映えて、汚れを知らぬ緊縛像はむっちり豊かに部屋の空気を圧した。

すでに彼女はすっかり被虐に身を委ねていた。猿ぐつわを通して熱い吐息が、乳房を波打たせていた。肩が小刻みに震え、陶酔したように瞼は厚く重なって、私を見ようともしなかった。

突然玄関のベルがなった。ハッとしたように彼女は面を上げると眼を玄関に走らせた。激しい鼓動が手にとる様に聞えた。

私も凝然と立すくんだ。

彼女はもぐもぐと口を動かした。私は慌てて猿轡をはずし、足の縄をとき始めた。

「この儘でいいわ。私を玄関までこの儘引っ張って行って…」

「いいの？」

「……」

無言でうなずいた彼女は私に縄



尻を引かれて立上ると、応接間の扉を私に眼で開く様に合図した。颯っとい瞬、冷めたい空気が流れた。

「何も云わないでね…」

私にそうたしなめて、彼女はその儘の姿で玄関に立った。

「どなた…」

「あの、クリーニング屋ですが…、

今日はありますか…」

「今日はないわ。又次にしてね…」

彼女は後手に縛られた儘、大胆にも顔を玄関に曝して、内側から平然と声もかえず応答した。

「やれやれ。びっくりしたよ…」

「私も…。こんなところ見られちゃったら、それこそ大騒ぎよ…。ああよかった。」

ひかるは苦笑を浮べて、私を促がした。

「あんなに、いやだっていったのに写真をとって、本当にいけない方」メツとひかるはにらんだが、唇は笑っていた。

「出来たら私に送って頂戴ね。一度自分の縛られた写真を見たいと思っ



ていたんだから……」

馴々しく云って、

「少し腕が痛くなったわ。一度解いて下さらない——」

私は、いいよいいと素早く縄をといて行く。腕をさすり乍ら、ひかるはストープのそばにかがんだ。

「もうよすの？」

「……」

彼女は無言でストープの火に手をかざしていた。

「じゃ、もう少し、変った縛りをしてほしいけどいいんだね」

ひかるは背中をむけた儘、こっくりうなづ

く。

改めて、私はここに挙げた様な緊縛を始めた。

責めを好む女性に容赦は不要と、雁字搦目に近い縛り方であった。眼をふさいでいるのをいい事に、私は黙って、一枚そっと顔のうつつているのをとった。

「顔がうつらぬ様、伊藤晴雨式に顔を縄で縛ってやるよ——」

私はひかるの唇の合間に強く縄を挟み、引き絞ると、余った長い縄を無茶苦茶に、顔全体に巻きつけた。

鼻は歪み、唇はへし曲り、瞼は縄に圧されて、苦しげにひかるは呻いた。

続いてシャッターが、これをねらった。

私もひかるも忘我の境にあった。緊縛の真髄を知って、それからのひかるは、易々として、私のなすが儘に縛られた。

唇に馬の様にくつわをはめ、両手足を這わせて、赤いじゅうたんの上を這い廻らせ、つまづくと、黒い細紐がヒップに飛んだ。尻尾の代りに、三脚のケースがヒップを飾った。

立上ったひかるに、私は更に、両手の自由のきかぬ様、三本のハンガーを右手、左手、首の下とりつけ、ぐるぐる巻きに縛り上げ

て、深い猿ぐつわをかませた。

中腰で、ひかるは呻いたが、それは苦痛ではなく愉悅を押し殺した声であった。

彼女の肌はしっとり汗ばみ、桃色に染まり、いつ果てるでもない緊縛の連続にも彼女の方からの拒否はなく、されるが儘になっていた。

いつしか、両手首の長い緊縛から、両手は冷めたく、白く変色していた。

私は我に帰って腕時計を見た。

午後一時半。緊縛に時を忘れて三時間は瞬く間に過ぎていた。

あと一時間ばかりで弟妹が帰るかも知れない。

じゅうたんに、雁字搦目で打伏して、ハンガーで支えられた両手を空に伸ばしているひかるに私は声をかけた。

「よそうー、時間が経ったよ。今日はこれ位にしてねー」

陶酔からさめて、ひかるは物憂げに眼を開いた。

慌ただしく私は、彼女の全身にからんだ数本の縄をときほぐした。白い肌に数条の縄痕を残して、ひかるは暫し、その儘の姿勢で跣んでいた。

「どんな気持ちだった。本当に縛られるとなると、少しはこたえるだろうー」

「加減なさってるんでしょ。思った程もなかったわ」

「じゃあ、次はもっと強く、容赦しないよ。時に僕の『鑑賞用女性』を読んでくれたらうね。やはり奇巧と一緒にある以上、まして、箕田氏よりの紹介上、発表したいんだ。多少は潤色しておくから……いいでしょうね」

「私だと分らないかしらー」

「世間は広いよ。例え、お嬢さんの貴女に似ているなと思っても、貴女だとは誰も本当にしないよ」

一日の会合、でひかるはすっかり協力的になっていた。一度乙女の羞恥のヴェールを剥がすと、直後は反って大胆になるのか、うんと凄く書いてね、と念を押したりして、すっかり打解けていた。

ひとつは、彼女の恐れていた危惧が、取越苦勞に過ぎなかったのが、彼女をより協力的にしたのかも知れない。

早速帰ろうとする私を、ひかるは引止めて商売ものの缶詰を器用に開くと、彼女は果実をすすめた。

甘いパイナップルの香が口中に泌み渡り、

程よく疲れた私をいやしてくれた。

「わたしを責めて下さいーそんな題にしようかなー」

「フフ、私にピッタリだわ……」

「これを御縁に又どうぞ、ってとこだねー」

「夢にみるわ、きっと今日の事ー」

「と云うと、たのしかったってわけ……」

「フフ……そんなこと云えないわ……」

私達は再会を約して別れた。

螢ヶ池の改札口ですれ違った女学生がひかるにそっくりだった。

私は女学生の姿を眼で追った。

私が今来た道を、女学生はスタスタと急いで行った。

妹だろう……恐らく……

姉のこのさがを、彼女は知らずにいるだろう。そしてひかるはきつと妹にはよい、やさしい姉であるに違いない。

東浦ひかるさんー、若しこの一文をよんで御叱りあるなら、それは私の語彙の貧しさと文章の拙さからである。甘んじて御叱りを甘受しよう。

(おわり)

古川裕子への手紙

栗原 吾妻

伸・画 新

古川さん

永い間本誌から遠去かっていた私は、いまここで一つだけでも義務を果たしたいと思ってペンをとりました。それはあなたの切実な呼びかけにたいする答えです。おなじところに姿を消したあなたが、この文章をよむ機会があるかどうか、私には一切わかりません。なにしろその間に五年の断絶があるからです。だが、いつかは眼に触れるときがあると仮定し、それを祈りつつ書きます。なぜなら、それを書かずにすませることがしだいに私には苦痛になってきたからです。あの熱烈な訴えを黙殺したということは、過去五年間、私を苦しめつづけました。

どうやらわれわれは偶然に支配されたようです。昭和二十七年十二月号にのったあなたの「囚衣」が私を刺戟し、本誌に執筆する動

機となりました。私はそのことを最初の原稿でハッキリ記しましたが、それがあなたの再執筆の動機となったのだと思われます。以後、あなたはマゾヒズムについて、私はサディズムについて、書きつづけました。やがてあなたの文章のなかに私の名が出はじめ、私はあなたをモデルにして小説を書くにいたしました。そして最後に「孤独の広場」での私の告白、あなたの告別の辞のなかの熱情的な訴えとなり、私たちはほとんど同時に沈黙したのです。

私はメロドラマを好みません。ただこのような偶然の出会いと、その後の経過と、別離とは、見知らぬ二人の関係をやはり特殊なものにします。お互いに独立に書いていたところから、私があなたを意識したように、あなたも私を意識していました。しかも、二つの相反する極から、放電によって中和する可能性と危険性をはらみつづ

吾妻氏の

感情教育の由紀の印象



われわれは近づいたのです。私たちはどちらも公刊誌の性格を意識し、個人的なものでそれを傷けたり一般読者に迷惑をかけぬよう自制してきました。なぜなら活字は公器だからです。お互いに触れることがあっても、それは一般的な問題のなかにおいてでした。私的といえただ、あなたに自伝を書くようにすすめた私の手紙が編集者を通じてあなたの手に伝わり、私はまた偶然の事情でああなたの「美しい五月に」の肉筆原稿を持っている。それだけです。それがお互いの実在を確認する唯一のものです。そしてその程度のことは

白の最後は次のようなものでした。

吾妻様。私はあなたにこれ以上の愛の書を捧げることはありません。私は現実のあなたを存じ上げておりません。これは私の独りごとと思召して下さい。奇譚クラブの誌上に生れた吾妻新と古川裕子は、どうかお願いですから、永遠に変わらぬお友達であるよう、心から祈りたいと思っています。もし吾妻様がお許し下さるなら、誌上でも吾妻新は古川裕子を愛するとおっしゃって下さい。お願いい

許されるでしょう。他に私たちは直接に相手を知る方法もなく、また強いて知ろうとも、つとめなかつたのです。それが爆発しました。最後の寄稿の「告別」(復刊第二号)で、あなたはおどろくほど大胆に、熱烈に、卒直に語りました。しかも傍若無人とも言えるほど他におかまいなく、8ポ二段組四頁にわたって! 捨身の告

たします。

古川裕子は、そのお言葉を聴けば——いやそのお言葉を読めば、世界の果てまで吾妻様についてゆきます。失礼な、いやな云い方を赦して下さるなら、異常性欲の一筋の道を——長い長い遠い遠い地平に続くこの道を、同行二人、手を取り合って、いつまでも、いつまでも一緒に参りましょう。古川裕子というペンネームの女と、吾妻新というペンネームの男との間については私には何も申すことができません。このことについて見通しをつける厚かましさと自信とは私は持ち合せてはおりません。もし「運命」が二人を結びつけるなら——お気にさわったらお赦下さい——私は素直にその運命をうけたいと思います。もし運命が二人を引き離すなら——いいえ、私の勝手な云い草が、勝手な希望が、かなえられないならば、私はそれに対しても何の不平も申しますまい。私は自分の勝手のために人様に御迷惑をかけたことはありません。ただ運命にまかせるだけ。あとは、どのようにでも「運命」がしてくれるでしょう。

古川さん

私はこれをよんだとき、公刊誌にこれほど思い切った告白をするあなたの卒直さと、それを掲載した編集者の寛大さにおどろいたのです。もちろん掲載されたのはそれが私信というよりも、本誌の読者が熟知している仮名のあなたの感情吐露という点で十分によみものになっていたのであると思います。だが、それにしても、この種の例は他にないでしょう。なぜなら、私にとってはそれはやはり私信だからです。私はよみすすむにつれて、多数の熱烈な古川ファンになにか申訳なさを感じたことを記憶しています。

そうした顧慮を別とすれば、あなたという特異な得がたい女性からの申出に動かされないものがあるでしょうか。通常の世界ではない。まさに孤独の広場です。典型的なマゾヒストであるあなたが、この私に生涯、すべてを捧げようというのです。身心ともに私のものになろうと、すすんで申出ているのです。しかも自己の特異な趣味を捨てて、私の特異な趣味を受け入れ、甘んじて私の意志に一切をゆだねることを望んでいるのです。拒む理由はどこにもありません。われわれは確実に「夜光島」の生活を実現できるでしょう。二人の合意によって、どんなすばらしい生活をつくりだすこともできるでしょう。

ただこのような空想から、読者はどんなイメージを組み立てるか、私はここで、本誌を通してのみ語ることでできる重大なまじめな問題にふれたいと思います。それは吾妻新と古川裕子にたいする、一般的にありうる誤解を解くことにもなるのです。

たとえば旧号で、ある読者はサドやマゾの集会を提案し、緊縛モデルの取扱いを吾妻新にやらせたらどうかと書いていました。そこまで評価されたことは光栄の至りですが、これはまるで見当が外れているのです。なぜなら、私はこの種の集会をただの一度も夢みたことがないばかりか、モデル——職業的であると否とに関係なく——を縛ることになんの興味も持っていないからです。ましてやそれを苦しめることに関心をもたぬどころでなく、反撥を感じるに相違ありません。

私は、これが最後となるかもしれぬこの機会に、サディズムについて語ってきたことをもう一度要約し、自分の考えをはっきりさせておきたい衝動に駆られます。それは、サディズムという言葉にこ

れまで無制限にとりこまれた非人間的な忌まわしい悪徳を、はつきり除外したいということです。サドの思想の再評価が現在行われはじめていますが——これをくわしくのべる余裕はありませんが——それら批評家の試みも、私に言わせれば一面的であって、批難されたものの復権に伴う過大評価がつきまといっているだけでなく、批評家自身がサディストでないための根本的な誤解をふくんでいます。既成道徳や宗教や偽善にたいしてもつサドの歴史的役割と、サディズムの名に代表される彼の感性や考えかたは混同されません。そしてこの後者は文句なしに古いものであり、許すことのできないものです。しかもこの影響は、どれだけ性心理の分野に暗い影を落しているでしょうか。本誌の読者投稿欄にもみられる「軽微な」「穏和な」「かるい」サディズムという言葉からもわかるように、本格的なサディズムはまるでどこかに厳然とした御神体を持ち、狂暴無比な純粋性を誇っているかのようなのです。そして自分たちのサディズムは軽微だから許されるとか、あるいは反対に本物でないなどと言います。また、ほとんどすべてのサディズムと銘打つ絵画・読物・評論・随筆は、いまだに犯罪と血の匂いをもち、冷酷残忍な反社会的な人間の心理や行動を描き出しています。私はそれを否定も肯定もしません。ただ、それが問題なのは、興味本位の描写だけでなく、サディズムとはこのようなものだ、それ以外にはありえないのだという観念をまきちらしていることです。

重症の、あるいは軽微のサディズムという段階論もこのばあいは無意味です。程度がどうだろうと、もしも反社会的な悪徳ならゆるすことができない。だから情状酌量などを求める前に、私たちはもっと本質的に考える必要があります。

サディズムはほんらい性心理の分野の言葉ですが、私はそれを狭義の性生活に限定しています。この限定によってサディズムは一切の反社会的な犯罪的な危険から免れることができます。それはもとと性衝動なのだから単純な暴力とはちがうのだが、狭義の性生活では手段としての暴力すら擬似的なものとならざるをえません。なぜなら、暴力は共同生活を破壊するか、少くとも不幸にするからです。この点を理解しないのは空想的サディストであって、現実を悩める人たちではない。空想の世界ではどのように一方的な残酷なシーンをつくることもできるが、実際生活にそんなものは有りえません。かりにあるとすれば、それは男が極度に低級粗野で、女が信じがたいほど白痴的な無気力な人間の場合でしょう。空想画に描かれる男の顔がみるからに獣じみており、サディズム小説類の主役が揃いも揃って無知無教養なのはむしろ必然的なものかもしれません。ただ、現実の世界はちがいます。かなしいことにこの種の衝動は、教養や節度をもった人間にも、高い思想や正義感の持主にも残存しているのです。暴力を好まず、弱者を虐げるものに義憤をかんじ、男女の平等を真剣に求めるものにすら、有りえます。なぜならそれは性衝動だからです。彼自身の学び取ったもの、思想や知識と無関係に、それ以前から彼の胎内に植えつけられたものだからです。だが彼が理性を失わぬかぎり、自分のなかにある傾向を知っていかに苦しむにしても、自分の思想や教養に反するような無頼漢になったり、力づくで女を屈服させるようなことがどうして出来るでしょうか。

忘れないで欲しいことは、私たちが社会生活をしていることです。性生活はその中のごく一部を占めるにすぎないのです。一緒に生活をする妻なり愛人なりが自主的な人間でなく無意志のドレイだ

ったら耐えられないことは明らかです。サディズムは寝室のなかで、それも性的興奮の状態で生れます。だとしたら空想はともかく現実の問題としては、その表現は遊戯のかたちで現われざるをえないのです。愛するものとの間に行われる性愛の手づきは、ノーマルに見えなければ見えないほど、それが実際の憎悪や怒りとは無関係なのだということを理解させなければならぬのです。

これが実際です。それ以外のものは「暴力」であって、たとえば一つのおなじ原始本能から生れたにしても現在の文明社会ではゆるさ

れないし、持続も

しません。われわ

れは狂暴な本能を

柔げ、順致し、爪

をぬき、技巧的に

処理して、はじめ

て性生活のなかに

取りこむことがで

きるのです。

古川さん

このことはあなたの立場についても言えると思います。マゾヒストのあなた自身、愛情のない加虐はいやだとハッキリ書いて



ていました。また「囚衣」に描かれた夫婦生活がそれを立証しています。どんなにアブノーマルにみえようと、二人の行為は完全に合意の上で行われた遊戯であって、一般的でないにせよ性的興奮で終っています。つまり縄も首輪も開口器や汚れた猿ぐつわも遊びの手づきでありアクセサリにすぎません。それ自体が目的でなく手段であって、ゴム引きレインコートはネグリジェとおなじ意味です。こうした遊戯を週二回ときめたことも、「夫はやさしい人間だった」ことも十分に理解されます。ひとことといえば、それが寝室

——地下室であろうとベッドがなかりと——の行為で、日常生活一切を支配するような人間関係ではなかったということです。

サディストとマゾヒストの共同生活においてすら、一般の想像するような無限の惑溺や相手の意志を無視した暴力がないということはいずれで立証されます。ただ、どちらも相手を理解しているから、ノーマルな相手よりも弁明を必要とせず、遊戯は手の込んだ真実らしいものとなる。意志を奪い奪われたという感覚に酔うことができる。ただくりかえし強調したいことは、その興奮のあとでふたたび自然な人間関係に急速に戻れるということで、むしろその保証が強ければ強いほど、偽りの征服と被征服がなんの罪の意識なく安心して行えるのです。

古川裕子は完全なマゾヒストであるが、意志なき道具ではない。だから「あなたを存分に苦しめてやろう」などという希望者がかりにあったとしても、彼女の人格をまとめぬ封建思想の持主であり、ただ残酷だという低級な非人間的性格だったら、おそらく彼女は満足せず、二人の関係は持続しないでしょう。単純な苦痛はマゾヒストにとっても苦痛だからです。「もの」として扱われるのが複雑な反応を起すのはリビドが相手に定着した場合であり、それが可能なためには日常生活でも幻滅を感じないことが条件です。

ここで、ひとごとのように自分を組上に乗せなければなりません。古川裕子が吾妻新に惹かれた最大の秘密はこの点にあったと思います。彼女は彼が対象を道具視せず、独立の対等の人間としてみとめることを知ったのです。悪党でも残忍でも冷酷でない男が、いきいきした女の感受性を傷けずに、ただ性関係においてのみ特殊な遊戯をもとめる。それはヒューマンな関係を少しも損わない。彼と

彼女は対等の友人なのだ。彼は自分が社会的失格者でないように、相手もりっぱな社会人であることを願っている。人それぞれの寝室を持つようになれば「自分たちの」寝室を持っている。だがその寝室はけっして基本的な平等な人間関係を左右しない。このような考えかたは、およそ人権などとは無視してかかるのを当然どころか必要とすら信じているような従来のサディストの概念をくつがえすものであり、それが彼女の注目をひいたのです。そして彼女自身の結婚生活の体験から、それだけが永続的に楽しめる具体的な関係だということを見抜いたので。

「夜光島」は空想小説だから、どんな奇抜な設定もできるわけだが、そこには残酷な場面は一つも出てきません。刺戟をもとめる人たちはさだめし不満を感じたと思います。しかしこの空想小説はまた実験小説でもあったのです。サディストとマゾヒストが二人だけの世界でどんな生活を営むことができるかという設定です。無限定の自由が生み出した惑溺は、しかし永つづきせず、結局はおだやかな日常生活に溶けこんでゆきます。ただ孤島の生活では寝室の枠がないだけです。吾妻新がリアルだと感じたこの漸次的な平和な状態への移行を、古川裕子もまたリアルだと感じたのです。

古川さん

私はあなた宛ての手紙のかたちで一般性のある問題を扱ってきました。それは単なる私信で誌面を汚してはならないエチケットのためです。だがそれと同時に、私の言っていることは私たちにとって重要なことなのです。あなたは異常性欲者という言葉を使ったが、かりにそれがまちがってはいないにしても私はそういう呼び方を好みません。なぜなら不当な誤解を招きやすいからです。異常性

欲者というとき、世間は異常な人間を想像します。だが人間としての彼または彼女は、他の数百万の人たちと少しも違ってはいないので。くりかえしのべるように性生活は日常生活のごく一部分にすぎず、しかもそれは社会的になんの関係もない純粋に私的な「ひめごと」です。強制・圧迫・暴力があればべつですが、一対一の人間の愛情の満足が合意の上で行われるならば、前戯のかたちを干渉し批判する権利がだれにあるでしょうか。そのへ遊びVのどこまでがノーマルで、どこからがアブノーマルと言えるかすら、大きな問題なのだから。

社会的にひろがっている根づよい危険な誤解は、現実と空想との混同にあります。現実にある形のサディズムおよびマゾヒズムは特定の個人間の性生活のなかでのみ可能なので、たとえどのような奇怪にみえようと愛情の表現の一形式なのです。「人それぞれの寝室」の問題です。だからそれは本質的に、女を誘拐したり、監禁したり、いじめたり、苦悩を与えたり、傷けたりすること——社会的な忌まわしい暴力とは区別されなければならないのです。だが形の上の類似がどれだけ猟奇的な眼を刺戟し、好んでこの二つを混同しているか、その結果どれだけ人間的に致命的なレッテルを貼られているかは、くだくだしく言うまでもないことです。

古川さん

最後にあなたへの本当の私信、返事を書かせてもらいます。私はあなたの愛の告白をよろこんで百パーセント受けいれます。ただこの誌上で、お互いの仮面の下に。

私たちは誌上で知りあい、親しみ、共鳴しました。本誌はご承知のように、一般には口にしがたい問題を自由に語れる特殊な資料誌で

す。当然のことですが、われわれはそこで抑圧された心理の内側だけをとりあげ、拡大して示します。私があるあなたを知り、あなたが私を知るのには、そうした特殊の性心理の一断面です。それはたしかに貴重なものではあるが、全人間的な関係でないことも明らかです。これまでくりかえし強調したように、性生活はひろい人間生活の二小部分にすぎないのだから、その他の広汎な面ではあなたは私を買いかぶっているかもしれないし、誤解しているかもしれない。いずれにしても知らないことは事実です。妙な言いかたをすればわれわれは見合いすらもしていないのです。それでお互いの運命を任せることは、冒険なばかりでなく不誠実だということになるでしょう。あなたもそうだと信じたいが、私も性だけに生きる人間ではないからです。

私たちは平凡な事実を確認しましょう。ある点においてわれわれは理想的な鍵と鍵穴だろうということをみとめましょう。同時にその他の点では何一つ知らない間柄なのだというのも。だとすれば、「春琴抄」ではないが、二人は盲目で触れ合うのです。それが永遠に幻滅から遠去かる方法です。それには本誌を通して語りあう以外にありません。

あなたの沈黙を歎く人たちが多いかも知っていますが、その責任に対しても私はこの一文をかき、あなたにお願いしたいのです。健在ならばどうかまたペンをとって下さい。その日のくるまで、私はだまって蔭ながら見守りつつけることにします。

(おわり)

週刊事件実話 一月十七日号

上流令嬢の行状のバクロ的ルポがある。くだらないことも書いてあったが、少し興味あるところをひろってみよう。

……十九才のあるオーナードライバの



麻生保氏の

生活と意見

麻生保

時評

お嬢さんは、こう語っている。「……車っていうのは本当は生きものなの。それも、物すごく忠実な下僕っていう感じ。私がどこで乗りすても、ちゃんとその場所で忠実にいつまでも私を待っていて、私が乗ってエンジンをかけると途端に生々と動き出

して、どんな所にでも私の意志どおりに行くでしょ。私がつめようと思うとちゃんと止るし、雨が降ったって、雪が降ったって文句一ついわずに、私のいうままになる。そんなところがすごく可愛いし、みがいてピカピカになっている自分の車を、町の

駐車場なんかで見ると、何だか、すべてを許し合った人を、そこで見つけたような気がするの。人間なんかより感情がないだけ、気らくですごく楽しい」

この感情は、ほとんど恋愛の感情と同じことだ。昔の貴婦人が自分のつかっているドレイに対して感じたような秘密の、ある感覚。現代の上流令嬢は、車に対して、そんな感じを持っているようだ。

二十四才のあるお嬢さん曰く。

「乗馬のどこが面白いかって、ちょっと一口には言えないけど……馬って体格がいいでしょ。胴なんか、ふとくて、とてもたくましいわ。その体格のいい馬の体の上に足をいっばいに開いて跨って、自分の思い通りに動かす。その感じがたまらないの。馬だって自分の意志があるし、いうことをきかない時だってある。それを、鞭一つで、自分の思いどおりに動かしてしまう。はじめイヤがって、乗り手をバカにしていた馬が、しまいには、こっちのいう通り、素直になって、どんなことでもするようになる。そんな感じが、馬の背中から、私の下肢を通じて、こっちの体の中へしびれるように伝わってくる。そんな時が乗馬のダイ

ゴ味。私、恋人もいるけど、男のひとって私のいう通りにならないから、馬の方が我儘いえていいと思っちゃうこともあるわ。男を、自分の思う通りに出来ないハライセを馬でごまかしてるのかも知れませんが……」(麻生註・映画「ウインの別離」参照。本誌一九六〇年四月号生活と意見) この他に、ゲイボーイをドレイにして、奉仕させる高級BGの話など。

週刊読売 一月二九日号

グラビヤに、シバタサーカスのスター、柴田幸枝さんが登場、乗馬ズボンに革長靴の写真もある。麻生には特に関心なし。

週刊内外実話 二月三日号

「世はマサに女上位時代」大同小異のルポ。いささかこの種のルポルタージュは、マンネリになって来た。乗馬女性の写真あり。ただペアスタイルに関するくだりが一寸面白かった。即ち、男女がお揃いのスタイルをすることだが、これは、男女同権、更に、女上位を意味する。即ち、お互の連帯感をたかめるというのだが、これがコウじると、ペアで飲むのもペア、家事もペア洗濯も、ペア、愛情の交換もペアという仕儀になる。

「つまり、男って動物は単純だから、ペアスタイルって愛情の十字架にはたちまち感

激しちゃうのよ。そこで、その愛情の十字架を与えておいて、私たちが女神になっちゃうのね。」……ナールホド。

週刊明星 二月五日号

高校生スターの思春期テスト。他愛ないことばかりだが、市川染五郎くん、なかなかいいことを書いていた。紹介の価値あり。

「初恋は何時?——小学校へ入学した時、担任の女の先生に。色白で大柄の、グレース・ケリーのような、きびしい先生でしたけど……」

男の子が、きびしい女教師に恋をするケースは、外国では少しも珍らしくないが、日本ではいささか稀である。それは、外国、特にイギリスなどにはガヴァネスの制度が発達しているし、又、小学校、幼稚園などに、若い女の先生が、非常に多いからである。(一九六〇年三月号生活と意見、一九六一年三月号「尻打ちについて」参照。又、森本氏訳の「残虐なる女性たち」中、「教育者としての女性」参照)

週刊サンケイ 二月六日号

グラビヤに、佐久間富美子夫人が、警察犬の訓練をしているところが、四ページ。訓練服を着て、犬鞭を振って、板壁を飛ばせるところなど。犬党には、たまらない魅力だろう。

女性自身 二月十四日号

アセテートの広告が一寸いかす。小粋な閨牛師に扮した美しい女性。ピッチリした黄色いタイツ、赤い布、長い銀色の剣、驕慢そのもののようなポーズ、強いまなざし。

これも一昨年末、以来、麻生がしばしば指摘して来た、「PR界に於ける性の難破現象」の一例であろう。

「世界の歴史第二巻」中央公論社刊の、一八ページのさしえに、イオニアのプリエネ出土の彫刻が出ている。題して曰く「鞭で打たれる奴隷」。

立て膝をし、鞭を受けるために突出されたお尻。毎日の辛い労働できたえられた逞しい筋肉がもたえ、顔が苦痛にゆがんでいるさまを、極めてリアルに表現し、如何にもヘレニズム時代らしいものである。

フランス小話 (とやま氏に捧ぐ)

イギリス人の学生が二人、北フランスの田舎を無銭旅行していた時の話。お茶が飲みたくなって、牛を飼っている農家を見つけて、入って行った。

「おばさん、牛乳を少し無心させて下さいな。」

「あれ。今日しぼったのは、たったさっき、町へ持って行っちゃったよ。うちにゃ、もう一滴もないだ。なんなら、妾のを、少しあげようかね。」

おばさんは、コルセットをはずして、今にもこぼれそうに張切った、真白な乳房を出した。二人の純真な学生は、赤くなってうつむくばかりだった。

農家を出た時、一人が言った。

「お湯を下さいって言わないでよかったね」

豊原路子著「体当たり男性論」

第二書房発行

内容は、大したことなし。然し、一般男性諸氏が、これを読み、この訓えをケンケンフクヨウするなら、大へんによいと思われる。まあ、啓蒙書の一つと見るべきであろうか。ただし、カバーの表紙が一寸気に入った。ピラミッドなど、古代エジプト風のバックの前で、男性が二人、鞭打たれている。この構図A級なり。

文芸春秋二月号 グラビヤ

北海道日高牧場の娘さんたちから調教を受けるサラブレッド。彼女等の馬装は、全くオソマツで興がないが、調教というものが、如何に激しい加虐行為であるか、又、馬にとっ

て、どんなに辛いものであるか、そして、特に競走馬へのそれは、死の直前までの力走を強いられるということなどを考えると嬉しい写真である。

「馬化マゾとヒップフェチ」

への補遺 (本誌二月号)

——すべての曲線をあらわした彼女の体はギリシャ彫刻のように均整がとれていた。脚は長くて、お尻は見事にふくらんでいて、腹は蜂のようにくびれ、もり上った胸が烈しい身動きをするたびに、ゼリーのようには震えた。(彼女は、男を馬にして来る。彼女はだんだん染めの曲芸師のような服を着ている) お馬の曲乗りがはじまった。殺那殺那に、例の鞭が、時に空を、時に男の毛むくじらの大きなお尻を、ピシリ、ピシリと打ち、お尻にはまっ赤な毛糸の網模様が出来て行った。(中略) 縦横に鞭の血の河を描いた巨大なお尻と、その上に重なっているんだら染めの大きな桃のようなお尻とが、弾力ではずみ、ゆらぎ震えて、眼前一尺の近さを通りすぎた。……(江戸川乱歩作・「影男」)

これは典型的な「ヒップフェチの自乗」である。なお、この「人間馬」のくだりは、全く素晴らしく、この種のものの、古典である

う。

古い話だが、本誌一九五三年十一月号に、金丸莊吉氏が「女の足の魅力」と題したエッセイを書いておられる。極めて断片的なものだが、昔の映画女優、酒井米子の乗馬姿の素晴らしさ——しかもサディスティン、又はフラゲロマニヤとしての——が紹介されている。又、昔のサーカス映画で、馬が如何なる調教を受けて後脚を折って坐るかというくだりを写したものがあった由。もう、八年も前

のものだから、読んでおられない向もあるかと思うから、一寸紹介しよう。

……次は新世界座でサーカス映画、それは馬に跨った娘をカメラは後から見せます。サーカス娘は手綱を片手に足を開いて馬を蹴り、鞭をうつ、すると馬は前へ出よう出ようとする。とたん手綱をしばった娘、馬は彼女の腰下にあがきながら後へ下ります。又、鞭が尻に強く当てられる。（この動作をくり返すと）進退まわって遂に尻を地につける……。

麻生は、無論、年齢からいっても、これ等の映画を見たことがないから、御存知の方にスチールをくわしく御教示ありたく思う。

ところで、どなたか、「片手綱で、馬の尻を鞭打っている女性」を、後から写真にとつて、本誌へ提供なさいませんか？

鞍氏、倉仁氏などいかが？ 倉仁氏なら、デッサンでも、きつといいものが出来ると思いますが——。

サド女性の弁

公開通信

秋葉 マリ (鳥取)

久しく御無沙汰いたしました。最近の本誌を拝見いたしました。いつも痛感いたします。ことはマゾヒスティックな小説なり手記なり其他の少いこととございます。でも九月号以来のマゾフォト特写、田沼しこ男氏の「マゾヒズム天国」並びに山本節夫氏の記事等、二、三、私達サド女性を幾分か満足させる様な配事を掲載していただいて本当に有難うございます。特にマゾフォト(九

月号)だったでしょうか、仰向けに、そり返らせたマゾ男の肩口から首のあたりに馬乗り。に跨って男の髪をわしづかみにして押えつけて「どうだ、これでもか」といわぬばかりにしておられるサド女性のフォトなどは、女性の方が美しいだけに一寸イカスと思いますと同時に美しく拝見しました。其他、圧倒とか肩車によるこらしめ等、大写しのフォトが出ていましたけれど今一つ何か迫力に欠けるも

のがあるのではないかと存じます。

私でしたら、仰向けにそり返った男の首のあたりに跨って、両脚でギュウギュウしめ上げてやりますわ。そして、それでもまだ参らぬようでしたら、髪をわしづかみにして顔をグイと上に持ち上げて、さるぐるわをかまして息がつまるほどいじめてやります。又、同じ肩車に乗るにしまして後からでは体重をかけるだけで、その効果は余りないようです。前面から両肩に太腿をのせて顔をしっかりとさみ込むと同時に、さるぐつわをかませておいてギュウギュウしめ上げるのです。体の重みと呼吸困難なことでは一ぺんに参ってしまうこと受け合ひ

です。

圧倒のフォトなどもマゾ男を亀の子の様に押し伏せないで、もっと仰向けにひっくり返されては如何でしょう。そして、その胸の上にムンズとばかりに馬乗りに跨って両脚で肩口をしっかりと踏み敷いたところなど一層、実感が出て来るのではないでしょう。

田沼しち男氏の「マゾヒズム天国」は心ゆくまで拝見し、感激しました。特に(一)のサド少女のように中年のマゾ男を徹底的にしぼり上げた後に、肉体的な凌辱を与えるところなどは、思わず息がつまりそうでした。でも、事、金銭問題がありますと、何だか私、さもしいような感じがいたしました。で、これだけはどうもいただけないような気持ちになります。相手の男性はただ豊富な肉体美女性にいいめられ、征服され、凌辱されることを望んでいるのですから、何もお金をとらなくても思い切りいいじめてやればそれでよろしいのではないでしょう。か。私でしたら人間馬、正面肩車等でいためつけておいて、のびたところを仰向けにひっくりかえして、顔を座布団代りにしたり、腰掛け代りに用いたりしてやります。そうして、お金をしぼる代りに、しめつけて心ゆくまで征服感を味わいます。その方

がマゾ男としての望みがかなえられるでしょうし私自身も快楽を心ゆくまで味わうことが出来るのですもの。

読者欄にて愛知のサド女性のお方よりの投稿を拝見いたしました。私として又、一人の同志のお方が増えましたことを心からよろこびますと共に、心強く存じた次第でございます。河野由美子様でいらっしゃいますか。私事、米子市にて得難きマゾ男性を飼育することが出来、毎月プレイを行っております。今すぐにでもお会いしたいのは山々ですが残念乍ら名古屋地方には親戚もなく、用事らしい用事もなく本当に残念ですので誌上を通じて今後、同志として貴女におよびかけ致し、いろいろ意見を交換したり体験を発表し合ったり致したいのですが如何でございましょう。初めてお便り差上げます新しい同志のお方のために、簡単ですがマゾ男飼育の契機を申し上げます。

私は或るバーのウェイトレスをしておりますが、昨年の冬の晩に来たお客は呑むほどに私に悪ふざけいたします。最初の中は、いいかげんにあしらっていましたが、あまりひどいことをするので一つビンタをはってやりまして、そのお客は、いきなりからみついて来たので私は生来の勝気から思わず押えつけてやりました。すると急にお客はおとなしくな

り、「かんべんして呉れ」というのではないしてやりました。くだんのお客は急に居すまいを直して坐ると、意外な告白をするのです。

「私は体格のよい女の人をみると無性にその女の人からいいじめられてみたいと思います。どうか、どんなことをされてもいいから、おもちゃにして、うんといじめて下さい」と拝まんばかりにして頼むのです。私も最初は、ただあつけにとられて何だかいやらしい気が致しましたが、余りにしつこく頼むので私の家来(古くさいいい方ですが)にすることにしました。そして、くだんのマゾ男はスッカリ私の奴れいと化し、月に二、三回はやって来て私の足下に跪いてお仕置を待つのです。

私も、あらゆる趣向をこらして、いろいろな方法でこの男をいいじめてやります。私のいきさつは、ざっとこのようなものです。貴女様も色々な体験があなたの事と存じますが、どうか努めて誌上に御発表下さいまして、お互いに交換し合おうではありませんか。

何かとりとめのないことを書きたてまして何卒、御許し下さいませ。でも本当に同志の方が増えたことは何よりも嬉しいことと存じます。

雁金城炎上秘史

戦^{せん}国^{ごく}無^む残^{ざん}記^き

塔婆十郎

1

籠城八十五日目の雁金城内に、不安と焦燥の夜が、またおとずれた。

雁金城主、宮坂式部大輔宗近の娘香織姫は、城内西の丸奥の一室において、いま夕食をしたため終えたばかりであった。

「――楓。修理之介をここへ呼んでおくれ」

香織姫は、やや眼もとを染め、ひかえめな声音で侍女にそう命じた。

「かしこまりました」

侍女の楓は一礼してこの居間を立つ。

まもなく、近侍頭新庭修理之介が、香織姫の前に姿を現わした。

鎧具足をつけたままである。本年二十才の美丈夫も、生死紙一重の緊張につぐ緊張の日夜に、かなりの焦悴がみえていた。

「――姫、お呼びにござりますか」

修理之介の眼が、複雑な感情をこめて香織姫を仰ぎみた。

「――修理之介」

香織姫の明眸も、突きつめた思いにうるんで、静かに修理之介の面上を見すえた。

侍女たちは心得て二の間に退いていく。

香織姫と修理之介は、ひそかに愛し合う仲であった。もとより戦国の世、主従の間柄にあって恋しあうことなど、ゆるされてはいな

い。

しかし、秘めたる恋情ゆえに、せつなく熱い血の流れが、二人の心の深奥部に、しかと通じ合っていた。

「修理之介、気安めやいつわりでなく、まことを言うておくれ。このお城のいのちは、あと幾日保つてであろう」

「……………」

修理之介に、その返答はできなかった。

いま雁金城を包囲している敵軍の将は羽柴秀吉。軍勢はおよそ二万。文字どおり、蟻の這い出る隙間もないほど、ぎっしりと取り囲んでいた。

籠城がつづき、城内には兵糧弾薬が乏しくなっていた。おそらくあと二十日ほどのうちには落城の運命にある。この美しく気高い姫に、その冷厳な事実を伝えることは、修理之介にとってあまりにつらかった。

城が落ちると同時に、この姫の命も絶たれるのだ。もし、息あるうちに敵の手に捕えられた場合には、かずかずの屈辱が与えられた後、この姫の白く細い首も、むざんに斬り落とされるだろう。それが戦国の世の慣いであった。

「修理之介——」香織姫の美しい声音には、決然とした厳しさがあつた。

「このお城が減びるとき、わたしはそなたの手によって死にたい。わたしのいのちを、そなたの手で断つてくりやれ」

「な、なにを申されます、姫」

ひとと平伏し、その麗顔を仰ぐ修理之介の胸は、圧しつぶされたように痛んだ。

おんとし、わずか十七才の姫の、あまりにもいたいけない言葉であつた。

2

つきあがる涙をこらえつつ、修理之介は香織姫の前をひきさがつた。

城内を巡視する時刻がきたのだ。修理之介は夜の庭へおりた。櫓も壁も石垣も、死んだように眠っていた。

将兵たちも交替の者を残して、あとはごろごろと横になつていゝる。食糧の配分が極度にきりつめられているので、なるべく精力を放出しないように動かないでいるのだった。

秀吉軍が夜襲など仕掛けてこないのは、もう城兵たちにわかつていた。秀吉にしてみれば、勝つとわかつていゝる戦さに、へたな攻撃は味方の死傷を増やすだけである。

遠巻きにして糧道を断ち、じわじわと心理的に攻めつける。これが秀吉得意の戦略だった。

——おや？

不気味な静けさの中に包まれた城内西曲輪を見巡っていた修理之介の眼が不審の色で光った。

女が一人、弓に矢をつがえ、狭間から城外の包囲軍陣営めがけて射込む寸前であつた。

——怪しい！

女のそぶりから、とっさに判断した修理之介は、いきなり駆け寄ると、背後から女を抱きしめた。

「待て！」

さけぶや、さっと手刀が一閃し、放たんとした矢を、女の手から鋭く叩き落とした。

「あッ！」

虚をつかれて驚いた女は必死にもがき、修理之介の腕からのがれようとした。

「怪しい女、なにやつだ。いまここで、何をしていた！」

修理之介は女をひきすえて、膝の下へねじ伏せた。そして、女の手から叩きおとした矢を素早く調べた。

矢の先端には、紙片が小さく固く結びつけてあった。まぎれもなく、矢文である。

深夜、敵陣へ矢文を送りこむ女——文の内容を読まずとも、その正体は知れている。

——おのれ、女間者か！

修理之介は膝の下に組み敷いた女の顔を月光にねじむけた。見覚えのある顔だった。

「お前は、厨場くりやばで働いている女ではないか」

「……………」

女は唇を噛んで無言だった。その固い表情が、かえって女の素性をあらわしていた。

修理之介は内心舌を巻いた。城内の炊事

場で働く女が、敵方の間者だったとは——。

とにかく取り調べねばならぬ。修理之介は女をひきたてた。

広間の大ろうそくの灯に照らされた女の顔は、若く艶のある皮膚をしていた。

「女ながらも、不敵な面魂じゃな」

凝視してつぶやいたのは、副将の河合出羽守春貞だった。



「これを——」と修理之介が、れいの矢文を春貞に渡した。

「うむ」

と受け取り、矢文をひらいた春貞の顔色が見るみるうちに変わった。その紙片には城中における将兵配置の模様、その数、および兵糧弾薬の残量が、こと細かに記されてあった。

もはやこの女が、敵方の廻し者であることには間違いはなかった。

3

「その方、名はなんと申す」

修理之介がきいた。

「綾——」と低い声で女はそれだけをこたえ、あとはまた口をとぎした。

「うぬ、につくき女間者め。この女の口からおのれの正体を吐かせるまで、責めて責めて責めぬけ！」

怒り心頭に発した態で、髭をふるわせて河合春貞がわめいた。足で床を蹴った。

真綿で首をしめられるような包囲攻めがつづき、城内の将兵はいらいらと不安の日を送っている。その圧迫された感情が、この若い女間者にむけられたのだ。

綾が肌につけていた粗末な布子ぬのこは、すべて剥ぎとられた。いままで百姓女に変相していたのだ。若いなめらかさをもった皮膚は、そ



の内側に強靱な訓練を秘めていた。

裸にされた綾の腕は、左右とも背中^{うしろ}にねじあげられた。手首ががつきりと重ね合わされた。細目の縄が、その両手首から嚴重な力でくくりはじめた。

太縄では、縄ぬけされる怖れがある。縄の結び目に隙間ができるからだ。

この女、おそらく甲賀か、伊賀者にちがいあるまい。忍者だとすれば、捕えたとしても油断はならない、と河合春貞は思った。

細縄はびしびしと綾の素肌にくいこんだ。くくり合わせた手首を思いきり引きあげたので、両腕の関節はかすかなきしみを鳴らした。手首は肩近くまで極端にしほりあげられて固定された。

綾の顔色はやや白くなり、顎が前につきだされた。さすがに苦痛を感じたのだ。すでに観念したのか、あるいはまだ逃げる隙をうかがっているのか、まぶたを半眼にみひらいて無抵抗だった。

胸にも縄はぎつちりとかけまわされた。乳房の上と下に強い力でくびれこんだ。肌のなかに細縄が沈みこむ。逆に、さして大きな乳房が盛りあがった。

乳房の形は生娘のものだった。女のふてぶてしい態度が嘘のように、うす紅色の乳首は可憐にふるえていた。

これ以上のきびしさはないと思われるほどの強烈な高手小手に、綾は縛りあげられた。これだけ縄に胸が圧迫されても、修練を積んだ肉体のせい、女は呼吸の乱れをみせず、ただ小さな鼻孔が、わずかなふくらみに静かな息をかよわせていた。

「誰か、女を打て。血へどを吐くまで打ちすえろ」

春貞の命令に、塩谷角兵衛という侍が、

「はあッ」

と声をあげた。筋骨りゆうりゆうとした大兵の武士である。片手で三十貫の石を差しあげる体力をもっていた。

角兵衛は弓の折れを手につかんだ。綾の背後につかつかと歩み寄り、その弓折れを空にふった。綾の頭上で、びゅうびゅうと鋭い風が捲いた。

「女、覚悟せい」

重い声で角兵衛がいった。綾は眉のあたりにかすかな縦皺を寄せ眼をとじた。自分の身に加えられる責めに耐えぬく決意が、その白い表情にあらわれた。

角兵衛は一際高く折れ弓をかざした。

みずみずしい肉づきをおびた肩に、背に、しばらくは折れ弓の答が鳴った。皮膚と肉を打ちすすめる答音は、びびしと広間に反響して、陰惨な風が満ちた。肩や腕の肉が、間断なく答を浴びて赤くふくれあがった。細縄にしめあげられて、ぶっくりと盛りあがっている肌へ容赦なく答はふりおろされた。

白い肌に数条の答痕が、赤紫色に刻みついてくねった。意志は固くとも力自慢の武士に打ちつづけられては、肉体がたまらなかつた。意志とはべつに、生身の肌は見る見るうちに傷つき、裂けはじめた。

4

しかし、綾は奥歯を噛みしめ、声を洩らすまいとした。はじめは昂然と胸を張っていたが、角兵衛の力に、やがて負けた。背を叩く折れ弓の苛烈さに、いくどか綾は前にのめった。肩を床にぶつけ、顎を犬のように這わせた。そのたびに縄尻を背後からびかれて、上体を起こされた。

びしッ、びしッと、折れ弓は肉に弾み、肉の内部へくいこむほどの痛烈さで鳴りつづけた。

うめきも悲鳴も洩らさなかったが、綾の裸身は悲鳴以上に悶えくねった。正座は崩れ、やがて膝と膝の間が離れた。尻がぺたりと床に落ちた。

正座を守ることは、女ながらも敵中に入り込む女丈夫の意気地を守ることだった。しかし、守りきれなかった。塩谷角兵衛の答は、嵐に似た烈しさで疲れを知らないもののようにみえた。

「ぐッ！」

ききとれぬほどのうめきを洩らし、綾は答を避けて横転した。足をひらき、踵で床を蹴って、一寸なりとも答の届かぬところへ逃げようと思った。

高手小手に縛られている身ではあったが、蛇がくねり進むように綾は体を屈伸させて答から逃げた。

しかし、無駄なことであった。縄尻をひかれれば、なんの努力も失われて、もとの位置へ戻るのだ。虫の這うよりも、むなしい逃走だった。

乱暴に縄がひかれれば、胸は上にそり、からだの均衡はくずれて足が宙を蹴った。苦痛のあがきが、注目する十数名の城兵たちの視線にさられるのだ。

綾はあわてて両膝を合わせる。するとまた角兵衛は縄尻をつかんでひきずりまわすのだった。

「しぶとい女だ。これほど責めても悲鳴をあげぬとは」

角兵衛があきれたようにいった。さすが力自慢の大男も、肩で息をしていた。額には汗をうかべていた。

「常の女ではありませんね」

修理之介がいった。若い修理之介の眼に、この裸女の苦悶にのたうつ姿態は、いささかまぶしかった。

こんな蛇の生殺しのような拷問をするくらいなら、むしろひと思いに殺してしまったほうが慈悲というものだ、と修理之介は胸中であらう思った。

だが、雁金城の武将たちの憎悪は、いまこの女問者だけに凝固していた。綾のしぶとい裸身が、長期間にわたって自分たちを苦しめ死に追いやる秀吉の化身のようにも見えてくるのだった。

5

雁金城に、籠城八十六日目の朝がきた。大将も兵たちも、夜明けと同時にいつも西方の彼方を眺めた。

しかし、もうとっくに到着するはずになっている毛利方の援軍はさっぱり姿を見せない。援軍がこなければ、兵糧や弾薬の補給もまったく望みがなかった。

朝陽が雁金城の城壁に、嘘のような平和な光りを投げかける。とその城壁の上にするすると一本の柱が立てられた。

その柱には、白くうごめくものがすがりついていた。いや、すがりついているのではない。裸身のまま、うしろ手に縛りつけられている綾であった。

一晩中、沈黙を守りとおした綾は、秀吉軍の真向かいに、その身をさらされたのだ。綾の正面には、秀吉が寝起きしている本陣があった。

これには、さすが包囲軍の将兵たちも、寸時、眼をみはり、息をのんだ。

金色の朝陽を浴びて、むごたらしく輝やく人柱だった。わずかに裾の短い腰布だけが綾の素肌にゆるさされている。

「猿面冠者め、よくきけ。汝が放った女問者は、これこのとおりさらしものになったわ。とくと拜め、わッははは！」

城兵たちは狭間口から顔をつきだし、敵陣へむかって罵声をとばした。ひさしぶりに哄笑した。

綾は眼をひらいた。黒髪が朝風になびき、肌はひえていた。眼下には、秀吉軍の陣営があった。幟や旗差物がひらめいていた。

恐怖も羞恥も、もはや綾の心になかった。縛り縄とともに強く胸に噛みこんでくるのは屈辱感であった。自分の間者としての技倆の拙なさへの口惜しさ、無念さであった。

綾は、秀吉配下の武将黒田官兵衛に雇われた、伊賀透破すっぱの女である。過去に幾度かの合戦、敵情視察に暗躍し、功を遂げた。その功におごり、腹をすかせた雁金城の将兵なにほどのことあらうと油断したための、今度の失敗だった。

——口惜しい！

その無念さのために、舌を噛んで死ぬにも死ねない綾だった。なんとしてでも逃げてやる——という信念が、まだこの伊賀女の胸にある。胸や腕にくいこんでいる縄目は一分のゆるみも隙もないが、それ以上に強靱な耐久力を秘めた女忍者だった。

しかし、このとき——。

秀吉軍の陣営から、いきなり、ダダダダッという鉄砲のいっせいの射撃がはじまった。

目標は、意外にも、城壁の上にさらされている綾の裸身だった。鉄砲玉は、綾の一身に集中したのだ。

「ああッ！」

愕然となって、綾の四肢が凝固した。身動きのならない綾の耳もとを、びゅんびゅんと弾丸がかすめ飛んだ。頭上の柱に一発が命中し、ぱちっとな音がして木片が散った。

——おのれ！

綾の血が熱くなって逆流した。縛られた四肢に憤怒が充満した。髪を逆立てて綾は怒った。

こともあらうに、味方を殺すとは！

あきらかに、鉄砲玉は綾のいのちを断つために発射されているのだ。

その理由は、綾にはすぐわかった。間者としての力を喪った自分の口を、ふさいでしまおうというのだ。秀吉軍の機密の洩れるのを防ぐために。

——なんという、尻の穴のせまい大将なのか。こんなちっぽけな城なんか、今さら何を知られても、又何も仕掛けなくとも、もうすぐには落ちるといふのに！

綾の唇が、わなわなとふるえた。味方の鉄砲に撃ち殺されたくはなかった。

綾は必死になって首をふった。首だけしか動かなかった。四肢はぎゅぐゅと縛られている。縄目の間の乳房が、わずかなゆらぎをみせた。

弾丸は、いっそう烈しく耳もとをかすめて飛んだ。

「ううッ！」

ついに綾はのけぞった。肩と右脇腹に弾丸が命中したのだ。白い肌が、さくろのように赤くはじけ裂け、そこから鮮血がたらたらと流れた。

「おろして、おろしてえッ！」

綾は顎を天にむけて絶叫した。恐怖よりも激怒のために、綾はさけんだのである。

「よし、おろせ。おろしてやれ、早く！」

河合春貞が、あわてて下知した。

勝つためには、いかに手段をえらばぬ秀吉とても、まさか味方を狙い撃つとは——春貞もまた憤激した。

城兵たちの手によって柱が引き倒され、城壁の内側に隠された。
「しっかりしろ。おい、女！」



綾は、手足の縄を解かれて、むしろの上に運ばれた。

「このまま殺してしまうのも哀れだ。とにかく、手当てだけはしてやれ」

一片の憐憫を感じて、春貞がいった。

6

応急の手当てがなされたが、おびただしい出血は、敷いたむしろを赤く染めた。

綾の咽喉は、すでにせえせえと苦しい息をついていた。その息の下で綾がいった。

「こ、この城郭の……西曲輪の石壁の……一つを除くと……城外へ脱出する……間道がある……」

とぎれながらも、重大な言葉を告げて、綾は絶命した。

秘密の抜け道！

この伊賀の女忍者は、城主も知らぬ間道を嗅ぎあてていたのだ。なんという鋭い嗅覚。これで綾が城内へ潜入し

てきた経路が判明した。

「調べるのだ、その抜け穴とやらを！」

春貞が、うわずった声で命令した。

綾の言葉が偽りでなかったことは、やがて確認された。石壁の裏に、その秘密の間道はまさしく存在したのだ。

城主、宮坂宗近は狂喜した。

将兵たちは城を枕に討死を覚悟している。しかし、父親として香織姫とその侍女たちのいのちだけは、なんとか助けてやりたかったのだ。

宗近は香織姫を呼び寄せた。

「よいか、そちはこの抜け穴から城外にのがれ出て、一命を全うしてくれい。宮坂家の血筋を絶やさずば、いつかは秀吉めへ報復の折もあるう。たのむぞ、香織」

この宗近の言葉に、姫は泣きむせんで反対した。玉の涙が膝を濡らした。

父上や家臣たちと一緒に、城と運命を共にしたい、と香織姫は哀願した。その胸中には恋しい修理之介のそばで死にたいという、娘らしい願望もあった。

しかし、宗近は語気きびしく娘を叱り、説得した。香織姫は、泣く泣く承服した。

五名の侍女に守られて石壁の隙間の抜け穴から、ひそかに城外へのがれ落ちていくのだった。悲惨な親娘の別離である。

おもだった家臣が、姫を見送った。

——ご無事で！

誰よりも熱い心で、それを念ずるのは修理之介であった。

7

その翌朝。

城壁の狭間から、なにげなく秀吉軍の陣営を見おろした城兵たちは、愕然としておのれの眼をうたぐった。

六本の礮柱が、城兵たちの眼下に、ずらりと並んで立っていた。

真新しい白木の十字架だった。一夜のうちに立てられたのだ。

その礮柱には、香織姫を中央に据え、左右には侍女たちが素裸にひとしい姿で縛りつけられていた。凄惨な光景だった。

両腕は左右に大きくひろげられ、胴から下は垂直に伸ばされて、嚴重な縄でくくりつけられていた。

あきらかに、昨日の綾に対する処刑を真似た報復だった。秀吉らしいやり方である。

抜け穴からの脱出は、失敗したのだ。その脱出口を監視していた秀吉軍の兵士に捕えられたのだ。包囲軍の網は、さすがにぬかりがなかったのである。

たかだかと宙にさらされた香織姫。一筋の汚れもない十七才の肌は、いま敵味方、数多くの男の眼にむさばられている。

つつましかかな乳房のふくらみも、白絹のように高貴な香りを発する腿も……

異様なのは、姫をはじめとして侍女たちの裸身に純白の褌がなされていくことであった。女に褌をさせて十字架に縛りつける。全裸にしないのは武士のなさけか。それとも逆に、屈辱を与えてなぶっているつもりだろうか。

六人ともすでに生きた心地を失い、礮柱の上に蒼白な顔を貼りつかせていた。その表情からは、すべての羞恥をあらわにされた以上の羞恥が、まさまざと感じられた。

一陣の風が、香織姫の裸身をなぶった。

三尺余もある長い黒髪が横になびいた。白い腹が苦痛の呼吸を示していた。

やがて、その香織姫のくくられた柱の根もとに、武将とおぼしき一人の侍が立った。

そして城兵にむかつて大音声でどなった。

「おどろいたか、雁金城の腰ぬけどもめ。姫のいのちが惜しくば、城をすてて降伏せい。無駄なあがきをいつまでつづけるつもりなのだ。どうしても降伏しないというのなら、この槍で一寸だめし五分だめし、姫の肌を突きなぶってくれようぞ。さあどうだ。この乳房から突いてくれようか」

侍は右手の槍を高くさしあげ、陽を照り返して光る穂先を顎の下にあてがった。

城兵たちの眼の前で、なぶり責めにしようというのだ。喰うか喰われるかの戦国の世に、このくらの残酷は珍らしいことではなかった。

穂先が朝陽にキラリと光った。

「ううむ、待て！」

思わずうめいたのは、雁金城主、宮坂宗近だった。顔面は死人のように蒼白になり、握った拳はぶるぶるとふるえていた。父親の身にとって、無理ではなかった。

「誰かある、香織のあの苦しみを、とり除いてやってください。香織の息の根を早くとどめてやってください！」

悲痛極まった声だった。

しかし、城主のこの命令に、誰も従う者はなかった。

宗近は狂気のように、同じ絶叫をくり返した。次第に悲鳴に似た声音になっていった。

家臣の誰もが、宗近の胸中を察していた。

敵の手になぶり殺されるのなら、いっそ——という悲愴な親心である。

「いないのか、姫の苦しみを救ってくれる者は誰もいないのか！」
狂気のように宗近はわめいた。

「殿、拙者めにお申しつけください！」

そのとき、一人の若武者が城主の前に進み寄った。修理之介だった。

修理之介は静かに鉄砲をとりあげ、その筒先を狭間口から城外へむけた。

礮柱上の香織姫の胸に狙いをつけた。

敵も味方も声を失った。静寂が天地を支配した。

——姫、すぐに拙者めもお供をします。おゆるしなされてくださりませ！

修理之介の銃口が、轟然と火をふいた。

香織姫の白い胸に、真ッ赤に濡れた花が、叩きつけられたように咲いた。

一瞬、水を打ったような静寂が、悲愴な重圧をはらんで両陣営を包みこんだ。

この日から三日後、雁金城は炎上した。城中、千三百の将兵は、ことごとく討死した。

(おわり)



△女形時代の思い出▽

私の体験告白

阪東秀美

私は二十年程の前に某田舎巡業の新派劇団に入っていた経験があるのですが、入座してから女形となり、その当時の未だに忘れられぬ大変な思い出話をこの拙ない一文に綴り、

女装への憧れを持つ方々への絶ちがたい誘惑の記とするものです。巡業中には色々と素人さんには想像も出来ない出来事もありましたが、この告白は中でも特に私の半生に重要な思い出のものなのです。

私の入団した理由も幾つかありましたものの、特に言えば小さい時からなまじ美少年と呼ばれる部にあった故か、役者という者には

異常な憧れを持っていました上に、とに角、舞台の女形の妖しい魅力にひかれたのが間違いない所なのでした。

中学校卒業間近かになる頃から田舎芝居に巡業して来る新派、旧派を問わず舞台で男と女ともつかぬ美しい女形が、肌も露わに責められる妖美の姿や、身も世も非らず美しい「かづら」の髪を散らして濃く刷いた真白い背の奥までのぞかせて身をよじって泣き声を曳く姿、はては客席まじかな花道で衆目の中で白い手を突いて崩れ伏す女形のまなざしなど、そして役者になりたいと最大の誘惑を感じ

じたのは、泣き伏した女形が明るいうらやまを浴びた美しい顔で、本当の涙を流していた凄艶さなのでした。私は男が衆目の舞台で、本心から女になり切って泣く妖しい倒錯の世界に、酔ったように惹きつけられてしまったのです。

卒業の一、二年あとで無断で家を飛び出した私は、遂に某一座に入ってしまった。座長と立女形が、私の美少年ぶりを認めたという事だったのでしょいか。

手不足の一座で、荷物運びやら、仕出し程度の男役などで半年がすぎて、不図した機会

に演しものの都合から、はじめて女の役を与えられました。

舞台の末座で少し動いてすぐ引込むチョイ役でしたが、私はその女役のために一生懸命のつくりをしました。化粧のしかたは、立女形さんのを毎日見ているので大体はわかっていました。私の濃い眉も固形の眉つぶしで潰せますし、女役は一般に白粉も濃いので胸も

とや背の奥（これは男衆にして貰いますが）など、少し広く塗ればよかったのでした。濃化粧するのに下地へポマードを淡くのぼして肌へも広げておくと、練りなどが真っ白くつくのです。

出来上りの私は座長や姐さん——（私が毎日仕えている立女形です）——までがアツと見とれる出来栄えだったのです。でも初めて

の女としての舞台の動きや声にはやはり無理があつて、自分乍ら男としての意識が捨てられないものですから、私は全身が汗でびっしよりの有様でした。

でも、その日以来、本当に女形見習いとなれて、師匠姐さんにだけ付き添うことになれたのです。

師匠が役むきによって化粧を変えたり身ごなしをかえると、色気も違うのを毎日見て、舞台上で一生懸命やってみるのですが、私にはどうしても出来ませんので座長さんや幹部連が師匠の前で「未だ腰が出来てない！。あの手の動かし方はなんだ！」と殆んど毎夜の様に叱ります。師匠はあの美しい顔

を落し乍らニコツと笑って「そりゃ仕方がないよ、あたしだってはじめはそうだったんだものねえ」と言うのでした。

こうして今日も又……と、悲しい気持で師匠の化粧の手伝いをしていますと、師匠も私の気配が感じられるのか何か言いたそうな様子でしたが、舞台仕度に追われているのでそのままになりました。その日の師匠の演しものは明治一代女の芸者風でやや崩れた色気の場面となるため、練白粉も真っ白く塗り、師匠の肉付きのよい肌へまるで嘘のように白粉がのるのを、不思議な興奮を覚え乍ら牡丹刷毛を使っていますと、顔のつくりを終えた。二重の師匠の美しく紅の引かれた眼が、私へ振り向き

「秀さん！私の芸名！早く女になるにはね、客に女らしく見える事も大切だけど本心から女になり切れなくては駄目なのよ」と言うのです。私は牡丹刷毛の手を止めて

「はい、そう思っても仲々……」

「ほらね、秀さんにはあたしが女に見えるだろう。あたしは前にお前さんがいようといまいと、本心、女になり切れるのよ」

女のような師匠の耳たぶに、ほんのり紅が浮かんで来ました。そして言うのです。



筆者の師匠、阪東美也の舞台姿

「一度お前さんに本当の女になり切れる所を見せて上げようと考えているのよ。そりゃアあたしにだって一寸恥かしい事なんだけど慣れてるから、でも秀さんにはどうかしらね、きつと恐ろしいと思うだろうよ。これはね、めったにやらない女形さんの舞台ならしんだから……」

「それはどんな事なんです？、もうどんな事でもしますから。早く人並みに勤められる様になれますなら今日にでも……」

私は師匠の真っ白い肌ぬぎにクッキリ紅をさした唇が、男とも女ともつかぬ美しい声で言う言葉に酔った様に返事をしました。

「これが終ると秀さんはきつと完全な女になるわ。あんたの様に私でもホレボレする顔が出来るんだし、肌のりもとていいのだからその上に芸が出来りや座長に言っただけで舞台を使って見たいと思ってたの。あたしは秀さんが女にされる処はどうしても見たいのよ。あんなに毎晩、叱られてるのは辛いわ。でも昔にあたしが一度あったきりでね、秀さんには切り出しにくかったからね……」

「姐さんがやったことなら、是非やらせて下さい。あたしを仕込んで下さい！一緒に舞台へ出れるなら死んでもいい！」

私も夢中でした。この美しい人と姉妹の役で演れるのなら……そして姐さんが舞台で泣く姿を私もきつと……と、そのめったにない舞台ならし、というのをしてくれるように頼みました。

「どんな事になってもいいのね。本当にあたしとの舞台を演る積りならどう恥かしい事になってもいいのね。秀さんとの舞台ならしはどんなかしら……あたしも一緒につとめてあげる……」

師匠は真っ白い手で私の手を引いて自分の膝の上へ持って行きました。

四、五日すると先き乗りさんの手違いで田圃の中にあるボロ小屋館でのドヤがありました。仕事はこの日が休みとなった訳です。

宿までは一寸遠いので楽屋を三間に分けて一同が泊る事になり、その夜、ほの暗い電灯の下で私の昇格試験となった舞台ならしがはじめられることに決まりました。そして師匠が一緒になってくれると言うのですが、この

化粧前の師匠、阪東美也



一夜こそ私にとって恐らく例のない、生涯で一番印象にのこった一刻だったのです。

夕方に座長の言いつけで私は師匠と共に一番風呂へはいりました。楽屋風呂のせまい流し場で師匠の背を洗ってあげます。連日の濃い化粧が肌に浸みこんだのを力を入れて落してあげたのですが、私は二十才、師匠は私より五ツ六ツ年上。私の女形としての肉付きもよかったです。でも素顔はきりりと引きしまった驚きます。でも素顔はきりりと引きしまった男前で、よく言う女形むきののっぺり顔じゃありません。楽屋を出るとそのまま立派な男

化粧中の当時の筆者



で通るのに、どうしてこの人があの凄艶な舞台を見せるのか不思議な位なんです。

「今夜はネコ（芸者）のつくりをしる、特に念入りにな。男衆は二人つけてやるからその積りで——」と座長は笑いました。

座長と師匠と幹部の二、三人が別室に引取り、私は他の方々の見ている処で化粧にかかりました。特に念入りに……と言われていた

ので、愈々舞台ならしが始まるのだ……と妖しいトキメキと不安が湧きますが、やはり下地をして濃い白粉を刷き出すと、不思議に落ちつきます。

どうしたのか私の背を塗る男衆のタツプリした板刷毛はいつもより深く、殆んど腰までを真っ白く塗りあげ、果ては二人がかりで上半身がとうとう人形のように仕上げられてしまいました。舞台ならしとは余程の儀式？のようでした。

私も顔は遠目の舞台顔をやめて身近で見れる工夫をして見ましたが、羽二重刷毛のままに私は鏡の中で、もはや真っ白い半裸の女になったのです。いつものように姐さんゆずりの胸当てをします。白粉の色に合わせて包まれたそれは本物のように出ていて、ぴったり締めると合わせ目が薄く貼りつくので細い止め紐さえなければ私の身体の一部のように息づかいをする程なのです。それから、腰の下辺りまで同じ様に塗られ

薄い布の一枚だけで腰を覆っているだけにされました。

白粉がはげない様にと薄い肌着をつけ、男ものは勿論、一切許されません。そのまま紅の腰巻が捲かれ、立てじまの着物……そして帯、見る間に私のつくりは出来上りました。かづらを合せて背へ長く襟足を油墨で書き、一人の若い芸者が出来たのでしたが、「秀さん、こりゃ一寸したもんだぜ。こんなのは師匠の時以来、見たことがない。今夜はしっかりやんなよ。」

と肩を叩かれた時は、思わずホッと気がゆるんで無意識に舞台の型で横座りになってしまいました。鏡の中の私は余りにも美しい女になっていました。

と、別室でどうも師匠のような声がしましたが、何となく上づつたそそられる調子だったので、男衆の顔をうかがいますと

「なあに大した事じゃあない。今、師匠に女の魂が入った所さ。もう師匠じゃアないよ、お前さんの姉芸者さ。よく勉強するんだぜ。」と小さく笑います。

間もなく隣室から座長が出て、すぐあとから男衆に手をとられて師匠が出て来たのですが、その姿に思わずアッと声をのみました。

それは日頃、見なれた舞台姿の比ではなく余りにも濃艶な妖しさだったからです。師匠も全身化粧をされたのですが、どうしたのか折角の着付が、襟はグイッと背の半分ほどに抜け、真っ白い足首へ着崩れた湯もじがからみつく程なのですから……。そしてしっとり汗ばんだ襟あたりへもおくれ毛をねっとりからませ、そのなまめかしいことは恐ろしい位い。

「師匠、全く驚いたよ。大した崩れようでうっかりとやっちゃったが、あれじゃアこっちも耐まらねえよ。」



鳥追女に扮した当時の筆者

と幹部の弥之さんが言いますと師匠の耳にカッと血が上った様です。

どうしたのか？。そう言えばさっきの師匠の声は舞台でも聞きなれない上ぶりようだったが……。私は未だわかりません。

さすがに私の仕上りは意外だったと見えて座長も唸りました。師匠も「まあ、秀さん！」と呆れたように見つめます。私も師匠の姿にさっきの男がこんな……。と自分のことは忘れてしまつて「姐さん……」と呼びました。私の横へ横座りになった師匠をウツトリと見とれていると、座長が言い出しました。

「さあ師匠も秀さんも始めるぜ。秀さんは一寸びっくりするかも知れないが、ほんの三十分の辛棒だから、よく師匠の様子を勉強するんだ。師匠にゃあこんな妹役が出来るんだから道づれだが仕上りをタツプリ楽しんで教えてやりな。こりゃ久し振りにいい子が出来るぜ。」

するとまわりにいた男衆がいきなり師匠へ飛びかかると、引きまわした荒縄で肌も露わな背や白い腕をグイとねじり上半身が身動き出来ぬほどに捲き立てて力一杯締めあげたの

です。私の驚く目の前で師匠の身体に血のにじむ位いに荒縄は食いこみ、さすがに師匠は濃い白粉の咽喉に筋を浮かせてのけぞり「あーッ」と声をしばって痛みをこらえます。そのためにいつしか師匠の腰から下が膝で紅の湯もじを割って、むき出して来るのです。

次に私に縄がかかりました。いきなり襟に手をかけ背から引きはぐり、その上をウムも言わさぬ荒々しい力で締められたのですから師匠のように耐えようと覚えず「痛い！」と声をあげると、不意にびしッと縄尻が私の背に振り叩かれて息がつまりました。

「馬鹿だな、痛けりや痛いでもっと女らしい悲鳴をあげろ！。こんな格好してても男の根性が脱けないのか。よし子Ⅱ（私よりずっと年上の下まわりの女形さん）Ⅱ遠慮するんじゃない。お前も似たような役まわりだから小面憎い程にひっぱたいてやりな！」

それから腰つきがどうの、色気がどうのと言つては、二人がかりで私を縄で力一杯叩き苦しめ、襦袢を通して来る縄の食いこみに気が遠くなる程引き倒したりされました。私は舞台ならしと言う意味がはっきり判りました。こうしていじめ抜き、うめき声まで女にされれば一夜で女の心境にもなる訳なんで



す。私が叩かれる度に師匠も縄のムチを肌に受け、女になり切って、一緒に痛みを耐えて身をよじり狂っています。でも不思議にいつの間にか私は痛みのうめき声も女のものとなり、衆目を浴びて衣裳の裾が乱れに乱れる恥ずかしさも忘れそうな陶醉に入ってしまったのです。

全身はジっとり汗ばみ、崩れた髪が散り、肌へねばりつく中で、いじめにいじめ抜かれることに悦びを感じたのです。

顔を伏せると、髪結いのおばさんが私の上気した顎を上へ引き起こし、妖しく光る眼つきで私の顔を眺めまわし「まだまだ本ものじ

やあない」と叱りつけます。はげしい縄鞭の雨で、私の上半身は胸あてをのこして着物は殆んどずり落ち、濃い肌白粉の下から赤くミミズ腫れが凄惨に這いまわり、もはや殺されてもいいとさえ思うのでした。

やっと身をよじって隣を見ると丁度、姐さんも身を起して私を見ました。姐さんは私が凄艶な乱れの中で遂に女にされる瞬間を見たことでしょう。でも師匠のいじめ抜かれた姿は水色がかった舞台衣裳も紅の襦袢にからんでもはや双肌を出し、汗に光る襟足が物凄い位いになまめかしく痛ましい縄の跡を見せています。そして夢中に耐えている中に白い足がほとんどむきだして落花狼藉の崩れようでしたが、これが男であろうとは、こへ不意に來た者の目にはとても信じられずまい。師匠は私の顔を見て「ああなんて可愛いものよ。さ、自分を鏡で見るの……」と言います。

私は、余りの激しい試練にすっかり忘れていた横の大鏡をのぞきこみましたが、その自分のいたましい姿に思わず「ああ、もうあたし……」とそれこそ本心から女になったよう

な気持ちになれ、思わず声をあげました。

鏡の中の若い芸者……汗ばんで肌に浸みこんだ真っ白い白粉に乱れ髪がからみ、乳房も露わにはみ出して痛々しい縄が締めたてられ上半身はムチの跡で赤い筋だらけ。これが私なのかと疑う程、妖しい姿でした。

私は座員が見守る中で身もだえました。

「秀さん、あたしが女にされる所を見せてあげる！ えーもうどうでもしてー」

がつくりと伏す姐さんに、男衆の手の縄尻が続けて二度、三度と白くよじる腰のあたりに唸って振り下されると、これが止めになったのか「うっうっ」とはげしく肩をふるわせ声をしぼり出しつつ「えい、もう殺して……」とはげしく泣き出したのです。姐さんの乱れに、私はもう見栄もなくのけぞって「ああ、もっとあたしをいじめて……」と言うなり、耳まで血をのぼせて打ち伏しました。

「どうやら秀の仕上げだぜ、早く……」

座長の声で一人が縄を持って近寄ります。私は縄鞭の雨の下で、倒錯の悦びに溺れ、遠ざかって行く神経の中で私の名を呼ぶ師匠の叫びを聞いていました。

私はこの夜以来、目を見る程舞台が楽しくなりました。もはや誰に遠慮のない座長秘蔵の女形になったからでした。それといじめ抜かれ、男としての最後のものを捨て切った

自信が、舞台化粧にかかる瞬間から見事に女へ転身出来る様にもなったのでした。

師匠の演しものも新しくなり、もはや私がいなくては出来ないものが多くなりました。ポスターに刷られる、私の名前は大きくなり私は師匠と舞台では血を分けた妹のように、舞台以外でも本当の弟のように可愛いがって戴きました。

師匠は舞台で、私と共に本当に泣き、本当に血を流させて抱き合ってくれたのでした。これもあの激しい試練を共にして、男を捨て切った私への新しい愛情だったのでしょう。でもその後二度とあの舞台ならしは行われ

ませんでした。私ほどに思いつめる志願者も

見当らなかつたのでしようし、丁度、一座も時局には逆らえぬ戦雲の急を感じて来た頃だったのです。巡業というものも段々少くなり私達のような小さい一座は新しく合併される時局ものに消えて行ったからです。

私は今では一家の主人となり、本来の男へ戻ってから久しくなりましたが、師匠とはあの解散のあとは逢ったこともありません。楽屋へ訪ねて来たファンが写してくれた貴重な当時の師匠の楽屋でのスナップが、唯一の思い出になった……と懐しんでいるのです。でもあの妖美と刺激に倒錯した一夜への郷

愁は仲々に忘れ得ません。今は昔、機会を得

ては、當時を一人で再現しようと濃化粧の一時を過ごすのですが、あり合せの道具さえ持たぬ悲しさ、男に戻ってしまった身の固さでは往時のことはもはや遠い夢のものですが、あの試練の強烈さを、私は今でもまざまざと思い起すことが出来るのです。

官能映画時代、大抵の女優さんが全身化粧をして色彩場面に登場して来ます。でもあの一夜の師匠の妖艶さを、再び見れることは望むべくもないのです。

二十年近く過ぎてしまった私の貴重な体験なのです。
(終り)

公開通信

同性を押え込んで

三 隅 千 恵 子

御誌の御発展を心からお喜び申し上げます。読者の皆様方の素晴らしい御活躍を眼の前にしますと、久し振りで通信を差上げてみたくなりました。

私、たった一つだけ、是非お願いしたいことがございます。女だてらに、こんなことを申上げるのも恥しいのですが、一昨年

の三月号に、私が書きました「変ないたずら」という一文を載せて戴きましたわね。あの中に小さいながら挿画が一枚載っていたでしょう。ホラ、黒い半袖ブラウスに白いスカート、黒いハイヒールをはいた泰子さんが、白いワンピースに白のハイヒール姿の桂子さんを仰向けに捻じ倒し、喉首の上にどっしり

と跨って、顔を太腿で挟みこんだ素敵な場面でしたわ。下敷かれた桂子さんは、泰子さんの膝の間からやっと顔をのぞかせて、口惜しそうな表情で、しきりにもがいている様子が全く美しく描かれていたでしょう。

私はあの絵が大好きで、勿論、今でも大切に保存し、時々取り出して眺めていますわ。私のお願いは、あの絵と全く同じ光景を写真におとりになって、誌上に載せて頂きたいということです。実現して戴けませんかしら？女性が男性を下敷にしている写真でしたら再々お見受けしますけれど何となく馴れ合いのプレーじみでいて真剣味が少く、私にはいささか物足りないの

す。やはり、力の限り必死に争った上で、力のまさった方が、非力の方を組み敷き、くやしがる相手を「どうだ、これでもか」とばかりに屈服させるのでしたら、どうしても女性同志でなくては駄目のような気がしますわ。

それから、同年の四月号には「変ないたずら」の挿画に、私が描きました四枚の絵をそのまま載せていただき恐縮いたしました。たが、あの絵はともかくとして、あのポーズは大好きですよ。私が美しい泰子さんを海老責めでギューギュー押えつけて、顔の上にどっしりと跨った第四図などは、今見直しても、私、頬がカーッとしますのよ。

泰子さんは、殆んど顔全体がまともに私のお尻に敷きつぶされて、呼吸も出来ず声も出せず、ほんとうにグーの音も出なくなっている、見るも哀れな姿でしたわね。ああいった光景を美しい写真にしたら、あんなつたない絵とは違って、どんなに見事かしらと思えてなりません。

私は時折、同性のお友達をあんな工合に組敷いてやりますが、こうしますと、女の力では絶対、跳ね返すことは出来ませんし私はじっとしていても、体重で相手の首が締まるのですから楽々と組敷いた相手を苦

しめることが出来て、とても征服感が満されるのです。それに脚に挟んだ相手の丸い顎のあたりが、口惜しさにヒクヒクとけいれんして、身もだえする度に眼から一筋二筋と涙を流すときの快さは、何に例えようもない位ですわ。でも、力尽きて、ぐったりになった相手の紅潮した顔を敷き潰すことは三度に一度位しか出来ませんのよ。なぜって、そのまゝに相手がくやしませに「ワッ」と泣き出したり、大声を挙げたりして途中でよさなくてはいけなくなりますわ。それでも、女が女を力づくで屈服させるには、これ以上の方法はないと思います。ただ、こうした場合、相手はドンパタンとあばれ、もがきますから跳ね起きられないように充分注意する必要がありますわ。そのかわり、こうして数秒間、押え込んでやれば、きっと相手はフラフラのグロッキーになることは間違いありません。組敷かれた相手が、こっけいな格好で真赤になった額に青筋を立てながら、眼を血走らせて「ウッ、ウッ！」と呻いている光景を御想像になって下さいませ。殊に相手が美人であればあるほど、素敵なみもので私は優越感に胸がスーッとしますわ。

この場合、パンティはなるべく薄手のものの方が、こんな時の私の気持にぴったりするように思いますので、私は極く薄手のナイロ

ン製品を常用して、そんな時に備えています。タイトスカートは括がりにくいので決して着用せず、殆んどプリーツスカートばかりです。

でも、どんなに親しい間柄のお友達でも、一度、こうして組敷いてやりますと、すっかり御気嫌を損じて、それ以後は殆んど言葉も交せなくなるのは、ほんとうに困ったことなのです。ですから同じお友達を二度も三度もというわけにはどうしてもゆきませんのよ。私に力づくで負かされて、さんざんな目に遭わされたからといって、そんなに私を怨みに思わなくてもいいのに思いますが、そんな点では女同志では駄目なのでしょうか。

女だてらに、あつかましいお願いをしたり、あられもないことを書いたりで、全く恐縮に存じます。おゆるし下さいませ。

私の本名は、三隅千恵子とは申しませんが、若し万一、自分の書いたものが、お友達に読まれたり、知人に感ずかれては大変ですから御容赦戴きますように。だって私も普段は極くありふれた、まじめで優しい女子事務員なんですから。

では、皆様、お元気で。いずれまた、お便りを差上げます。

新
稿

ある夢想家の手帖から

沼

正 三

第二十七章 女のズボン

すべての男は女装し、すべての女は
男装すべきである。

——エカテリ十二世——

第二章で引用したザックスの「ひどい煙」の中で、夫婦が下穿きを争う条りがある。原文はホーゼ (Hose) で、ももひきズボンのことであるが、何故そんな情景があるのだろうか。それには、第二章で紹介したトーマスの二脚韻詩の第三行を見て欲しい。「うちでは婦唱夫随なの」と訳してあるが、この一行の原文は、*Sie: Ich hab ju laus die Hosen an.* (直訳すれば)「女—家でわたしはズボンを書く」となる。これは嫌天下を示す西欧共通の表現である (附記第一)。そこで夫婦でホーゼのペナントを奪い合うことに



もなったわけなのだ。長い服装の歴史を通じて、つい最近迄、西欧婦人の腰を纏ったのは常にスカートであり、ズボンは男性の専有だった。そしてその故にそれは父権社会における家庭主権の象徴たり得たのである。フックス、モレック、シドロヴィッツといった人々の風俗史関係の著書には、「ひどい煙」の場面そのままのズボン争奪図や、ズボンを穿いた妻が椅子に掛けている前でズボンを取られた夫が子供の世話をしている図などが、枚挙にいとまない。

こういう歴史的背景を考えると、近頃の風俗として女がズボンを穿くのが日常化してしまった事實は、マゾヒストとして看過し難い。戦後のスラックス風俗は、その直接の流行の原因は、戦時中のもんぺ時代に、下ごしらえができていたこともあろうし、直接にはアメリカからの流行の輸入に追隨した面もあるが、そのアメリカの占領下に男女同権が憲法化され、婦人代議士が大量進出したのと時期を同じくしたのは偶然ではなかった。戦後の日本で強くなったのは女と靴下だといわれる。その女性進出の風潮については度々(第二章、第五章)述べて来たとおりが、それがスラックスの普及と進歩を共にしている様だ。そして「どんな理由からにせよ、女がズボンを穿いたということは大きな革命だった」(村上信彦「女について・反女性論的考察」)(註)。

(註) 村上氏には「歪められた性」や「服装の歴史」の如きものと適切な著書もあるが、それらの発刊前に私は吾妻氏との論争でこの本に言及(二八年一二月号)したから、ここでもこちらを引用しておく。

マゾヒストは、この革命にマゾ的福音をきく。何故ならそれが女権拡張に結びついているからだ。女権拡張の観念そのものが既に、

マゾヒストには楽しい興奮を呼び起すのである。思想として見た女権拡張ないし男女同権運動は極めてノーマルなものとされているから、関心のない方には奇妙に聞えるかも知れないが、「婦人解放とその性的基礎」を書いたエベルハルトは、英国で婦人参政運動の激化した時期と女性の鞭撻愛好者の輩出が風俗史に一時期を劃したのとが同時代であること、奴隷制下では婦人運動の起った例はなく、奴隷制廃止で家庭婦人の支配加虐欲の捌け口がある程度、閉め切られると他方で婦人運動が起って来た。即ち「近代女権運動の母たる米国の婦人運動も、南北戦争後、奴隷の解放を見て以後初めて完全な出発をした」こと、その他の諸現象を挙げ示して、女権運動の基礎にある女性の支配加虐欲を指摘すると共に、逆に、男性にして女権論を唱えるいわゆるフェミニストの中に多くのマゾヒストがあり、勿論、正面切って女性への男性屈従を説くのでなくさしあたっては「唯」男女同権を要求するのみであるが、終局目的は完全な女性支配国家を無意識に理想としているのが多い、と喝破している。こういう女権論者の一人に属する私の目には、さしあたっては、「唯」男女同権の象徴に過ぎぬ女のズボン姿も、来るべき女性支配国家——そこでは題辭に引用したカタリ十二世の予言が実現されることになるだろう——を夢みさせてくれるのである。

リチャード・パートンは、千夜一夜の注釈(第二一夜)で、オリエントにおける男女の服装に触れて、「突起物を隠さねばならない男が股なしの袴をはき、女はズボンをはく」ことの方が常識に合すると、説いているし、「衣装論」のエリック・ギルの様に、美的觀察から男にスカートを勧める人もあり、前記の村上信彦氏の様に、歴史的見地から女のズボンを肯定する人もあり、服装の問題は結論の

みからは云々し難いが、例えば、右のパートンと同じことを、自身女装してゐるので有名な花森安治氏が次の様に説くとき、フェミニスト的男性に対して持つ女のズボンの性的意義は思い半ばに過ぎるではないか——

人類には、高級低級二種類ある。高級人類を^{ホモ・フエミナ}女性と呼び、低級人類を^{ホモ・マイル}男性と呼ぶ。高級動物に至るほど皮膚に毛が少ないという進化論の原則通り、男性には髭という毛があり、男性自身この劣性を意識して、或は髪を短く刈り、或は努めて髭を剃るなど、女性に近くなろうとする習癖が見られる。また同様の原則により、高級動物ほど諸器官が分化しているものであるが、男性に



於ては生殖、排泄器官が同一であるに反し、女性には既に分化した二器官を有している。……

若し、ズボンとスカートとその何れが（両性に）適しているかを聞かれるならば、私は何等の躊躇の時間を持つことなく、女性にはズボン、男性にはスカートと答えるであらう。蓋しその生理的肉体的形態からして、女性には下半身を包むズボン形式が、下半身を露出するスカートに比しより多く適応し、男性には股間を圧迫するズボンよりも股間を解放するスカート形式がより多く望ましいからである。……

「スカートへの郷愁について」（註）

（註）花森氏の女装を単に計算された演出の様に云う向きもあるが、この戯文は——戯文であつても——それへの反証といえよう。

然し、女のズボンがマゾヒストに対して持つ意義は決して右に尽きるものではない。私は毎週土曜日の夕方「鉄腕アトム」というテレビドラマを見る。荒唐無稽で愚にもつかぬものだが、中に美人探偵が出て来て、凛々しい姿でオートバイを乗り廻すのが見たいからなのである。こんな場面が出るのはたしかに戦後の風潮からであつて、その意味では前記したところに帰着するのだけれども、私を惹きつけるのは、もっと直接に女の服装そのものである。決して風俗史的考察などを經由してはいない——内省してこれだけは明らかな事実である。子供の頃ターキーに漠然と憧がれていたことも思い出す。

それは結局、私の内部のW要素が、ドミナにM要素を求めているからであろう。私自身には、女装願望は軽微であり、逞ましい男性への愛慕は殆んど感じないが、美少年ないし美青年、即ち男性と女性とが一体化したギリシャの人のいわれるHermaphrodit的存在への要求は強烈で、しかも彼への女性的奉仕を空想する。そして彼に対してはどの様な奉仕の空想も嫌悪を来さない。こういうW要素は、一転してドミナに向う時、彼女への男性附与を要求する。男装した女性はこの意味で、私の心にかなうのである。軍服の女、探險服の女、乗馬服の女、飛行服の女、……皆その姿のM的要素によって私



を刺戟する。乗馬服も昔風の横鞍の為のスカートであるに興が薄いし、男もののセーター、スラックス姿の方が、ブラウス、七分スラックス姿よりも刺戟的である。

私はこの様に感じ、考えて、これを旧稿（第一五・一六項）で指摘し、大方のマゾヒスト諸君の意見を求めたし、後に自ら一例を引証し得た（附記第二）がその後、黒田史朗氏が私に寄せられた書簡では、この点に新しい見方が導入された。その一部を左に掲出しよう。

私もイヴニングよりズボン姿を好みます（一番好きなのは探險服で、軍服・スラックスがこれに次ぎます）。が、それを必ずしも女性の内部の男性的要因の表現は考えないのです。我々の対象はあくまで異性なので、M的要素ではありません。スラックスという軽快な服装にさせると、日頃は

不自然なまでに抑制されていた女性の内的要素が、はじめてのびのびと自然なかたちで活発にあらわされるでしょう。その可能性への期待が我々の心をはやらせるのではないでしょうか。それから、もう一つ、イヴニングやスカートでは直接その部分を包まないので、スラックスでは、一番不潔で失礼にあたるその部分を包むということ。それもパンティとちがって人目につく形で、しかも何気なく着用されるのです。一番失礼な部分を、相手が生命なき布地とは申せ、ずっとその形どおりにあてがって保護の役をさせている。相手次第で女性はどういう侮辱的な扱いもするという

歴然たる証拠をスラックスは見せてくれるわけです。それを敏感なマゾヒストの臭覚が本能的に捕えているのです。これも可能性への期待です。こういう期待こそ女性のスラックス姿への思慕の情の真因ではないかと思ひます（以下略）。

氏のあげられる二理由の後者は、氏独特の感じ方であるが、その前者には共感し得るものがある。私の先の論旨への批判であるに拘わらず、左程反発を感じない。粗野なゴツゴツした体格のおとこ女に対して何の魅力も覚ええない点では私は氏と一致する。氏は私の様な美少年への関心を完全に失っておられる様であるが、だからといってW的要素がないとはいえない。女性に対する限り、私と氏とは同じく美しい若い女にのみ興奮するのであり、その際、彼女の中なる「活発なもの」を、氏は女性本来の属性と見、私はこれを男性化即ちM的要素の附加と表現するのが違ふのである（附記第三）。

ただ、黒田氏の議論は、M型女性とは即ち男見たいな体格の女性と決めてかかっている様だが、これは氏の早合点に過ぎぬことを指摘する必要がある。ここでいうM型W型はすべて精神的資質の問題なのである。美しい嗜虐女性にM的素質ある場合は少くない。例えば、古列女伝は、中国古代の暴君桀王の妃末喜を形容して、「色に美しく、徳に薄く、乱孽（らんげつ）（残虐）無道なり。女子にして丈夫の心を行い、剣を佩し冠を帯ぶ」と云っている。アテネ型（第一章参照）の異装倒錯者（附記第四）だったこの美女がズボンをはいて氏の前に立つとしたら、氏は彼女の「活発さ」にうたれて、私同様、跪くに相違なく、まぎれもないM型女性だからと拒むことはできないだろう。

この「活発さ」、普通に男性的資質——「丈夫の心を行い」——

と云われるものが、実は女性本来の資質であるか否かは、議論の余地がある（附記第五）。ただ、現実の個体には必ずM的要素とW的要素がある。そのMをば両性のいずれに属するとするかの形而上学は、黒田氏の女のズボン観に賛成する上の妨げにはならない、と云うことができよう。——もっとも、もし「活発さ」という見地を強調するなら、七分スラックスでも良い筈だが、私など、こういう女だけのスタイルの場合には、皆無といわぬまでも、甚だしく感興を減じるのは、やはり、ドミナの男性化という表現でなければ受けとめ切れないところがある様に思うけれども。

ともあれ、ズボンを穿いた男装女性にマゾ的興奮を感じる私や黒田氏のともがらにとっては、一般社会に女のズボン姿に対する新しい美意識が生れ、それで通用する領域が増しつつある現代は、喜ばしい時代である（附記第六）。まことに、私どもにとって「女がズボンを穿いた」ということは大きな福音であった」

附記第一英語ではShe wears the breeches.という。これは西洋では現在も通用する表現か否か。内親王孝宮様が鷹司夫人となられた時、外人記者が式後の花婿との会見で「奥様にズボンを穿かせますか」と訊き、否定的な答を得て、激励したという話を（記者の質問はこの成句を意識してなされたとせねば理解し難いので）旧第一六項に（二十八年七月号）に引用したが、後に吾妻氏と女のズボンについての論争（本誌二十八年八月、十月、十一月、十二月各号）を経て後、週刊朝日別冊二十九年四月号にロンドン特派員の載せた次の様な文を見出して、旧六二項（二十九年八月号）に引例した。この成功が現在も通用することを示す様に思われる。

久しぶりに冬の東京に来て、眼についたものの一つは、スラックスをはいて町の中を歩いている若い娘さんの多いことだ。

(中略)

このごろ、ロンドンで、たまに一人か二人、見かけるスラックスは、相当スタイルに自信のある芸術家気どりの若い娘さんである。もう一年ほど前のことだが、イギリスのリヴァプールの町で、十三才の少女が、スラックスをはいて学校に通ったため、停学を命じられたことがあった。この事件が裁判沙汰になったことは、日本にも伝えられたようだが、この少女の場合は健康上の理由があった。けれども「女の子にスラックスをはかせるのはみっともない。あきれたことである」という学校当局の反対を支持した人も多かった。(中略)

イギリスで、「あそこの家では、奥さんがズボンをはいている」といえば、それは御主人が奥さんのお尻に敷かれているという意味になる。何時かこんな話をきいた。

年中奥さんに小言をいわれて小さくなっていた御主人が、ある日、夫婦そろってパーティに出かけようという時、急にズボンを脱いでしまった。そして「家では奥さんがズボンをはいているんだから、僕はズボンなしで出かけるよ。一つの家で二人もズボンをはいてる必要はないだろう」といつてきかない。とうとう奥さんが降参して「もう小言をいわないこと」そして「名実とも貴方にズボンをはいていただく」と約束したそうである。

だからイギリスの男の人達も、奥さんのお尻に敷かれるのは真平だというわけだ。(下略)

附記第二 これについても、旧六二項に引いたところを再録して

おく。りべらる誌二十九年六月号所収「女にかしづく男たち」の中の乗馬クラブの馬丁の手記と称するもの。虚構かも知れぬが、乗馬女性に鞭打たれ、蹴られながら「動物になりたい気持を感じる」と告白するマゾヒストだ。

西洋では、憐天下のことを「ときをつくるメンドリ」とか「ズボンをはく女」とかいうそうですが、思いあたることはありません。

馬に乗るには、なんといってもズボンをはいて貰った方が便利です。(中略)

ズボンをはくと、ほんとに女の気持が、ガラリと強くなることは、私も経験で知ったのです。身体を自由活潑に動かせるからでしょうか。私の小屋でスカートをズボンにはきかえて出て来たあなたに、女の態度が、それぞれの血統にしたがって、荒っぽくなります。(下略)

附記第三 「女の持つ活潑なもの」は、一定のふさわしい条件と場面において流出する。「残虐な女性」の第二章に詳述された植民地における白人女性の変わり方はそれである。雑報二二六に引いたホテルの受付係の若い英国娘が、客には、にこやかに応待しつつ黒人達に「静かに」とおそろしい顔で怒鳴りつけたというのも同様だ。いや、そういう社会体制に關係する条件でなくても良い。例えば、——ちょうどこれを書いている時に配達された新聞から一例を引けば——「日ごろは淑やかな女性でも、車を運転している時は気が荒くなる様だ。女の運転する車にかすったりすれば、凄惨な権幕でどなる。……しかもこれは日本だけではないらしい。『都会のジャングル』』というアメリカ映画を見にいったら、

やっぱり凄い権幕になるお嬢さんが現れた。……足が地についている時と、アケセルをふんでいる時とは、人間の性格は一変するらしい」(三四・九・二九・毎日夕刊)(一四章引用の長谷川氏の文の契機となった白人メドラを想起させられる)同様に、馬に乗ったとき、痴愚者を相手にしたときなど、女が慎しみを捨てる場合を幾つも数え上げてゆけるだろう。ズボンをはくこともその一つに数え得るといのが黒田氏の説である。

痴愚者を演技して相手の女性の警戒心を解かせ、これによってその活潑なものを引き出し、慎しみを捨てさせた多くの体験を持たれる黒田氏が、女のズボンにも、この意味での「女を活潑にさせる条件」を見出されたのは、さもありなん、思われることである。

附記第四 末喜についての古列女伝の記事は、サディ、スチンの男装に関する最古の文献の一つであろうかと思われる。単に異装倒錯というのではなく、嗜虐性と結びついている点注目すべきものである。

なお、東洋古典の性科学的処女地性については、二九年一月号「内沙汰」解説参照。

附記第五 これは男女の本質論に導く問題だし、ひいては、サディズム・マゾヒズムの概念の把握の仕方にも影響して来る。サディズムを男性的資質の、マゾヒズムを女性的資質の過剰形態として理解しようとするクラフト・エビング以来ヒルシュフェルトまでの伝統的な見解と、これに反対するハヴロック・エリス等のサディスト必ずしも男性的ならず、むしろ女性的な体格と精神のものも多く、逆にマゾヒスト必ずしも女性的でない、との実証例に

よる反論のいずれが正しいか。これを解決する力は私にはないが私見としては、男性的残酷と女性的残酷を区別するブロッホ、男性のBrutalist(乱暴な残酷さ)を、女性のSadismusと区別するエベルハルトに従い、男性の残酷(Brutal)と女性の冷酷(Cruel)とを異質のものとして理解し得るのではないかと考えている。

なお、ワイニングルのM・Wが理念に過ぎぬことは、三〇年一月号の二俣志津子さんに答えた拙文参照。

附記第六 旧第一五項に「スラックス」の小文を載せた昭和二八年と今日とを比べると、その普及の著るしいのに驚く。

週刊女性昭和三四年一〇月二五日号「私たちはスラックスを愛する」によると、映画からモード雑誌からか、とにかく三四年冬も前年に劣らぬスラックスの洪水が予想され、デパートでも既製スカートより売行きが良いそうで、小森和子氏の話ではハリウッドで大流行はいわずもがな、ヨーロッパでも、ササール、プティ、ドモンジョ、バルドーなど私生活で愛用している由。デパートの売場主任曰く「女性の服装が昨年あたりのボーイッシュから、さらにマニッシュになってきていることは事実で、これはセーターだけに限りません。スラックスにしても、男の生地で男物の仕立屋に頼むのなどは、そのいい例で、しゃれたスラックスには、前ひだのないのがあります。……私は、そのうち、すべての着る物における男の左前、女の右前さえ、なくなるんじゃないかと思っています。そういえば、いまは男性の服装も、非常に女性化していますね。……」

一般に異常であるという場合には、多数の他人と見解が異なることによる異常性を指しているように思う。他人と異なるという見解は一般的、即ち常識的道德感から導かれるものであろう。従ってこれに反する見解をもつ者は異常者である訳である。一般的常識的な道德感から判断されるということは、特殊なものでない故に正常なのだろう。更に言うならば、誰れもが大体同一の判断をするだろうという意味で、この範囲内に於ては正常なのである。

ある行為が正常であるためには、大多数の人々の同一判断によって正常であると判定されなくてはならない。ということは、大多数の判断にもとづくものであるから最大公約数的な意見である訳である。そうだとすれば、個人の判断といえども最大公約数的意見を述べる範囲内に於いては正常な範囲に入ることになりはしないか。

以上を是認すると、次に、正常である線を超えた者が異常であるのは、最大公約数の意見、判断から飛び出した限りで異常なのではないか。とすれば、異常性を自認す

私 の 意 見

正 常 と 異 常

赤 松 義 夫

る人に於ても、表面的であるにせよ大多数に従う限りに於て正常なのである。即ち各個人の判断には差があり、この差を最小にした状態に於て事象を判断する限り正常ということになる。すると個人の判断によって生ずる差、即ち異常性は全ゆる個人が、程度の差こそ、また分野こそ異なれ、持っているのではないか、ということである。最大公約数的判断を表明する限り正常ならば、これを超えて思考を進めて独自の考

えをもつこと、全てが異常であり、個人的な異常性は全ての人が持っているということとが出来よう。但し異常性が他人に受け入れられ最大公約化即ち一般化する場合にはこの限りではない。そこに進歩が生じているからである。そして正常と異常とを区別する境界線は時代と共に変化するものである。それ故、時に依っては異常とさえ考えられることが、正常の範囲に導かれることもある訳である。これは時代の要求する

最大公約数によって決るであろう。

異常性に対する認識の程度は、研究心の強い人間程深く、逆の場合には浅い。一般人といわれる人々に於ても、最大公約数的道德感からすれば異常であると考えられる雑誌——奇クに限らず——が売れ、これが読まれるということは、少なくとも異常性に対する興味を示すものではないか。更に異常なる読物を読んで判定する個人が、自分が異常性に興味のあることを表明するだろうか、むしろ内蔵さ

せ、最大公約数的意見に同調さえすることである。これは自己本位であり、異常性を表明するとは自己の生活に反することである。言いたいことは、程度の差、或は分野の差こそあれ、全ゆる人は、最大公約数的意見、一般道德感から判定すれば、異常なことと思われる事象に対して、異常性をもっているのである、ということである。一般人はこれを生活の場に表わさないで、大多数の一人となつて生きている。意識するにせよ、しないにせよ背後には必ず異常性がつきまといっているように思うがどうだろうか。

続夢二夜

牧

高志

文庫



—第三夜・色大名と腰巻地蔵—

紅鶴城の城主、帯月経之介は当代無類の賢君であつた。但し、彼の才智才能が縦横無尽

宛ら平野を淀まず河水の流れるが如くに發揮され、一方、云い出したら後へは退かず、生一本にして誠に頑迷なること岩石の如しと云われた嚴父——胴之介の後釜を継ぐや忽ちの

また登城して彼に謁見を願出る者は特に武家人と限らず町人でも自由に差許されたが折々忍び込んで来るまぐれ者の間者を事前に察知するため一応、帯紐の類を解かせ素肌お改

うちに破綻に瀕した藩の赤字財政を真黒く盛り返えしたそもその力量は、実は朝の登城時から夕べの下城時のいわゆる厳格なる勤務時間内のことであつて、どうやら一日の夕刻の幕が降りる頃ともなれば、まるで性格が一変したかのように賢君の名を返上し、持前のお色気遊戯に耽溺するのが生涯の慣わしであつた。

藩の財政が豊かになるのと平行して彼を巡る衣食住、わけても城内住居に関する一切の施設が、彼独自の好みに合うように改修されて行つたことは、けだし当然であらう。

例えば屋敷内の階段は大幅に跨いで上下しないと歩けない程の高さと幅にしたばかりか、おおよそ傾斜と思われる処は急緩を問わず思い切つて全部、階段造りに改築したため、裾を長く曳いた腰元連中はその都度、悲鳴をあげて通る有様であつた。

めの浴池に浸った上でお目見えすることになつてゐた。

このことは取りも直さず、彼が年中行事の一つとして百人余りの町家の娘に年始のプレゼントを与える新らた年「殿と娘の集いの会」開催の際、ひそかに設けた浴池の天井裏に出御して予め心ゆくばかり娘の湯浴み風景を見物したのも、要はこれが本来の目的であつたのかも知れない。

こうした彼一代の桃色行状記を逐一、物件を挙げて紹介して行けば誠に限りがないが、今宵は床中にまします夢神の仰せられるままに身を委ねた以上、この驚くべき奇想天外な物件の主なるものに亘って御披露する必要がある（とありそうだが、その前に一言、特筆すべき（と）いいいかどうか判らぬが）ことは世に云う正式の奥方（おくだ）が居られないのに、いつの間にか何んと五十人に達する子福者であつた——つまり二十方（たか）以上の非公認的、私物奥方を身近かに抱えていたことであり、綺麗な言葉で申せば大家族主義者、エゴイストに表現するならば男本位の離婚主義者であつたことだ。

その御大—鼻筋通つて眼元涼しく、ずば抜けて容姿端麗な彼が日常居住する部屋（勿論

公務を執る部屋ではない）は鶴の間と亀の間の二部屋のみであつたが、いずれも豪壮華麗であり、ただ部屋の構造だけが鶴と亀とは月とスッポン位に異つてゐた。

鶴の間の寝室（押入れ付）控室（以上、各五十疊敷）、書見室、浴室、厠（以上、各十疊敷の広さ）の五つから構成され、余程の探索的な眼で見ない限り表向き特別風変りな処は見当らなかつた（本当は巧妙に仕組んであるのだが……）しかし亀の間の方は別名を開かずの間とも称し、極めて少数の殿直々の者以外には絶対に入ることはおろか近寄ることも禁じられていたのである。

数年前、野鼠が忍び込み、千万金を出して蒐集した笑い絵巻をかじつたという科で手討ちになつた者がいたそうである……。

この亀という字で連想する訳でもないが、亀の間の造りといい城内のあちこち巧妙、且つ悪る賢しこく、端的に云つていたずら半分、しかも多分に遊戯的としか考えられない施設を綜合してみると、どうやら城主である殿は徹底した出血主義の残忍者とまではいかなくとも結構、女共をサジスチックに苛めて生来の本能を慰める一切の物象に対する唯一無二の発明考案者であつたような気がしてならな

い。

春ともなれば、爛漫と咲き揃うた桜花の下で特に終日を割いてレクリエーションに当てられ、席に待るものは愛玩の犬猫と気心の知れた男の家来たった五、六名の外は全部、女子ばかりという、そして金襴緞子に身を包む側妾——紅月女、紫月女、桃月女といった正妻ならぬ二十名の美女を左右にふり分け、続いて紫矢紺黒帯の腰元——萩乃、菊乃、梅乃などの美しい侍女百名を従え、質素なりとは云えこれまた五十人に垂んなんとする美人ぞろいの竹、山吹、椿などと呼ぶ下女中、総合計二百人に近い女体群にござり包囲された彼が盃を傾け心地良く酔いの廻るのにつれ、揮一枚の姿で遂に肌襦袢の女鬼を追うといった……へ由良さん、こちら……手の鳴る方へ……は、まだまだ序の口である。

宴漸くにして佳境に入るや、秋冷の紅葉も斯くもありなんと燃えるような緋縮緬の長襦袢姿の腰元侍女全員を集团的に、時間をかけて、しかもゆっくりと大木になった桜の木の下へ天っぺんまで這い登らせたり、或は紅白両軍に分け、勇敢に思ふ存分、お互いの鬚を掴んで投げ倒す騎馬戦などをやらせた。そして東の方、朧月が霞む空に朝陽が音もなく昇る頃、

妖麗例えるものなきヌードショウでおひらきにしたことは云うまでもあるまい。

割方、長い長閑な春のシーズンには、そのほか定例的な慣例ではなかったが、折に触れ思いつくままに梅雨が続けばお池の一部を利用した急ごしらえの田んぼに鳴物入りで終日女共に田植をさせたり、また、わざわざ漁師達の手を煩わし、海辺から色取り取りの貝類を運んでバラ播き、時ならぬ潮干狩りの真似事を演ったことが記録に残っている（誰が誌したものやら誠に御酔狂さまなことである）やがて暑い夏がやって来ると、城内は畜生共を除き全員、極薄の絹の衣に衣替えするのが御定であったから、白禪常用の家来達はその都度、前を押さえ、うつむいて歩かざるを得なかったのに較べ女の側は絹そのものの上物下物の差別もさりながら、じかに着た透き通る赤湯文字の長短で自ずと身分と階級が判る仕組みになっていた。

丈の長さがおよそ着物の長さと同じものは側妾であり、それより一寸五分短くなって腰元衆、三寸がた短くなればもう帯から上を見上げなくも下女中ときまっていたのである。

湯文字の規格でさえこうであったから、まして洗濯物を屋外に乾す場合には、風の吹く

まま湯文字が混線？致し、ただの側妾の肌襦袢より上座に下女中の湯文字が乙にからみついていようものなら殊の外に詮議が厳しく、そのため特別に糺明する部屋まであった位であった。

しかし、夏の期間は何んと云っても城そのものが町人街より数十尺高い処にあったから松なみきを渡る風は一きわ涼しかった。螢狩りならぬ闇夜のズバリお化け競演会には、役目柄もろに裸にさせられたばかりで存分、夏の風邪をお引き遊ばす女達も存外、多かったのもうなすけよう。

この通称お化け大会は夏の行事の部類では最も庶民的であり主催側の各部屋、各局の思いの趣向をこらしたコンクールでもありしかも催しそのものがパブリックな行事だけに、参加を許された一般民家に取っては、盆と正月位な気持で待ちこがれていたものである。

池の水面から、ぬっーと皿を持ち上げて浮び上る殿さま扮する青二才カップに、側妾扮する小便小僧が存分にオシッコをひっかけてもおとがめなく、無礼講がさし許された。

取り分け寒い冬將軍の頃と違い、自由に活動出来るシーズンであるからでもあるまいが

この夏のレクレーションは特別、痛快極まる場面が多かった。

土用に入ると、いかな城内とても松の枝一つ揺れず、あせびっしよりの日が続く。すると待ち兼ねたかのように家老名を以て次のような、おふれが出された。

「この度は貝原益軒翁の名訓を胆に銘じ各位の汗腺解放のため今より十日間の無衣を差許し給うに付厳に節度を守り申候事云々……」

つまり変な気持ちにならないように気を付ければ四六中、ノーふん、またはノーパンテイでかまわぬと云うのだ。

しかし流石にこのお布礼は公示以来、何分にも歴史が浅く、従ってまだ色々と改める個所があるものと見えて標札通り忠実に実行しようとするれば、勢い真っぴる間は城内寂として人影もなく、僅かに朝夕の刻に、さながら林間を足早やに走り去るリスの如く小走りに走るのが関の山。

考えて見れば逃げ込む隙間のない長いトンネルのような松の廊下で、男女がパツタリ出逢ったとしたら、男は兎も角、女はその場にうずくまるほか仕方がなかったであろう。

けれども百万人とも我行かんの、上御一人の殿様之介だけは根が律義者であらせられた

ためか極めて勇敢に、おくせずノーフンで何処へでも行かせ給うたのである。

この親切な親心にも似た折角の法律？も残念なことに子供ならいざ知らず成人の無衣という点で却ってあせをかくという輿論が高まり、遂に世紀的な裸週間は廃止の運命を見、僅かに行事的な催しとして一日乃至二日間の裸解放日にとどまっていたことは、返えすがえすも惜しいと云わねばならないだろう。

こうした裸週間の前後にお化け大会が公開されたのである。

化物——つまり人が何かに化ける、男が女に、女が男に扮するのも成程、一種の化物には相違なかるうが、日頃生意気な素振りを見せたばかりに腰元連中十名ばかりが後手に縛り上げられ、穴の中に埋められて首から上だけを出し、これに顔だけが見える丸い西瓜の張りぼてを高島田の上からスッポリ冠せて、よりどり「一山十文……」は少々度が過ぎた（かも知れない）。

度が過ぎる余り変態がかったものは、ほかにまだ山程あった。

特製豊醇「千代の松」と銘打った黄銘酒が



側妾の、また並製特用酒「竹之影」が下女中の、いずれも尿水の上澄であるなどは、よしんば一献きこし召したとしても毒にも薬にも

なるまいが、女湯の垢を搔き蒐めてせんじ丸め込んで団子にした名物「湯赤だんご」は殊の外、栄養になるものと見えて城内模擬店で

発売と同時に忽ちにして売切れ騒ぎを演ずるなど、また特にフェチ好みの人間には殿の古びた禪が町人娘の手によって高値を呼ぶあたりは寧ろ愛嬌があつていいかも知れないが、反対にハンサムな町人風勢を有無を云わせずぐるりと囲んで裸にむき、一切の持物を根こそぎ掠奪する腰元連中の気魄には勇しすぎて凄じいものがあつた。

こうした裡に在って無軌道極まる、まるで洗城令にも似たお化け大会は進められて行つたため、城内に籍を有し確かに定員内であつた腰元や下女中の連中がそれっきり行方不明になつたり、甚しいのになると偽の側妾が一夜のうちに取って代つて殿の伽をしてばれた挙句、無惨にも打首になつたり、これと反対に骨身もとろけるようなサーピスをこれ勤め上げ、下女中から二階級特進して側妾という玉の輿に乗った者も居つた……。

しかし何はさて置き、みの年みの刻生れの町人娘によつてかもし出される化粧の模範奉納人柱供養祭は殊の外、殿の喝采を拍した。

一同総くれないの縮緬の湯文字を巻き、輝くばかりの重目白絹の白一色の装束をまとい黄色野蚕の繭で織つたという絹縄で十重はたえに後手に縛り上げられて本丸の鬼門に当る

庭に掘り下げられた穴の前に勢揃いする段取りは、趣向そのものが一種のペイゼイメント（野外劇）であつたから、本丸に曳かれて来るまでの娘達の動静は当然、一日前に華やかに演じられたのであつた。

それらの描写は少々細かくなつて恐縮だが化物もここまで来ると天地神明に誓つて崇高なものとなるので、謹んで当日の模様を再上演してみることにしよう。

まず形式的ではあるが、みの年みの刻生れの齡頃の娘として白羽の矢がお屋根の天っぺんに刺さると、本当であれば親兄弟は勿論のこと近所近辺こぞつて泣いて大騒ぎになる処を、すっかり安心して（寧ろ心の中では喜んで）その日から娘達を送り出す衣裳の調達に苦勞し始める。

その下心は花嫁つこととしての娘の宣伝である以上、親元の方は莫大な借金をしてまでも競つて着飾らせ、橋の下や貧民窟のあたりから日当、幾らの非人を数名雇つて、それぞれ実家から出させたが、予め派遣された下役人の手でわざと罪人風にきっちりした後手に縛られて裸馬に乗り町内を廻つて城門にさしかかる頃は、伝え聴いて熱狂した群衆にさえぎられて二進も三進も出来ない有様。

「山形屋長女お駒 十九才

右は依御錠召捕の上明朝人柱として

供納申付もの也」

という立札は、字くばりそのものは寺小屋の域を脱しない稚氣満々たるものであるが、立札を先頭にして城内に入ろうとする非人達は、その非人頭がまず棍棒で民衆からたたかれる始末で、どうにもならない。

本来なら斯うした騒ぎを利用してまず縛られた娘を奪かんしそんなものだが、民衆も至極心得ているものと見えて、中には後手に縛られた娘を、頃合いな御輿とかん違ひして空高く胴上げしている組もあつた……。

こうして散々もみ苦茶にされた一行が這々の態で城内に入る頃には肝心の人身御供の娘の帯がゾロリ解かれたり片袖がちぎれる位はいい方で、千石町のお千代さんなどはどうして盗まれたか、気が付いた時には一番下に締めていた筈の緋縮緬の湯もじまで、ごっそり剝がれて持ち去られるに至つては言語同断、正に狂気の沙汰と云わねばなるまい。

この湯文字に関する一切の供養は秋の大祭に颯爽と登場する鎮守の「腰巻地藏さん」に繋がる一連の問題であるから、その折に触れることにしたい。

さて、このようにして城外での嬉しい洗礼を受けた人柱娘の一行は下馬の上、査閲担当官である役人の取調べを受け、続いて城内で手ぐすねひいて待っていた女達の歓迎に、乱れた髪をふりながら答礼して定めめの宿舎に入る。

その夜は一同、齋戒沐浴の上、山海の馳走を受けたことは当然のことながら、万一、娘達の身に月の障りでも起れば、却って目出度いものとされて一躍、上位に座らされたものである。

一夜明けるといよいよ女人柱奉納の日となる。特に拝願を許された親達は朝早くから、たとい事の一切が模倣物であろうと神妙に控えて土下座する中を、昨日の散々な乱れ衣裳とはまるで打って変わった殿直々下し賜うたそろいの総ピンク色、準腰元衣裳をまとい一人ずつ静かに曳き出されて来る……この情景は誠に絵にも描きたい程の情艶さだ。

やがて定めめの浄衣改めの座に導かれると、既報の純白の囚衣に着替えるのだが、総勢八人の娘が白昼一斉に侍女の手で衣替えするのにも色気たっぷりな処があるが、いちいち自分の両の手を縛る縄を下役人から押し戴いてから静かに両手を後ろに廻わす可憐さは列席の

面々の涙をそそった。

かくして娘の全部を嚴重に縛り終った処で遙か彼方の屋台に出御していた殿の拍手に合わせて一同シャン、シャンと手を合わせると即席ながら家老扮する字月三太夫坊主の読経が始まり、木魚の音と共に数珠繋ぎとなつて一寸見ると地階の鉄骨ビルでも造るような割方広い土穴の中へ入って行く……。そして二本ずつ正方形に四方に建てられた白木の柱の前に一人一柱の姿で立つと、後手のまま荒縄を以て嚴重に帯と脚を柱に縛りつけられ、改めて白布で眼かくしをする……。

準備全く成れりの合図を受けるや、まず殿の検閲兼人柱の拝礼がなされ、続いて親達がそして最後は待ち兼ねた一般大衆が、どっと押し寄せて穴の中へなだれ込み、哀れな娘とこの世の別れを告げるため堂々巡りをする次第だが、いつの世にも物見高いは人の常という譬の如く、持前の時間を区切ってあちらを整理してもこちらを整理してもカメラマンならぬ、にわか浮世絵師だの似顔描き屋、さては新興宗教の祈禱師の類いが結構、頑張っているまでも立去ろうとはしなかった。

そのワイワイ騒ぐ人の頭数の多寡によって娘の人氣——つまり嫁つこととしての価値判断

たと見做しても決して過言ではなかったという。

中肉中背の均勢のとれた姿態は、たといその身は縛られたという哀れさが一枚加わったにせよ、よく大衆に見抜かれて人柱となった娘達の大半は立ち処にの婿殿がきまり、やがて目出度くお嫁入りしたという話である。

この一部始終を身近かに照覧給うた殿は、流石に明君の名に恥じず、娘の多幸こそ祈れあともまで決して娘共に手を出されなかったことは、正に賞讃に値するものと云うべきではないだろうか……。

この異色化物大会といつてよいか化粧祭にも等しい行事は、また広い城内を天国地獄になぞらえて巷間に伝えられるお菊の吊り井戸だの、やり出したらそれこそ何組でも出来る牡丹燈籠だの……といった見世物で胆を冷やしたくいは勿論、催されたが、この腰元の折檻はこの城内では日常茶飯事であり、取り立ててセンセーショナルなものではなかった。

そのことは、寧ろ女の責めを観たくなったら即刻、御殿に御座れ……で女が女をひどく折檻する場面は城中至る処で執行われていたからである。

蟬の声がいつしか虫の声と代り、さし昇る

月の色が爽やかになる秋の頃ともなれば、城内は或る意味では一番楽しい季節に入る——つまり仲秋の恒例「地藏祭り」が盛大に行われるからである。

その昔、吉原の某楼に気立の優しい花魁がいたが、馴染の若旦那と夫婦になれず筋書通りの御法度の道行で捕まり、言語に絶する責め折檻の末、悶死したが、無縁塚に葬る際、棺

の内で運よく蘇生……その折、固く手の内に握りしめていた豆粒大の地藏像がいつの間にやら影も形もなくなっていたという、いわば九死に一生の女の身代り護り守として、爾来

霊顯あらたかであった由に洩れ伝えるが、例によって雑学の大家であり、げて物蒐めの雄であった殿が聴きもらす筈もなく、早速に何処からどうして運び込んだものか、ひどく古色蒼然とした時代物の地藏さんを城内に安置したのである。

その安置した場所も因縁浅さからぬ処で、偶然の一致かも知れないがどうもこの地藏はただの地藏さんでなく、例えば、どんなに表へは澄ましていようと、も着飾った女子衆がこのお地藏の前に立つと、頭からぐっしょり濡れるという。これが、たちまち城下の町中で大変な評判になって了った……。否そればかりではない、地藏さまにお辞儀をしないと、三步も行かないうちに腰巻の紐が解けてズリ落ち



るのはお笑い物だが、誤まって唾でもひっかけようものなら、忽ち旋風が舞い上って足元からおチョコにさせられるというから、とんだエロ地蔵に相違なからう。

この地蔵を面倒くさいから「腰巻地蔵」と呼んじまえと云い出した張本人は今以て判らないが、物の本によると登戸の福浦港にあった地蔵が元祖らしく、もともとのいわれは恋しい人に対する恋慕の願いを遂げさせてやるというのが真実らしい。(伝説と奇談第十五集参照)

しかし本篇のそれは趣きを変えて、ぐっと巾の広い八百万ずのエロ仏と見做しても差支えないであろう。何故ならば仮りにお祭りすることをお忘れたとすれば、城内の女共は立秋と共に誰れいうことなしに下半身から身震して風邪を引き始め月の物も停り徹底的に足腰立たぬようにして丁了由、しかも何枚も腰巻を巻いて着ぶくれしようとも、効能がさっぱりないと云うから始末が悪い。

そのほか八百よろずだけあって話の種はつきないが、それは兎も角として、これより先に醉狂な今の殿さまと違い先代には頗る曰く付の残忍な方が数人、居られたものと見えて強制的に奉公に上る腰元侍女、女中連中は文

字通り水盃を交わして親兄弟と別れて、おずおず城内に入り終身サービスをさせられた。

それは最早や女性としての人の姿でなかった。まるで馬車馬か犬畜生にも劣った取扱いを受けたと城中録に誌してある。

余りの辛らさに堪えかね、或る日、或る宵屋敷内から松の枝がぐれに町家の灯が見えるという城廓の端まで逃れ来た女達は、時代劇映画のその如く、必らず見張りか追手の下役人に捕えられ、挙句の果は有無を云わせず裸にされ、縄尻を松の幹にくくられて、お塚の上に吊るされた。

これを城外から眺めた人が、軒に陽干しにされたトウガラシのようだと批評したそうである。

また、どうせ裸にされるならと早手廻しに自分の湯文字で、今は恋しい遙るか彼方の空の下に許嫁の婿殿に、届けよ我が胸の中、とばかり赤い布を振り続けた女もいたそうなの。

或いはまた、計画的に逃亡しようとしていた女達は一人残らず腰巻一枚にしてここまで連行、改めて裸に剥いて責め折檻したという——因縁浅からぬこの地に、まるで辻つまを合わせるかのように「腰巻地蔵」が安置されたことは誠に不思議なことと云わねばなるまい。

い。

その後、星変り月移ってすっかり枯れて了った松の代りに新らたに楓が植えられたが、仲秋の頃はひととき目立って絶景さを添えたこの台地に紅白は同じでも春の時の幔幕とはおよそ風変りな数十枚の女の湯文字が樹から樹に渡されて張りめぐらされ、地面には巧みに紐をからみ合せ縫い合わせた超広巾の湯文字毛氈が客待ち顔に敷かれたのである。

まず恒例の風流な野立は斯くの如くして真ん中に鎮座します地蔵さまを中心に行われたあとは例によって酒宴となり、やがて鳴物が入ると町人の提燈行列(その頃から始まったという)の波が押し寄せるのをきっかけとして、阿波踊りそこ抜けの急ピッチな裸踊りに一変し、再び殿を始め側妾、腰元、女中共に至るまで踊りながら着物を脱ぐという賑やかさ……。

否、脱ぐばかりが能ではない。てんでに今脱ったばかりの色取りどりの腰巻を(殿や男の家来はオプザァパーでその権利なしのこと)地蔵さま目がけて投げつける……その一瞬は、もう何んと云ってよいか気違い病院の運動会もかくありなんの情景であった。投げた下帯は山と積まれ、後に整理されて

よだれ掛けとなり、チャンチャンコとなって地蔵に着せられ、雪だるまならぬ腰巻一辺倒の着ぶくれ地蔵が立ち処に出来上ったという……。

人海が伴う盛大な行事というのはまあそれ位な処で一方信心的なものを挙げると、殿さまの胤を宿し安産を願う女は深夜秘そかに、お参りすれば加護があるだの、お裁縫の不得手な娘は万願の日に自分の湯文字にあらゆる針を通して供えようと腕が上手になるという伝説があったので、それとなく参詣する女性が結構、絶えなかった……そのために山と積まれた女の湯文字を鼠がひくように今度は逆に一枚、二枚と盗み頂いて持ち帰り、株をぐんと上げた芝居の女形役者や女装フアンの青老年者がいたというから面白い。

しかし、このようにして数々の話題を生んだ御本尊の地蔵さんも、流石に寄る年波？には抗し切れず風化して一かけらの岩塊となり今は刻まれて石の臼と更生したのは何んとしても惜しい極みだが、この臼にさえ腰巻をひっかけてお祭りしたといことはまだ聞いていない。

さて冬籠りの城内は取り立てて云うこともないが、屋外の行事、例えば雪合戦だの裾を

からげ褌をかけて走り廻る雪中マラソン競争だのといったものはそれなりに面白かったが特に雪に因んで殿が愛好したのは、月なみな言葉だが雪責めの段であった。

この雪責めに一役買ったのが殿の鶴の間であり、亀の間のカラクリであったのだから、計画は年間を通じて甚だ抜け目がないものと申してよからう。

この鶴の間は、本篇の冒頭にも申上げた通り尋常並の大きさを超越した広さであったから、長い廊下を渡り歩いてこままでたどり着くまでに、腰元でも膳所の下女中でも大変、疲労する上に、うっかり何処かに手を支えようものなら、重厚な襖がどんでん返えしになったり、特定の疊の表を足の先きで触れただけで疊がひっくり返えて地下牢へ通じたり、酔狂に部屋のはほ真ん中でポンと手を鳴らすと、待ってましたとばかり天井から手頃な綱が降りて来るといった仕掛けだから、物騒で粗相も出来ない心苦勞が自然と要求されて、女達をひどく悩ました。

これらは云って見れば全部、殿の独自考案による責め具の一種に過ぎなかったが、これと広縁を隔てて遙か下方に展開する庭とを関連ずけて、冬の大雪ともなれば銀世界の宇宙

と共に絶好の責め場となる位なことは三才の童児と雖も見れば立ち処に判るだろう。

殿の女性に対する折檻のやり方は多分に心理的なものをねらう半面、御自身はあくまで審美的な客観性を求めて心ゆくばかり心酔しておられたようである。

「殿……、どうやら雲が雪となり、この分なれば今宵から明朝にかけて大雪は間違なく、されば兼ねてよりの御心の鬱憤をこの機に及んで一気に……なされませ」

「ウム、弥生に千鳥、美園の美しさが、とみに恋しうなった。まずはよきに取計らえよ……」

との鶴の一声！ 誠に結構な御身分ではないか。

やがて小半刻も立つと御所望、御名指しの美しい侍女達が定めを通り白い縄目をくつきりと見せながら、三人のむくつけき男の家来に縄尻を取られて背を突かれ突かれして、裾さばきも危ぶなげに曳き出されて来た……。

それからあと、殿直々のお指図で側近の者達が三人の美女をどのようにしたかは公開をはばかるが、夜明けと共に乱れ髪の弥生以下三人の侍女は、朝の冷めたい陽ざしを浴びて白皚々の雪の座に、お互いが五、六尺ずつ離

懸賞募集

優作	一篇に付	一万円
秀作	〃	五千元
佳作	〃	二千元
選外	本誌三月分進呈	

△読者原稿▽〔告白と手記と体験〕

☆賞 金☆

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数には制限ありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」とエンプティで書いて下さい。
- 一、締切は別に定めません。入選作は最近号より発表いたします。
- 一、賞金は掲載一カ月後にお送りいたします。

れて緋縮緬の長襦袢の上から荒縄で後手に縛られたまま、ひき据えられ、頬を紅くした家来達がハッシとばかり割竹で打ちのめす。

「殿……もうこの位の処で、とくとこの女狐共の哀れな姿を御覧なされて下さりませ。左様御意！ では……あのう、直ちに……」

三太夫の鋭い目配せで、今は乱れ髪、市松模様の伊達巻もしどけなく解けかかり氣力の失せた三人の侍女達は、後方の白木の柱に、後手は解かれたが改めて両手両脚を思うさま大の字に左右に拡げ、半ば吊られるように、しかも二間余の高さに縛りつけられた。

この雪晴れの青空に白一色を反映し、紅く燃えた三つの女人像こそ、殿最高の酒宴の肴であり、掌中の華でもあったのだ。

「まあ……弥生さまの脛の何んと生白くて小憎らしいこと……」

「御同役、如何にも目の毒で御座るよな、あのさまは……」

「いいではありませんか、雪見もお色気たっぷり。さあ、殿さま今一献お酒をお召し遊ばせな……」

といった具合。たとえ夢でもよい。歴史の幽車が逆に廻わせるものなら生れて来るんだった、その頃に……。

斯くて日が暮れた。御殿の内には明か明かと、温い灯がともされて、今や酒宴もたけなわ。けれども、とっぷり暮れた庭先の黒い三つのシルエットは、そのまま長時間も動こうともしなかったという。

後世、これにヒントを得て「金閣寺祇園祭礼祖」の芝居を作ったというのは嘘かも知れないが、うなずけるものがありそうだ。

……

「これが、その時の絵巻なんだそうだが、ひどく虫が喰ってどれが弥生だか千鳥だか判らないが、今までお喋りした殿さまの行状記はほんの口あけといった処さ。まだまだ、無理に起さなければ山程あったのにさ……」

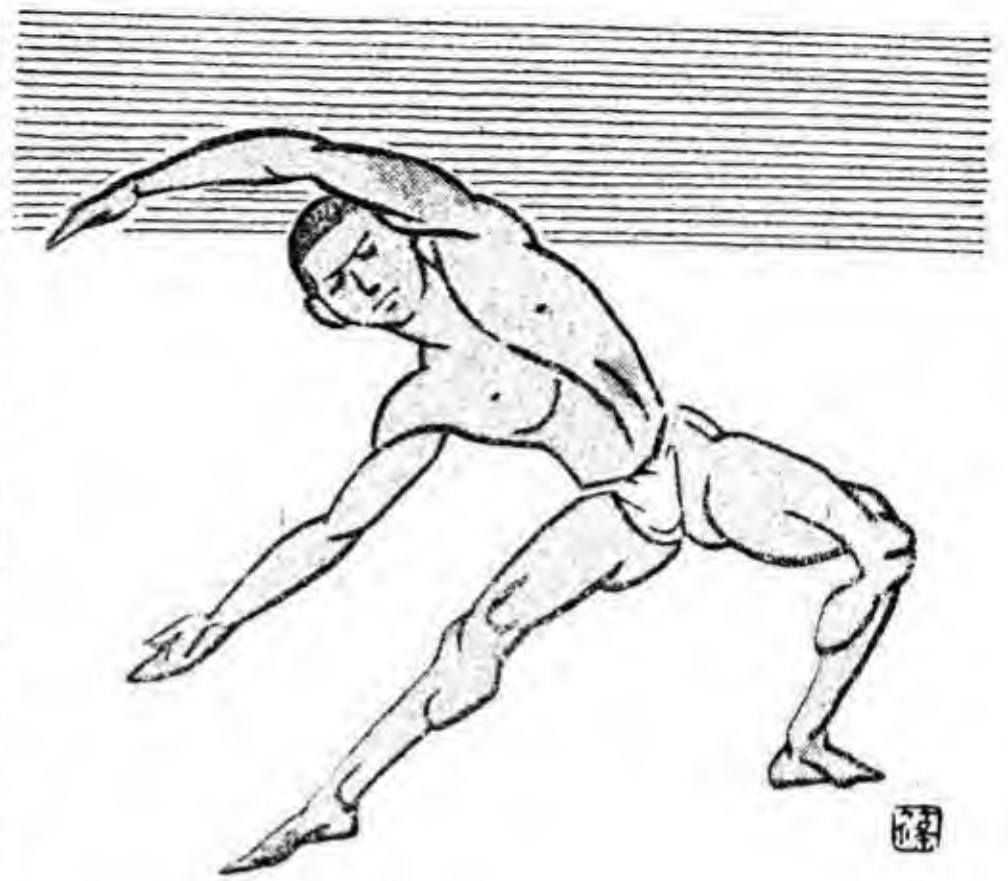
「あるって……物好きにこんなもの（古書）を買っていらして、何も書いてないじゃありませんか。」

弥生の頃、千鳥ヶ淵の園生には陽炎しきりに燃ゆるを見たり、五層の天守は戦乱に壊れて既に亡く、落城の万屍を葬りて地蔵を建つれど亦、その面影ぞなかりき。憶々……

宝永元年三月初代紅屋鶴左衛門誌す……って何んの意味？」

「どうせ繰り返えしのない夢なんだから無意味さ。春眠暁を覚えず。どれ、もう一眠りするか。今度は途中から起すんじゃないよ。アッハッハッハッ……」

甚だ心残りだが、亀の間は知る術もなく永遠の謎になりそうである……。



禪フアン三題噺

グンタイ・はだか・ふんどし

内田武男

軍隊生活を送ったことのあるものは誰でも

経験しているように、裸と禪に関する思い出は、ぬきがたいものとなって皮膚の一部にこびりついている。敗戦末期の『パッチョク』といわれる軍隊の制裁は殆んど禪をとらせることから始まり、禪を着用することによって終るというくらい『はだか』と『ふんどし』は軍隊生活と不可分に結びついていた。筆者はその当時の思い出を断片的に書いて禪

フアンの人々に呈したい。

(一) 軍隊生活の出発点は入隊時の身体検査である。これは徴兵検査とちがい(尤もある地方では壮丁を全裸にして検査したといわれるが一般は越中禪の着用を許していた)はじめてから越中禪をはずし素っ裸になってひしめきあいながら検査を受けるのである。私は海軍に在籍したが、検査に向う前に衣類を全部、油紙にこん包し、禪一つになって検査場に殺

到するのである。検査場の入口に、大きなカゴがそなえつけてあり、看視の衛兵にせきたてられながら、禪をむしりとるようにほうりこんで検査場にとびこんでゆく。これは敏速を最高の美德とした軍隊の規律からきている。筋骨たくましい初心の青年が肌を擦りあいながら、検査官の前に押し出されてゆく。傍に控えている古年兵の号令で、一挙手一投足、きびきびと行動しなければならない。私

が、はじめての経験で一番恥ずかしい思いをしたのは『M検』である。股をいっぱいにひらいて『よし』という号令で節度正しく廻れ右をして四つん這いになる。同じ素っ裸になっ

ているとはいえ、衆人環視の中で行動する恥ずかしさは、ちょっと表現できない。万一病氣でも発見されようものなら大変である。『不忠者』という札を首にぶら下げ、人目につく場所に、そのままの姿勢で許可を得るまで立たせられる。私たちは衛生兵の棍棒に追いついて立たせられながら次々と検査をうけ、最後に『異常なし』の判定をうけて、はじめて官制の越中褌を支給される。それは前垂れが短く薄手なので、いかにも寒々しく、軍隊の哀感をしみじみ味わうことになる。肥満型の青年ははちきれ下半身をようやくおおうていという感じで、馴れない足どりで兵舎に引きあげていった姿を私は今でもおぼえている。

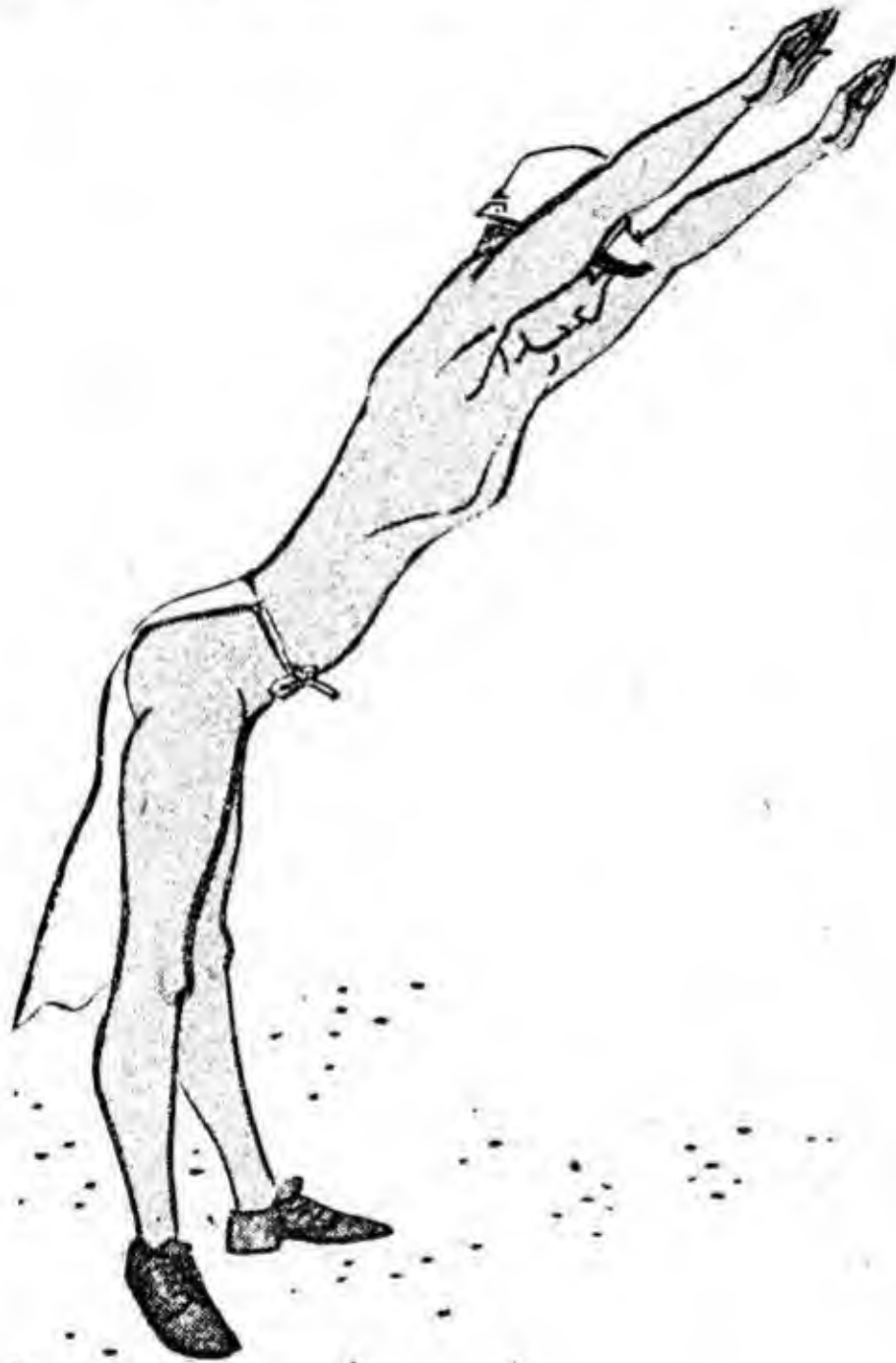
(二) ここで軍隊で使用された褌の種類について簡単に説明しておこう。それは今述べた越中褌と、前部だけをやっとおおえる程度で、それがよじれると一本の紐となつて尻の溝に喰いこむ後褌に縫いつけられている、いわゆる今日の水泳ふんどし、通称、兵隊ふんどしと六尺褌である。六尺褌は水泳とか耐寒訓練の際、将校のみが使用し、私たち兵隊には無縁であった。私たちは官品として年に越中褌を三本、兵隊褌を一本、支給された。この兵隊褌というのは思い出の多いもので、はじめは水泳が主な使用目的であつたが、そのうち後で説明するパツチヨク用にもなり、物資の欠乏するとともに薄手の兵隊褌が越中褌にかわるようになった。巾着型に喰いこんでいる巾の狭い褌は、激しい訓練には最早、用をなさなくなり、股ずれの原因となることがしばしばだった。この他に、これはまったく非公式のものであるが、下士官のなぐさみにこしらえた手製の『きんちゃく』がある。これについては後でくわしく説明するが、真実の話であり類癡した軍隊生活の一面を反映している。

(三) まず裸で思い出すのは何といつても姿勢き、よう正訓練である。これは、どこでもおこなわれていたのかと思つたら、どうもそうではないらしく、私たちのところだけだったらしい。私たちは、いわゆる軍隊での『お客さん』の数日を過ぎ、班の編成を終つて本格的訓練の時期に入つた。その最初の夜、消灯とともに先任下士官により明日の日課が申し渡される。彼は、さりげない調子で「午前、姿勢きようせい訓練、午後、カッター訓練」というと、さっさと引きあげた。私たちは、中学校の教練で最初に実施する徒手教練とばかり考えて氣にとめなかった。

翌日、早朝の日課、食事が終ると、待ちかまえていたように「本日の服装を達す。帽子靴以外は身につけてはならない。越中もはずすぞ」という指示が飛んだ。やがて私たちは「かかれ!」という号令で、何のことかわからず、うろたえながら素っ裸になり、それに靴と帽子をひっかけると兵舎外に整列した。一糸もまとわぬ体に靴と帽子だけをつけた姿は、いかにも情なく奇妙であつた。所定の場所につくと、はげしい訓練がはじまつた。一列横隊になり、一定の間隔をおいて二列の横隊が向いあつた。教班長は、その間を血眼になつて往来しながら不動の姿勢をなおすのである。彼らの平手打ちが、私たちの緊張した皮膚に処かまわず浴せられ「びしゃっびしゃッ」という響きが小気味よくあたりの空気をふるわせた。私たちが「休め!」を命令されるまでには一時間の間があつた。それは、いわゆる娑婆の楽な生活を送つたものにとつてまさに地獄の苦しみであつた。私たちの新兵部隊は、農村出身の者や商店の小僧、工員等が多く、したがって『ガニ又』が普通であつ

た。そこで姿勢きよう正訓練は『ガニ又』の膝がつくまでなおすのである。それも、はだしであればかなり簡単であるが、靴を履いているために思うようにゆかないのである。このような訓練は数日つづいた。そして姿勢が完全にきよう正されたものから、褌、さらに下衣、作業衣という具合に衣類の着用を許された。最後に残ったのは鮮魚店の店員であった。もも引、はっぴを着たらいかにも似つか

わしい、丈の低い筋肉質の裸体が、いかにもおどけた運動をくりかえしていた。私が男性の肉体に執着を持つようになった最初の、しかも決定的なきっかけは、この数日間につくられた。強制的に行われるグロテスクな運動と服装、いやおうなしの肉体の接触、野外の太陽に惜しみなくさらされた全裸の男性像、ようやくなく加えられる懲罰……私の被虐性をかきたてるには、それだけで十分



だった。私の耳には、まだあの教班長の怒声ともつかぬだみ声が妙になつかしくくすぶっている。「何だ、このさまは！尻が出ている」そして緊張した臀部いっぱい、しみわたる平手打。「下腹に力を入れる。たるんでるぞ」そして前部を驚づかみにし、引きずりまわされた痛み、それは、もはや羞恥心のひとかけらも消失し、あの美しい男性の全裸像の夥しい、しかも秩序たてられた隊列とともに

に懐しい郷愁となってよみがえってくる。
四 褌では、はじめに越中褌一本で加えられた罰をよく思い出す。これについては、いわゆる『吹流し』等で、菅氏の説明が以前に載っていたが、何といっても海軍のバッチョクは、バッターにはじまり、バッターにおわるというくらい、その打撃ははげしいものであった。私たちは教班長と向いあって一列縦隊になり、一人一人「お願いします」といって

進み出るのである。私たちは、まず褌の前垂れをはずし腰の紐にくくりつけ、尻が教班長に対し丸出しになるようにして足をふんばり万才の姿勢で前かがみに立つのである。彼はそれにねらいをつけ、バッターを力一ぱい振りおろす。倒れると何回でもやりなおす。私たちは青くむくんだ尻をなぜながら、吊床の中で泣いたのを今でも忘れない。越中褌では、これも笑えない話であるが、褌検査というのがあった。これは下士官

の好奇心から突然おこなわれるのが通例だった。彼らは夜明け頃をみはからって『総員起し』をかけ、一列に整列した私たちの禪を一枚一枚めくりながら検査するのである。禪にしみを発見すると彼等はその兵隊を素っ裸にし、いわゆる射撃訓練の制裁を加える。兵隊のおどけたかっこうを十分に愉しもうという趣向である。そのような兵隊が数人出ると、彼らはいろいろな集团的余興を工夫するのである。はじめは下士官室に引きずりこんでひそかに愉しんでいたが、次第に大っぴらになり、私たちが不動の姿勢でみまもる中でやらせるようになった。この余興の一つに『チンチン、ゴウゴウ』というのがあった。それは越中一本になった兵隊たちが数人、列をつくり前の兵隊の禪の吹流しになった一方の端を口にくわえ、股をひらき中腰になった姿勢で、両手を前後に動かしながら廊下を練り歩くのであ

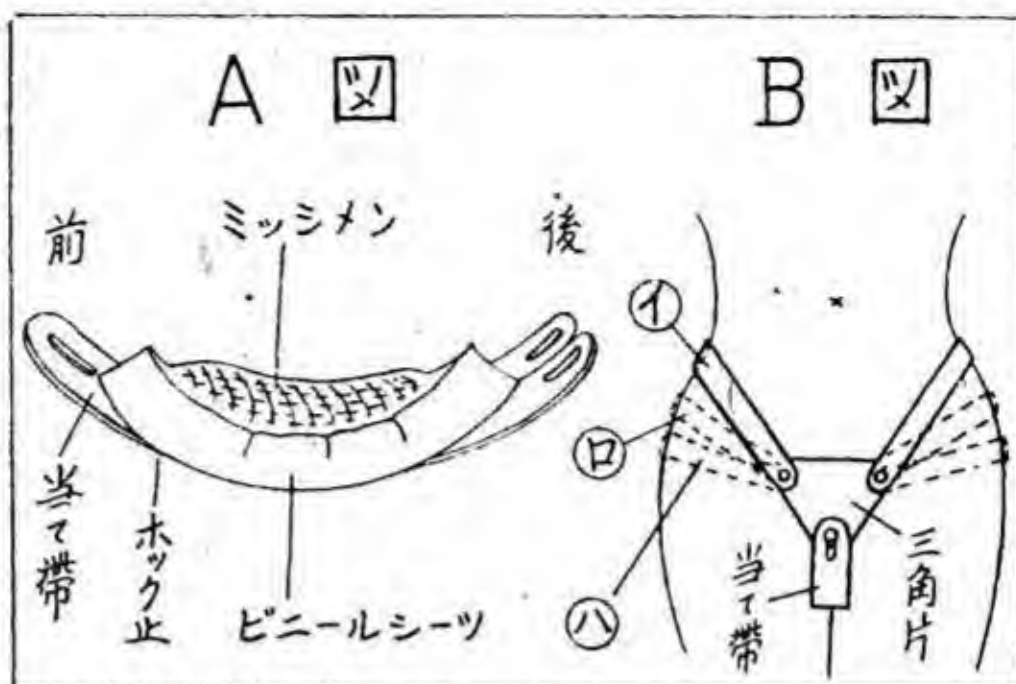


る。涙を溜めた兵隊たちの哀れな動作を下士官はゲラゲラ笑いながら見物するといった具合である。

(四) 敗戦の色が濃くなるとともに衣料の不足から禪も越中から兵隊禪にかわった。前部をようやくおおうだけのこの禪は、私たち兵隊にとっては厄介なものだった。それは一本の紐同然の後禪が、ようしやなく喰いこむのである。しかし激しい訓練は、これを意識することさえ許さなかった。この禪にかわってか

ら私たちは、バツターも禪をはずすことなく受けられるようになった。しかし下士官は、兵隊禪には又、それにふさわしい方法を考えた。それは日常の作業(訓練以外の)で洗濯掃除等の場合のように、いわゆる海軍じゅばんといわれるシャツと禪一本になることが多いのであるが、この場合、越中禪とちがって一枚の小さな布切れでできた兵隊禪は、兵隊の精力の所在をあますところなく露呈し、ごまかしがきかないのである。若い肉体から発散する生理的状況を端的に証明する、前袋のはちきれるようなふくらみを目ざとく見つけると、下士官はそれとばかりに兵隊に『休けい』を宣するのである。『休けい』というのは下士官室でおこなわれる余興のための時間ということである。下士官は次第に普通の兵隊では満足しなくなり、特にこのような状態にある兵隊を『稚児さん』といった。「あいつは可哀想に今日は稚児さんだ」と私たち

バンドマニヤのために 片桐唯夫



近頃、小生の妻が使用している生理帯の説明書とスケッチをお送りします。バンドマニヤ、或はふんどし愛好のフェチ趣味の方々の何らかの参考になったら幸いです。現在、市販されているバンドに次の様な

ものがあります。モデル諸嬢に着用させて着用フォトが実現できたら素晴らしいです。

一、パンツ型——白、黒、前ボタンのあるもの、ないもの、パンティ型、ブリーフ型（裾のV型が極端に切れ上ったもの、外国製品に多い）等。

二、三角布型——前後共、三角布のもの、前のみ三角布で後はゴムベルトを用いたもの等。

三、ベルト型——同封のミッシェンバンド式のもの、ガーター式のもの等。

△参考▽

衛生・快適・安全

実用新案ミッシェンバンド説明書

昔から、各種の月経帯が、考案に考案を重ねて売られてまいりましたが、何れも不十分な点が多々ありました。それら不十分な点を御満足いただけるように、新しい感覚によって工夫創作されましたのが、このミッシェンバンドであります。これまでのものとちがって、人体の骨格にあわせ、合理的に作られていますので、装着は簡単、御使用は軽便で、且つ有効的であります。なお御体に合せてかけ方を適当にしてください

は、よくささやいた。

この頃の私は、兵隊禪でY字型に吊りあげられた兵隊たちの、もりあがるような筋肉質の尻の躍動に、ひそかな視線を投げるようになった。あってもなくてもよいような一本の紐が、きびきびと動く下半身に、しめつけるような安定感をあたえているのである。したがって二回三回と馴れると、私は稚児さんにされることは一種のスリルともつかぬ愉しみになった。下士官のいぎたない命令にしたがって、同僚の兵隊の肉体と根かぎりたわむれる自分を幸福であるとさえ感ずるようになった。それは暗い軍隊生活の重圧の中で自己を解放する唯一の方法だったからだ。

△ 私たちが兵隊禪を常用するようになってから、一名『きんちゃん』とよばれるグロテスクな禪が、兵隊の肉体にぶらさがるようになった。それこそ、ぶらさがるといふにふさわしかった。私たちのパッチョク用に下士官が面白半分にしらえたものである。「お前たちには禪は勿体ない、これでたくさんだ！」このような捨てぜりふのもとに素っ裸になった兵隊たちは、下士官から押しただいてこれを前部にくりつけるのである。「海軍体操、用意！はじめ！」の号令で、この『きん

きますれば、大変心地よく御使用いただけます。病氣などで下りもののある方は、常に御使用になれば至って衛生的で、心地よい日々を御過しになることが出来ます。

ミッシバンドの特徴

- 一、形が細く、股の間にぴったり入る為めずれたり動いたりせず、着け心地が至ってよい。
- 二、股ずれができるようなこともなく、全く衛生的であります。
- 三、出血多量の場合にも、安心して活動ができます。
- 四、衣類を汚す心配はありません。
- 五、バンドの上には、日常御使用のパンティブルマーなどをおはきになって結構です。コルセットの下にも御使用できます。
- 六、バレー、登山、スキー、スケート、その他の運動の際に最適であります。
- 七、手軽に洗濯ができ何回も使用できます。
- 八、装具は大変美しく小型で、携帯用として便利であります。

ミッシバンドの使用方法

ミッシバンドには、本舗にて考案発売のミッシメンを御使用になるのが、衛生的であり有効的で、御安心であります。

一、A図のように、本舗考案のビニールシートを広げ、其の中に、本舗発売のミッシ

メンを入れ、ホックで当て、帯に装着します。こうすれば、ミッシメンが落ちる心配は全然ありません。ミッシメンは吸収率がよく、分散して局部に附着することが無く衛生的であります。

二、ミッシメンに装着した当て帯を股の間にはさみ、当て帯の後の二つのボタンが尾骨のあたりに行くようにして、局部にぴったりと密着させ、歩行の時動くことのないように、B図、(イ)(ロ)のいずれかの形にゴム紐をかけて引き、それによって当て帯をひきしめます。ぴったりと体についていればゴム紐が腰骨にかかっていなくても落ちる心配はありません。丁度よく足に合ったパンプスの靴がぬげないのと同じでしょう。

三、ミッシメンの取替えの時は、当て帯の前のボタンをはずし、当て帯全体を体の前にまわしますと簡単にできます。この場合後の二つのボタンをはずす必要はありません。

四、ゴム紐が多少、伸びてゆるんだ場合は三角片についている予備のホックを使います。

五、長らく御使用の後、当て帯がぐすんできましたら、オーヤラックス（消毒、漂白剤）を塗れば、二三分で綺麗になります。

六、ゴム紐の取替えは用意してあります。

ちやく』が面白おかしく躍動する。兵隊たちは、この『きんちやく』の運動をいよいよ興味あるものにするために全力を集中するよう強制されるのである。したがって私たちにとって『きんちやく』を落すことは、さらにはげしいパツチョクを招くことになるので、あらゆる運動にたえられるように、その紐をしっかりとひきしめておくことを忘れなかった。

グンタイとハダカとフンドシ、それは筆者にとって終生、忘れられない思い出となるだろう。

以上は事実以外に作爲的な部分もあるが、しかし、それと類似したことは実際に行なわれていたし筆者も経験した。『きんちやく』の部分は、まさかと思う人がいるかもしれないが、これに近い事実筆者自身、経験している。

最近、禪を愛用する人がふえているようであるが、この人々とこのような生活を再現できたら、どんなに愉快だろうと思っている。筆者は現在、六尺禪を愛用しているが、禪の緊縛感なしに生きてゆけないほどマニヤになっていることをお伝えし、愛禪家諸氏との交友を望みたい。

連載小説

“宇宙のどこかで”

—（無期懲役囚の手記より）—

佐 治 麻 造

（再び）使役囚（13）

美しい異国人の女囚二十七号と共に、典獄夫人の管理の下で、女中のお加代の命令によって毎日苦役を勤めました。生活風習も異なり又言葉も細かい点になるとよく分らない二十七号囚は、事々に機嫌を損ねては容赦ない懲戒を加えられ呻吟します。夫人やお加代の虫の居所によっては、私も連坐させられて苦しめられるのでした。

日曜日のことでした。女囚二十七号と私は、乗用車に革具と鎖で繋がれ、夫妻を乗せてゴルフ場へ曳かされました。広大な緑のゴルフ場の一角では更に拡張工事が施工されつつあって、三十名程の懲役囚が駆り出され、苛酷な鞭と戒具に責められ乍ら切々として苦役

して居ました。土木機械は殆んど用いられず、トロツコすらなく、シャベルとモッコで斜面を切り拓く仕事です。私共が繋がれた駐車場の向うの低い崖の上はクラブハウスの庭園になって居て並べられたテーブルには、あちこちに談笑する男女の人々の姿が見られました。ずっと左手の方の工事場から出る土を女囚達がモッコで運んで来て庭園の隣の凹地に捨てて居ます。女囚は二名宛、一本の棒の両端を短い鎖で首環に繋がれ級に応じた戒具を施されて、大きなモッコを棒の中央で吊って、鉄鎖を鳴らし乍ら汗水垂らして往復して居ました。鞭を片手に歩き回って監視する看守達。クラブハウスの庭園を怨めしげに盗み見て一息ついた一組の女囚は、忽ちに見とがめ

られて肌に鳴る革鞭の痛さに、嵌口具の中で押しつぶした様な悲鳴をあげ、重い頑丈な手錠が嵌まった両手で肩の棒をかつぎ直し、モッコを一杯にして貰うべく工事場の方へと急ぐのでした。

キャディ達も、よく見れば少年囚達が混って居ました。服役成績の良い少年囚達がキャディとして使役されている訳で、彼等は革鞭だけの裸ですからすぐ分ります。首環の音響器を鳴らして同じ年頃の少年少女達に叱られ、からかわれ乍ら、神妙に奉仕している姿は可哀想なものでした。

「お前達ね、やはり一旦お帰り。電話するから迎えに来るんだよ」

出て来た夫人に鉄柱から解かれ、空車を曳いて邸に帰り、お加代にこき使われた後、夕方近く再び空車を曳いて迎えに急ぎます。ゴルフ場の一角の工事場の道ばたでは、今日一日の苦役を終えた懲役囚達が帰獄する支度をして居ました。全部三級以下らしく、自らの手錠を腰枷に固定し、股間から股間へと太い鎖で連鎖されて居ます。

「アッ、居た居た。千枝子や、千枝子……」

質素なみなの中年の婦人が一人、大声で叫び乍ら小走りに数珠つなぎの懲役囚の方へ近寄ろうとして婦人看守に止められました。

「駄目よ。おばさん、どうしたの？」

「……あ、あの……あの娘が居るんです。その……六十一号と……胸に書いてあるのが……。どうしても面会を許して頂けないもんですから、ひょっとして外で働かされる時にでも会えやしないかと思って……」

私共は思わず立止ってしまいました。母の姿を認めた女囚六十一号は身もだえして、思わず足を踏み出し、股間の鉄鎖をガチャつかせます。それにしても、変り果てた戒具姿、嵌口具で顔の下半分を

隠された女囚を我が娘と知る此の婦人の眼力は母なればこそです。

「おお……可哀想に……。あんなに縛られてしまつて。さぞ辛いだろうねえ。お役人様。お願いでございます。決してお手向いしたり逃げたりする様な娘ではございません。あんなに……むごたらしく縛らないでやって下さいまし。ほんとに可哀想で……」

「困りますねえ、そんなこと云われても……。六十一号は、今は人間じゃないんですのよ。刑の執行中は当然の苦しみを受けて居る訳なんですから……。刑が済んだら気の済む様にいたわってやりなさいな。邪魔しないで下さいよ」

婦人は肩をふるわせて立ち、監房へ曳かれる娘の哀れな姿を暗然として見送りました。

ハッと気付いた私共は、あわてて車を曳き出しました。

「おそいじゃないの！」

夫人にきびしく叱られた私共は何度も額を地面に摺り付けて赦しを哀願します。其の夜は膝立ちで吊られる懲戒を課せられました。理由は迎えが遅れたことです。全く私共が悪かったのですから当然のことと、むしろ軽い位の懲戒と云える程ですが、夫人の意地悪い思い付きにより、二人同じ檻へ入れられ、しかも一つ環に鼻を吊られてしまったのでした。おまけにお互いの腰枷の後部が鎖で締め寄せられてしまいました。両手両足は勿論、背後で一つにされて居ます。お互いの息のあえぎが顔にかかり触れ合う肌は脂汗でヌルヌルとし、云うに云われぬ苦しみの一夜を過ごしました。

女囚二十七号は三カ月足らずでお払箱になりました。やはり言葉が満足に通じない異国の女は、慰さみ物にはいいのですが、不便の方が大きかったでしょう。入れ代って曳かれて来た小柄な女囚の

嵌口具が外された時には驚きました。私が嘗て刑死の寸前、絞首台から下ろされ病監に収容されて居た時、やさしくしてくれた看護婦の変り果てた姿ではありませんか。女囚二〇五号も漸く私に気が付いて思い出したらしく、黒目勝ちの大きな眼を見開いて声を立てました。

「オヤ、お前達、知ってるのかい？」

「……ハ、ハイ……奥様。あの……私が以前、司法病院の看護婦をして居ました時、此の人が絞首されかけて……」

「あっ、成程ね。そうお。フ、フ、フ、フ。妙な回り合わせじゃないの。面白いものね」

女囚二〇五号は私と同じく五級囚でした。

夜になって、後手に嵌められた第一種手錠をグッと首環に吊られ足錠をもつらせ乍ら檻へ蹴込まれた彼女は、床に顔を押当てて噁り泣きました。

「どうして……懲役になんかされたんです？」

「私が馬鹿だったのよ。男に欺かれて……。あなた知ってるでしょ、あの男と結婚したんだけど……。箸にも棒にもかからない男なのよ。怠け者で遊び人。ああ、此の手錠、久し振りの警察手錠だわ。緊まって来て……痛いわ。ウッ……。足錠もそうなのね。ひどい扱いだわ」

彼女は顔をしかめて身をもだえました。足の鎖は短く腰枷に吊られ、腰は「く」の字に曲げたままです。

「ああ、こんな……。私、恥かしくて……」

「何云ってるんですか。私だって御覧の通り御同様の恰好ですよ。気にしなさんな」

「フフフ、そうねえ。お互い、もうけだもの同様の身なのね。えーと……それでねあの男がね、私の伯母の財産に目をつけちゃったの。伯母は子供もなくて、私が相続者だったのよ。交通事故に見せかけて殺してしまったの。私も知らずに一役買わされて……。ほんとに済まないことしたわ。けどね、うまく考えた積りだったんでしょ。けど、すぐバレてしまったの。それで……。あの男は死刑！もうとうに首を絞められたと思うわ。私も共犯者にされて……。あいつ飽く迄私を道連れにしたかったのね、本当のこと云って呉れないのよ。ほんとうにもう……。口惜しくて情けなくて。それでとうとう懲役二十五年と云う訳なの。くそっ、此の手錠、せめて首に吊ってさえないければ、うんと楽なのに。脚を伸ばしたいわ。あなた、いいわねえ、普通の手錠や足錠で」

「其の代りにね、あなたは昼間は楽でしょう。膝枷だけの筈ですよ」
「フ、フ、フ、フ、その埋合わせなのね。けどねえ、こんな戒具の辛さは想像も出来なかったわ。私、あなたに手錠やなんか嵌めたところあるけど、ごめんなさいね。ともかく鍵がなけりゃ外れないんだから情けないわ。あら、あそこの扉のこの壁にブラ下げであるのは戒具の鍵じゃない？」

「そうですよ。右の方の小さいのが、あなたの方の鍵らしいね」
「アーア、ほんとに……馬鹿にしてるわね。けど二十五年の言渡しを受けて鋼鉄の首環や鼻環なんか嵌められた時は涙が止まらなかったわ。二十五年って永いわねえ、まだ半年足らずよ。考えたら気が狂いそう。アラ、あなたは終身刑だったのね、ご免なさい。仕方ないわね。我慢して……そして早く奴隷にして貰いましょうよ。あぁ……手が千切れそう。何とかならないかしら。ウ、ウ……。ウーッ」



「動かすからさ。第一種だつてこと忘れちゃ駄目だよ」

「……くそっ。夜になったら檻へブチ込むというのに……こんなもの嵌めるなんて……。ね、あなた、ここでもやっぱり懲戒あるの?」

「あるとも! 口惜しいけど絶対服従で神妙にしてるしか仕様ないよ。奥様はきついぜ」

「……まあ諦めろわ。フッフ、諦めないと言ったってどうも仕方がない訳だけど。けどねえ、刑が決つてさ、御礼奉公の時にね、前に勤めた病院で労役させられたの。ほんとに残酷だと思つたわ。昔の同僚や部下だった女の眼の前で浅間しい姿で床を磨いたり、便所を掃除したり。ほんとに悲しかったわ。分るでしょ? 今考えても胸が熱くなつて来るの。懲役つてこんなに辛いものとは知らなかったわ。あ、又鞭痕が痒くて堪らないわ。クククーウウ、ウ、ウ、……」

女囚六十一号は語りつかれて体を丸めたまま寝入つてしまい、私は陽に灼けた彼女の全身にむごたらしく残る、新旧数十条の鞭のあとを鉄格子越しに眺め、感慨に耽るのです。

使役囚(14)

或日のこと、浴室で夫人の体を洗って居た女囚二〇五号は誤つて冷い水を夫人の脚にかけてしまいました。其場でタイルの床に蹴倒されて叱られたのは云うまでもありませんが、更に其晩には反復平伏五百回の懲戒を課されることになり、私と一緒に例の器械を寢室の前の庭先に組立てさせられた二〇五号は、尻に電極針を突き刺されて台上に坐りました。独り檻へ曳かれた私は彼女の苦しみを想つて囚われの悲哀をつくづくと噛みしめるのでした。

平伏の回数は、やはり足りなかった様です。男の私でさえ終り頃には体が云うことを利かなくなつた位ですから無理ありません。翌日、フラ／＼し乍ら額に生汗を滲ませて労役を済ませた二〇五号は、回数不足の罰として更に檻の中で逆海老にされました。お加代に足で蹴られ乍ら、這いうごめいて檻の中へ入れられた二〇五号は、死んだ様に俯伏せになつて居ます。

「おい、おい、しっかりおしよ」

お加代の去るのを待ち、檻の鉄格子に顔を押当てて呼びました。

「……ウ、ウーン……ウ、ウ……。アア苦しい……」

呻く彼女の脇腹から背中、尻にかけて真新しい数条の電気鞭のあとがむごたらしく、全身脂汗で光つて居ます。

「……あ、あんまりだわ……。ほんのちょっとばかり水が掛つたからって……。こんな……。いくら懲役囚だからって……。あんまりだわ」

「辛抱おしよ。苦しいだろ。脚を揺げると少しは楽だよ。木の首枷を嵌められてないだけ、まだましだな」

「何云つてゐるの。膝にも枷がついてゐるのよ。ア、アー……。一晩中こうしてほつとかれるのね。くそっ！ 咽喉がカラ／＼よ。一口でいいから水を飲みたいわ」

「ナ体いくら足りなかつたんだい？」

「五十回程なの。もう体が硬張つて何ともならなくなつたのよ。窓からね、何か飲み乍らニヤニヤして見物してゐるの。口惜しくて……。……きつと仕返ししてやるわ、刑が済んだら……。あのお加代って娘にも、手錠や足錠の味を味わせてやらなくちゃ」

身もだえして苦しみ口惜しがる二〇五号は、未だ囚われて日も浅いので、囚われの身になり切つていない様でした。

暫くしますと今度は私が飼犬の尻尾を踏みつけてしまいました。現場をお加代に見られたものですから一も二もありません。犬の前へ額を摺り付けてひれ伏し詫びさせられ、したたか簡易電気鞭を貰いました。そして夜になつて、寝衣姿の夫人から窄衣の懲戒を云い渡されました。

「お前、窄衣は初めてだろ。余り使わないけど、ちょっとしたものよ。フフフ……」

他の刑具や懲戒より内臓をいためる度合がかなり大きい窄衣は監獄でも余り使用されません。埃を薄くかぶつた革の窄衣の手入れをさせられ、夫人とお加代は笑い興じながら私の体に施しました。両側に締め紐のついた革のチョッキの様なもので、下端はへその辺迄です。太腿の付根に革バンドで締められ、腰枷に結んで腰枷が上へずらない様にされ、更に窄衣の下端が腰枷に結ばれます。窄衣の両側の締め紐は丁度、靴の紐の様になつて居て一方へ滑らない様な孔の構造と材料が使つてあります。付属の器具で丹念に上から下へと少し宛、紐を何度／＼締めつけられ、私の胸はビクとも動かせない様になりました。嵌口具を外され、思わず舌を出してあえぎます。もはや、ほんの小刻みにしか呼吸できません。涎れが垂れて来ます。

「そんなものでいいじゃないの。ホホホホ、苦しい？ もう眼が吊上つて白くなりかけてゐるわね。今晚そうしてゐるのよ。もういいからお手々を下ろして……後手錠にするのよ。決つてゐるじゃないの。馬鹿だね、ほんとに」

其の晩の苦しみ！ 思い出してもゾッと致します。二〇五号囚のいたわりの言葉も殆んど耳に入らず、苦しみに苦しみ抜いて、朝を待ちこがれたのでした。

翌日は檻の中で休ませて貰えましたが、それから暫くの間は体の芯を抜き取られた様で、窄衣の恐ろしさを身に泌みて思い知りしました。

「窄衣ってほんとに苦しいのね。私、見てるだけで震え上ったわ」

女囚二〇五号が檻の格子越しに慰めてくれました。

夫人は時々残酷なことを思いついて私共を苦しめ辱めずかしめて慰めものにしました。その中でも今考えても身を切られる様な思いが致しますのは「抱かせ責め」とでも呼ぶべき責苦でした。

「お前達、何の楽しみもなくして可哀想ね。今夜は少し面白い目に会わせてやるからね」

私と女囚二〇五号は、向い合って立たされました。お互いに首を抱いた恰好で手錠を受け、更に相手の首環の後部に繋がれます。腰枷の両横を鎖で結ばれお互いにグツと引寄せられ捕縄で膝と膝とを括り合わされました。嵌口具を外され、十五センチ程の鉄棒の両端をそれぞれ鼻環に嵌め込まれ、私の足錠は外されました。そして第一種足錠で右足と左足と云う風にそれぞれ片足ずつ繋ぎ合わされて横歩きに檻へ追い込まれてしまったのでした。残酷な笑いを残して夫人とお加代は立ち去ります。其の夜の苦しみ加減は御想像に任せますが、世の中で最も残酷な責苦の一つでしょう

使役 囚(15)

典獄の邸で使役されてから既に二年近い月日が流れ、女囚二〇五号が来てからも約三カ月経ちました。

「一週間ばかり旦那様のお伴して出張してくるからね。其の間、お前達、監獄へ帰っという。取扱いは八級並みよ」

或日、夫人からそう云い渡され、夫妻を送った後、戒具や檻の入れを済ませた私共は第四種の手錠足錠で緊め上げられ婦人看守に連れられて帰獄致しました。そして腋鎖、胸鎖をつけられ両足は第三種足錠で自由度〇にされ、第四種後手錠、嵌口具のまま暗房へプチ込まれたのです。暗房は初めてでした。約二米四角のそれこそ一筋の光もない漆黒の監房です。四方の壁は内側に傾斜し、床には三角の鉄棒が角を上向きにして五センチ位の隙をもつて並べてあり、その上には五十センチの空間を隔ててコンクリートの床があります。便は垂れ流しで食事は日に一回与えられましたが、食事の時でも光は全然、入らないのです。と云うのは扉は嚴重な二重鉄扉になって居て、監房の天井にある赤外線灯によって赤外線眼鏡をかけた看守が出入りして嵌口具を嵌め外しするからです。

「そら食事だよ。ここへおくよ。ホホホホ、何してるの？　ここだよ」

婦人看守にとっては何もかもはつきり見えるのでしようが、私には一寸先も見えません。体の節々に当る三角の鉄棒の上をものがき回り、一本にされた両足とビクともしない後手錠の身をのたうち回って、微かな匂いをたよりに漸く囚人食の器を額で探り当てました。「なにグズグズしてるの？　もう時間がないわね。いいかい、お前の食事時間はね、嵌口具を外してから五分間だよ」

サッと食器を取り上げられ床の鉄棒を舐めてしまいました。闇の中で小突かれ乍ら嵌口具を受け、鉄扉が無慈悲な音と共に閉まりました。

横になろうが、どうすることもできない苦しさ。傾斜した壁は長くもたれかかることを許さず又低い天井は立ち上ることも出来ませ

ん。一条の光もない真暗やみの不安感。本当に気が狂いそうでした。普通の八級囚なら昼は苦役に出されるのですが、私にはそれもなく二回目の食事のあと大きな木製の首枷を嵌められてしまいました。もう苦しくて／＼食事の時、嵌口具を外されますと夢中で哀願するのでしたが赦される訳ありません。

「御邸の使役は、ずい分と楽だろ。其の埋合せさ。おとなしくしないと。足を曲げさせてしまうぞ」

言語に絶する一週間の苦しみの後、眼隠しをされて外へ出されました。獄庭の鉄柱に繋がれて眼隠しを取られます。夜と見えて、あたりは真くら、仰いだ眼に星の光が突き刺す様でした。少し離れた鉄柱に女囚二〇五号が繋がれて居るのが段々と見えて来ました。薄紙を剥ぐ様に夜が明けて来て、私共の眼も光線に慣らされ、明るい朝の光の中で全く蘇生の思いが致しました。一しきり鉄鎖と鞭の音が鳴り響き、今日の苦役に駆り出される使役囚達の哀れな姿が右往左往しました。ひる過ぎ迄そのまま放置された私共は再び典獄邸へ送られました。

夫妻は既に帰っており、匂うばかりの艶やかさでくつろいでいる夫人の前にひれ伏し、与えて貰った苦しみの御礼をいいました。

「……少しは骨休めになったかい？ ホホホ、今日からね、二人共、四級にして上げる。嬉しいだろ。けど戒具なんかは適当にきつくしたり、ゆるくしたりするからね」

夢の様な言葉でした。四級囚！ あと一つ昇級すれば奴隷の資格を得て自由の身になれる可能性も生れて来るのです。しかも何思ったのか、労役の間も手錠足錠を全く外してくれました。嵌口具も規定通り赦されます。本当に有難くて、嬉しくて、夫人の姿を見る度

に土下座して合掌してしまいました。夜の食事の際も後手錠なしで、自ら両手を後で組んだまま啜る様に命じられました。

「どう？天国みたいだろ？ お庭へお回り」

女囚二〇五号は毎日の習慣で両手を後へ回して不審気にお加代を仰ぎ見ましたが、二人共そのままテラスの前へ追いついて地べたに正座しました。新調の煽情的なネグリジュを着た夫人が出て来ます。

「夜はね、手位いくつとかなくちゃね。二人共、手をお出し」
第一種手錠を取出す夫人。

「……奥様、あ、あの……前でございますか？」
当然の後手錠を予期して居た私は、思わず上ずった声で訊ねました。

「オヤ、不服なのかい？」

「……と、とんでもございません。余り……勿体なくて……」

女囚二〇五号と私は、嬉しそうに両手を揃えました。カチャ／＼と両手首に嵌められる手錠を見乍ら、複雑な気持をこめた涙がホロリと落ちました。

「ああ、楽なこと！ほんとに天国みたい」

檻の固い床に背中をピタリとつけて仰臥した私共は、お互いに喜び合いました。

「しかし……急に……。何だか気味が悪いなあ」

「いいじゃないの。考えることはなくってよ。何かいいことでもあったんでしょ。それよりかついで此の首環も外して呉れたらねえ。あなたはあそこの錠、外して欲しいんじゃないかって？フフフ……」
「ぜいたく云うなよ。けど前手錠は本当に楽だな。生返った様だ

よ。おい、明日から又、気が変って後になるんじゃないかな」
 「それでもともとよ。今晚だけでも儲け物だわ」
 しかし案に相違して、それから手錠足錠なしの労役と、夜は前



手錠だけの日が続き、ビンタや足蹴は以前と変わらず存分に加えられますが、鞭は殆ど当てられません。全く天国の様な日常でした。一カ月余り経った或る夜、私共に手錠を嵌めた夫人は、テラスの椅子に坐って、長襦袢の襟元をはだけて二〇五号にうちわで煽がせ乍らいいました。

「今度ね、旦那様は本省へ帰るのよ。栄転よ。ホホホ……。長いこと御苦労さんだったわね。四、五日したら後任の方がお見えになるわ。お前達を引続いて使役して下さるかどうかわらないけど……。ま、どっちになってもね、神妙に刑を受けるのよ。いいかい？もう会うことは先ずないだろうけど、お手数を掛けるんじゃないよ」

寛大な取扱いの訳が読めました。そして、捨てた女に使役される精神的苦痛から解放される喜びと共に一抹の悲しさが心に迫りました。
 「六十四号！ さぞ情けなかったらうね。辛かったらう。私が怨めしいかい？」

「……奥様。とんでもございません。御慈悲の程……懲役囚の私には勿体ないばかりでございます。ありがとうございます」

手錠の嵌まった両手を合わせ伏し拝みます。
 「フ、フ、フ、そうかい。お前も未だ若いのに、可哀想だけど仕方ないわね。下手すると一生涯、鎖に繋がれて暮すことになるよ。早く奴隷にし

て頂kindだね。まあ何れにしても、これからまだまだ二十年や三十年はそうして何の楽しみもなしにさ、自由なのは呼吸する位のもので……体中に錠前を嵌められて過す訳だね。まあ辛抱おしよ。

ホ、ホ、ホ、ホ

正座した眼の前の真紅の長襦袢の裾からこぼれて見える白い小さな足、そして小気味よく引き締った足首を眺め、切なさに胸を掻きむしられる様でした。

四、五日して後任の人が単身赴任し、引継ぎの後、邸で夕食を接待しました。

「あの、この二名ですよ。使役してたのは」

夕暗の庭先に並んで土下座します。

「……引き続き使役してやって下さらない？ 割とおとなしいんですのよ。それに良く仕込んでありますし……。御家族の方、いとお見えですか？ 私達、此の金曜日に引き払いますわ」

「家族は十日許りしたら参りますよ。家族って云ったって家内と小さい子供一人、それに女中の三人ですよ。フン、六十四号に二〇五号ですね。何級ですか？」

「四級ですよ。二人共。特に戒具は省いてやってるんですよ。これ、顔をお上げ！」

ふり仰いで新しい典獄を見て全く驚きました。何と大学の時の同級生Fではありませんか。思わず声を立て、そして次には肩を落して深くうなだれて恥入りました。

Fもすぐ気付いた様で

「なーんだ、君かい。うん三、四年前、懲役に行ったって聞いてた、が……。ここに居たのか。どうだい、工合は？ ハ、ハ、ハ、ハ……」

Fとはそんなに親しくはない間柄でしたが、ともかくもう恥かしくて情けなくて、思わず両手で顔を掩うて涙をこらえました。

「アーラ、御存知ですか？ 左様ですか、大学が同級で……。まあそうですか。ホ、ホ、ホ、ホ、えらい違いですこと」

夫人は満足気に笑って

「お加代さん。あれ後手にして……」

と事もなげにいいました。旧友の眼前で齒をかみしめて涙をこらえ後手錠を嵌められ恥辱の身を立たされました。

「ハ、ハ、ハ、恥かしがったって仕様ないじゃないか。Fさんも何とも思っちゃ居られないだろうよ。当り前の姿なんだからな」

典獄が冷笑しました。

「まあ、気持は分るけどね。なに、直ぐ慣れるよ。それ共そんなに恥入るなら監獄へ帰るか？ どちらにしても、特別扱いはいしなせ」

漸く落着きを取戻した私は、諦めて使役を継続してくれる様、頼みました。

「ほんとに運の悪い方ね。お察しするわ」

檻の中で男泣きに泣く私を、女囚二〇五号は、やさしく慰めてくれるのでした。

翌日から引越の準備です。手伝いに来た看守や、職員の人々に混って息つく間もなく追い回されました。

「じゃ、いよいよ明日、出発よ。お別れのしるしに鞭でも上げようかしら」

お加代と二人で私共は全身に鞭を浴びせられた末、

「今夜は縄を掛けておいてやろうかな」

と捕縄で、ひしひしと縛り上げました。

「……ウ、ウーン……捕縄の味って又、格別ね。ウッ、首が締って……ウ、ウ……ウ……こんな風に縛られたの初めてよ……捕縄掛けられたって当り前の分際なのね……ウッ……苦しいわ」

女囚二〇五号は、喰い込む捕縄の痛さに悲痛な声で呻き、もたえしました。

使役囚(16)

家族や荷物の来る迄、新しい典獄は旅館に住まい、私達は留守番の近所に住んでいる看守夫婦の指図で邸の内外を磨き立てました。やがて荷物と前後して家族も来て何やかと追い回します。

家族は、静子夫人と五、六才の子供、そして女中のお秋でした。一段落して午後のお茶にテラスに集っている皆の前に私共は土下座してひれ伏しました。

「静子や。この二人、いや二匹がうちの使役囚だよ。知ってるだろうが、絶対服従なんだから、遠慮なくこき使うんだよ」

「私、何だかこわいわ。手向いしない？」

「ハ、ハ、ハ、だいじょうぶ！ お秋にも云っとくが、此奴等はね、甘やかせちゃ駄目だよ。なぐっても蹴っても口答え一つしやしないよ。使って見ろよ、楽で便利だぜ」

「ねえ、あなた。つまり奴隷と同じに扱ったらいいのね」

「そうそう。ただの奴隷さ。おい、こら。お前達。戒具は規定通り施すからな。二〇五号もな、家の中でも足錠だけしか外してやらないからな。気に入らなけりゃ降級して追い帰すぞ」

私の両足には自由度五の第三種足錠を、両手には自由度二の手錠

を自ら嵌めさせられました。女囚二〇五号も足錠の代りに膝枷を、両手には手錠を自ら嵌めて、しょんぼりして居ました。

「此奴等には鞭が一番なんだ。どれ……」

旧友F、いや典獄の手ずからの革鞭をタツプリ受け、苦痛と屈辱に呻きました。

罪名と刑期と囚人番号をいい、足蹴を受け乍ら次々と絶対服従を誓い、慈悲を乞います。

自分で後手錠にし這いつくばって囚人食を啜る私共を見て、夫人とお秋は声を合わせて笑いました。

其晩から再び後手錠です。

「……アア、又かゆい所もかけないのね。鞭、痛かったわ。やはり男の人は力があるわねえ。けど今度の奥様やさしそうじゃない？ 少しは哀れんで下さるかも知れないわ」

二〇五号の言う通りでした。女中のお秋は若いせいもあって、しばしば鞭を当てますが静子夫人には一度も鞭打たれたことはありませんでした。たまには叱ることはありましたが、その時でも、せいぜい頭を踏みつけるか、横面を軽く平手打ちする位のものです、本当に勿体ない位でした。此の人の恩は忘れ得ません。

「不自由だろ。手をお出し。外して上げるわ」

重い手錠のまま労役する私共を見て、鎖だけでなく、手枷全部を外してくれる事もしばしばありました。

「もう主人が帰る頃だからね。可哀想だけど……。お嵌めよ」

勿体なくて勿体なくて涙が止まらない位です。

「手首の色が変ってしまってるのね。こんな鋼鉄の枷なんか嵌められて……。辛いだろうねえ」

夜、戒具の検査を受ける時など、後手錠を赦してやる様に典獄に頼んでくれることもありました。又、水を飲むことを黙認してくれた嬉しさ。本当に神か仏の様な人でした。ただ一度だけ私達二人共夫人からひどく懲戒されたことがありました。先ず二〇五号の方ですが、居眠りしてしまって、夫人の下着をアイロンで焼いてしまったのです。

心から泣き詫びて懲戒を願った二〇五号に

「……私、鞭は嫌いなよ。そうね、当分、檻の中で逆海老にして……首に枷でもつけとこうかしら……」

十日間ばかり檻の中で大きな枷を嵌められ、両手両足を背中で一つに括られて毎夜を過した女囚二〇五号は、怨みごと一つ口にせず神妙に懲戒を受けたのでした。

私の方は、もっともっとひどい落度でした。前の夫人なら半死半生の目に会わされたに違いありません。草むしりして居た私の傍に来た子供に気付かず、私の汚らしい尻の辺りで、子供を突き倒してしまったのです。故意であろうとなかろうと、赦される身分ではありません。流石の夫人も眼の色を変えて怒り、スラリとした足でさんざん蹴り飛ばされ踏みつけられた末、窄衣を施され、締め紐に錠を下ろされたまま労役を続けさせられたのです。苦しくて苦しくて堪らず、つい赦しを哀願しますと、嵌口具を嵌めてしまいました。「いくら頼んだって駄目よ。坊やが怪我でもしてたら責め殺してやる所よ。駄目々々！」

一滴の水も与えられず、後手錠を首環に吊られ檻へ蹴り込まれました。怒りの程が身に泌みました。

「……よっぽど御腹立ちになったのね。あんた苦しいでしょ。明

日、私からもよくお詫びして上げるからね。今晚一晚位、辛抱なさいよ。けど、ほんとに馬鹿ねえ」

翌日、ひる前に窄衣は少し弛められました。脱がせては貰えず、夜になると再び締めつけられて檻へ入れられ、嵌口具の隙間から泡を吹いて苦しみ悶えました。其の次の日の午後、漸く赦されましたが、本当に身の程を骨身にこたえて知りました。

「六十四号！ 窄衣はこれで赦したげるわ。けど当分、夜は首枷よ。これからは手錠を外してなんか絶対にやらないから……」

それから十二、三日の間というものは檻へ入れられる際には夫人手ずから木の首枷を嵌め、怒りの程を示しました。

「おい、おい、もういい加減に勘弁してやれよ」

きゃしゃな腕の白さを寝衣の袖からチラチラさせて、重い首枷を私の首に嵌める夫人に、典獄が声をかけました。

「済んだかい？ おーい、お秋！ つれてけよ。さ、お前、早く寝ようよ」

奥様の肩を抱いて寢室へ去る姿を見て悲しくなりました。分際のは相違は如何とも出来ません。

「フ、フ、フ、辛そうだな。察してやるよ」

典獄にからかわれ、囚われの身の悲哀に胸が熱くなりました。

使役 囚 (17)

一年程で典獄は転出し、今度は独身の婦人が着任しました。私共は哀願する機会も与えられず交替させられて監獄へ戻されました。旧友の典獄と静子夫人の慈悲で帰獄と同時に三級囚に昇級した私共は、もはや話合う術もありませんが、時々顔を合わせる度に、奴隷

にして貰える希望に燃えた眼を見交わすのでした。

もはや獄内では監房の内外を問わず、あの重い足錠は嵌められません。又、房内でも前手錠なのです。本当に嬉しくなりました。課される労役も大分、楽で、五級囚以下の監督とか獄内の雑用です。三カ月以内に降級されると大変ですから、それこそ、死物狂いになつて勤めました。或日、総務課へ曳かれ婦人職員の前に正座しました。

「六十四号。本日でお前は奴隷の資格を得た訳よ。えーとね。刑期は終身と……。今迄の期間が三年と十カ月ね。例えば今日、奴隷にして貰えたとすれば……二十八年の奴隷刑で済むことになるのよ。どう？ 奴隷刑に振替えを嘆願するかえ？ ホホホ…… 聞く迄もないわね。終身刑だものね。これに拇印をおして……」

夢中で拇印を押します。腰枷にガッチリと固定された前手錠が、手首の骨にゴリッと当りました。

「……言っとくけどね。必ずしも奴隷にして頂けるとは限らないよ。刑期が永いから予定価格も高いしね。買手があるかどうか……ま、年一回宛、三回迄は品定めして貰えるからね。フ、フ、フ……来月の中頃、押送してやるわ」

二十日程して、男女の三級囚四名と共に連鎖されて出発しました。女囚二〇五号も嬉しそうに同じ鎖に繋がれて居ます。獄外へ出るのですから、第三種手錠を自由度〇に後手に掛けられ、両足には自由度五の第三種足錠を腰に吊られ、ガッキと嵌口具を噛まされて曳かれました。船から降ろされた私共五名の中、三名は、どこか他の都市で競売にかけられるのでしょう、別れて連れ去られ、私と女囚二〇五号は連鎖をガチャつかせて首都行きの普通列車の三等車に乗せ

られます。社会の人々に久し振りでジロジロ見られる恥しさを全身で味わい乍ら、二人の婦人看守に護られて、片隅の座席のシートの間に坐らされました。女囚二〇五号を前にして、通路に向いて狭い床の上にガラガラと正坐します。婦人看守は私共の膝の上へ靴をのせ鼻環に細い鎖をつけて自分達の腰のバンドに結び付けました。

そして丸一日近く飲まず食わずの私達のすぐ眼の前で駅弁を買ってたべます。人々のあわれみとさげすみの視線。嗚呼早く自由の身になりたい、此の拘束を解かれないと痛切に考え乍ら、齒で嵌口具の鉄丸を噛みしめるのでした。女囚二〇五号が繰返す哀願のものがき方に、舌打した婦人看守は、面倒臭そうに便所へ行かせてくれました。連鎖を鳴らせ足鎖を引摺って、膝で通路を歩いて行きます。

「人間、あんな風にだけはなりたくねえものだなあ」

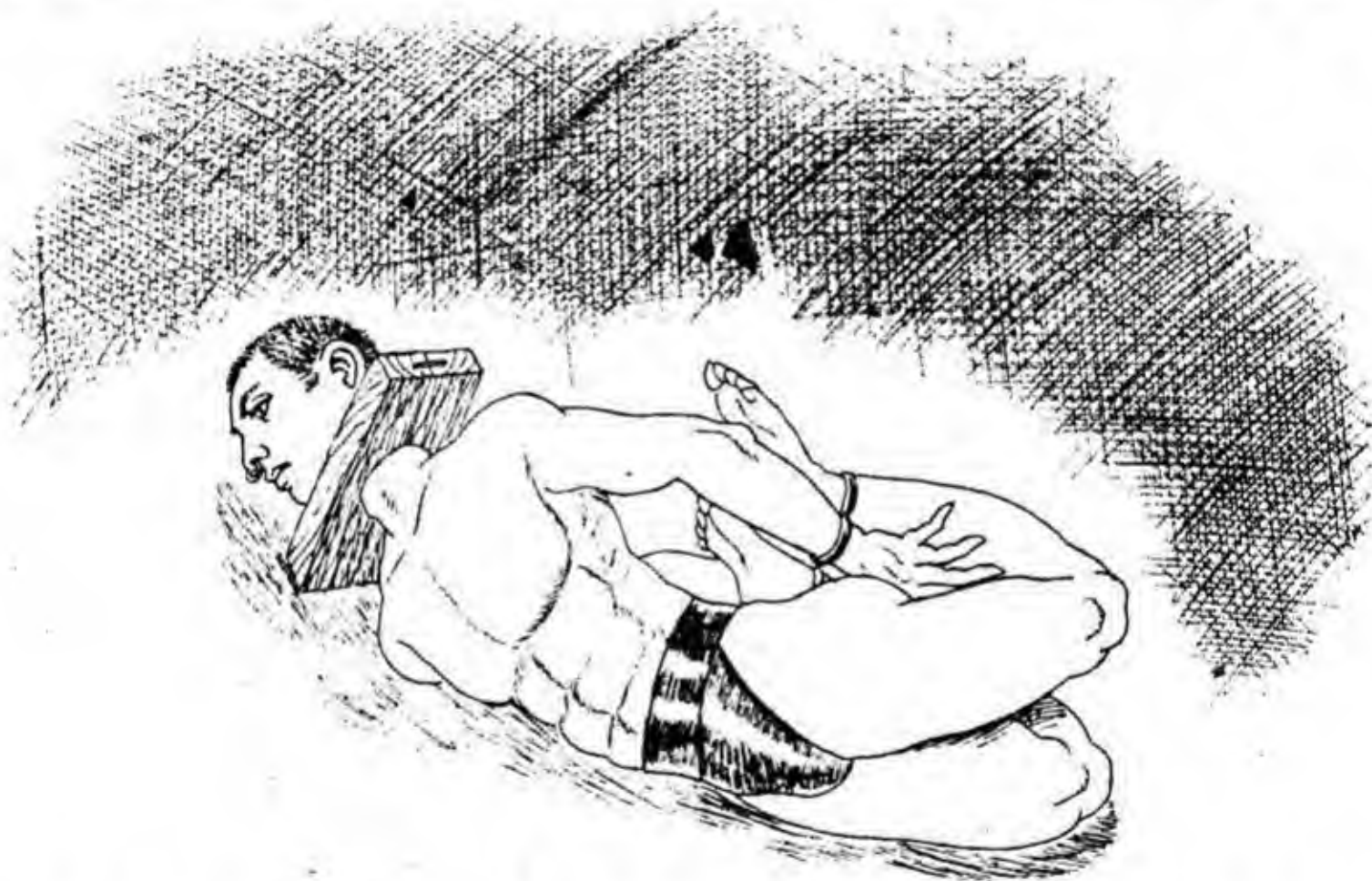
「ほんとね。あの頑丈な枷や鎖をこらんよ」

後手錠のまま監視され乍らの用便、再び連鎖の鎖がつき、女囚二〇五号は肩を震わせ乍ら通路をいざり、私も彼女の姿を見乍ら物悲しくなりました。

奴 隷 競 売

奴隷競売の様式は各都市によって様々ですが、首都に於いては一人宛、台上に晒す式ではなくて、柱に繋いだ奴隷候補者を人々に通覧させ、時刻を定めて入札する方式でした。奴隷管理所の地下の独房で二日を過した私は、朝早くから曳出され、一列に並んで垂れ下った鉄棒の一本の下端に鼻環を吊られて立ちました。監獄を出発以來、嵌められ放しの後手錠のたるさ。嵌口具は外され、ホースで水を浴びせられた体からは未だ雫が垂れて居ます。並んだ鉄棒は三十

本ばかりで、男女取り混ぜ十二、三名の奴隷志願者が哀れな姿で立って居ます。頭上には競売番号と罪名、奴隷刑期等が掲示されて居ました。三名程の男女は債務関係で奴隷にされたものらしく、陽に灼けて居ない体と鞭痕のない肌をして居ます。彼等は、若し予定価格で落札する人がありませんと、三回目には懲役囚として監獄へ行かねばなりません。私達の前後はマジックミラーで区切られて居り、外部からは私共を見れますが、私達には外を通る社会の人々を見ることは出来ません。やがて私共の頭上に照明が明るく点いてマジックミラーの向う側で人々の行き来する気配が感じられ、話声も微かに聞えます。浅間しい哀れな裸身をまぶしい程の光に照らされて、ジロジロと観察され品定めされて居るのだと思いますと、恥かしさと情けなさに体中が熱くなりました。うなだれますと、内部を見回って居る職員の人に鞭を当てられますので、じっと真正面を見て立って居るしか仕方ありません。それにしても、買ってくれる人があるだろう



かと少し心配でした。朝の八時頃から午後三時迄、立ちつくして足が棒の様になりました。四日間、後手錠を嵌められ放しの両腕は石の様です。やがて職員の人に男四名、女四名が鼻鎖を解かれて曳き出されました。私もその中の一人で、女囚二〇五号も不安気な顔つきで足錠の鎖を引摺って混って居ました。

「……あとの者は落札者なし。債務関係の3号はここへ残って来月迄待つ。その他は監獄へ送り返す……」

残った五名の男女の打ちしおれた姿を後にして私達は管理所の一室へ曳かれました。

ヒリヒリする薬液で、忌わしい囚人番号を消され、額と背中に奴隷マークを赤く、登録番号を黒く刷られます。両手の甲にはマークだけ大きく刷り込まれました。女奴隷は額の代りに胸に刷られます。両手の甲に赤く刷られたマーク、鎖を図案化した奴隷の印を見て、新たな感慨が湧きました。鼻環を始め全戒具を外され、捕縄で後手に簡単ではありますが、きつく縛られ、各

々の奴隷刑期と簡単な心得とを言い渡され、そのまま壁に向って正坐して、所有者を待ちました。私の奴隷刑期は二十八年です。一生涯、監獄で呻吟せねばならなかった身が、これから二十八年間まじめに勤めれば、拘束を解かれて自由の身になって再び人間社会へ戻れるのです。心の底から嬉しさがこみ上げ、どの様な仕事をさせられても神妙に一生懸命にやろうと考えました。女囚二〇五号は十五年の奴隷刑との振替計算の基準は知ることも出来ませんが、ともかく二人共もうけものでした。この様に早く奴隷の資格の得ることは珍らしいことだと後で分りました。いろいろ情けないこともありましたが、典獄の邸で使役して貰った御陰です。そして、一度で買主がつくとは何と幸せなことでした。主人になる人はどんな方だろうか。ともかく精一杯に慈悲を願わねばと手首に喰込む捕縄に顔をしかめ乍ら考えました。捕縄の痛さもさること乍ら、鋼鉄の戒具が施されて居ない解放感！全く何年か振ります。全身が浮き上がる様な身の軽さ。特に年がら年中、嵌められ放しだった鋼鉄の首環の圧迫感もなく、革の腰枷の緊迫も消え、鼻環のうるさもなくなくなった楽さ加減！正座の足首に当る鉄の枷ありません。全く鼻歌の一つも出そうでした。

主人から今後どの様な戒具を施されるか知る筈ありませんし、主君が必要と認めれば如何なる拘束も甘受せねばならない身の上。それ故に今の楽さ加減をつくづくと味わうのでした。奴隷達は次々と縄尻を取られ、買主の手に引渡されるべく曳かれて行きました。女囚二〇五号だった女も出て行きます。一瞬、眼の隅でチラと見交わして別れを告げました。其の後、彼女には合って居ません。とうとう一人ぼっちになり、より所のない不安に駆られ乍ら、ひたすら

待ち続けます。

「お待ち遠だったね。おいで……」

婦人職員に縄尻を曳かれガランとした一室で引き渡されました。ひれ伏した耳にハイヒールの足音が聞え、頭をポンと蹴られます。おそろおそろ身を起し、足許からだんだんと上の方へと、生殺与奪の権を握っている主人を振り仰ぎました。

「……分ってるだろうが、御主人様は絶対だぞ。御損なさるつもりなら何時でも監獄へ追い返されることも出来るし、責め殺されたって大抵の場合、何ということもないな……」

先刻、言い渡された心得が耳に甦えります。冷笑を唇に浮べ、傲然と見下ろして居るのは、何と珠枝でした。私が追い出したも同然の第一回目の妻だった女です。

「ホ、ホ、ホ、ホ……驚いた様ね。今日から私がお前の所有者よ。分ったね？」

驚愕からさめて、自分の運命を呪いたくなりました。しかし、もはや如何とも出来よう筈ありません。

「奴隷にして頂いて……有難とうございます。お陰様で終身懲役から出して頂けました。一生懸命に勤めますから……何卒、御慈悲を」

「フ、フ、フ、フ、未だ喜ぶのは早いわよ。気が向けば終身懲役へ逆戻りさせてやるからね」

職員の人が口を挟みました。

「あの……戒具はお持ちなんですか？此の捕縄はおつけ致しますが、何でしたら形式認済のものをお分け致しますよ」

「いえ、ありがとうございます。準備してますのよ。重かったわ。これ！此の包を開け！あら、捕縄、解かないでおいで下さいな。口でやら

せましようよ」

煙草をふかし乍ら愉快そうに笑って、私を靴先で小突きました。

苦心して開いた紙箱の中には鋼鉄の戒具が冷く光って居ます。

「ホ、ホ、ホ、ホ……御苦労さん、あけたかえ？ いずれ本式に作って上げるけどね。今は最小限度のものだけよ。その代り手錠だけは着ついのを貰ったからね。どれ嵌めてやりましよう」

先ず鼻環がカチリ、そして捕縄を解かれ自分で足錠を嵌めます。

「嵌めたかい？ 次は手よ。前で揃えて……」

嘗て妻であった女に、手錠を嵌められる情けなさ。典獄の夫人に戒具を施される時よりも、更に更にみじめな心持が致しました。しかし奴隷の身の上、当然のことです。

足錠手錠の鎖を別の鎖で結ばれます。

「その手錠はね、緊まり方がとてもきついそうよ。大抵の奴隷もネを上げておとなしくするって……」

「お済みですか。ではサインを……」

鼻環に細い鎖がつけられ、珠枝に引張られて管理所を出ました。

足錠は第一種に以たもので鎖が少し長い様ですが、手錠の方はスプリングがとても強く利いて居り、しかも鎖を引張る力は何十倍かに拡大されて環を締めつける様になって居るのです。力が拡大されますから、従ってほんの僅かずつしか締まっては来ませんが、或る限度を越しますと、それこそ万力の様な力で両手首の骨を締めつけて来るのです。勿論、決して弛まない様に出来て居ます。此の様なまいめ方は初めてですので、足の鎖を吊った鎖が手錠を締め上げてしまいました。あわてて手錠と足錠を結ぶ鎖を握りましたが、既に両手首は嫌という程締め上げられて居り、気のせいかな、ジリジリと

食い込んで来る様です。鼻鎖を持って足早に歩く珠枝の後姿を悲しく見て、足錠に歩き悩み乍ら、はだしの足を踏みしめ踏みしめ夕暮れの街中を曳かれました。何か汚らわしいものを見る様な人々の眼の口惜しさ。

「俺は奴隷なんだ」

と何度も何度も心に言い聞かせました。

洒落た喫茶店で一服する間、足許で正坐してうなだれます。両腿の上には固く固く手錠の嵌まった両手と珠枝のハイヒールの足とが乗って居りました。

勝ち誇った様なまなざしで、ゆっくりとコーヒーを啜る珠枝は、今が女盛りの匂う様な美しさでした。

此の身は、もはや此の女の所有物、心のままに存分に扱われて然るべき身なのです。

昼食抜きの私は芳わしい香りにむせますが、一口の水すら与えてくれません。足錠の痛さに思わず身動き致しますと、肩に煙草の火を押しつけられ息が詰りました。

「……お前がね、懲役に行った時からね、奴隷になったら買ってやろうと思ってたの。お父様にお金せびってやって来た訳よ。高かったわ、フ、フ、フ、覚悟はいいの？ 殺す様なことはしないから安心おし。三、四年なぶってやって売飛ばすつもりよ」

私は今更の様に運命を呪いますが、これも自分の詩いた種、致し方ありません。

「ホ、ホ、ホ、どんな心持なの？ 少しは口惜しそうな顔をおしよ。私ね、出て来たついでに二、三日この辺で遊ぶからね。友達の家へ預けとくわ。おとなしくしてるのよ。えーと。鞭と嵌口具を買わな

くちやいけないわね」

「……あ、あの……お奥様……」

「アラ、私、今は奥様じゃないのよ。又別れてね、今独りなの。おや？眼が光ったわね。分不相応なこと考えると、ひどいわよ」

「……で、では……お嬢様。……この……手錠、少しゆるめて下さりまし。お願いです」

声高く笑った珠技は、ゆるめてくれる所か、足を私の両手に当てて、更に鎖を引張ってしまいました。手首が千切れんばかりの苦痛です。しかも、その苦痛から逃れるすべもなく額に脂汗が流れました。

「……靴の底でもお舐めよ。お腹、空いてるんだろ？」

腿の上へ脱ぎ捨てたハイヒールを不自由な手に持って、顔を寄せて底をペロペロと舐めました。

押し戴くようにしてはかせようとしたが、手が思う様に動きません。額を蹴られて後へ引っくり返りました。

「ホホホ……大分、締まったらしいわね。だから云ってあるでしょ。ホラ鍵はこれよ」

屈辱の涙を泳えつつ、やっこの思いで靴をはかせ、横面を五、六度、平手打され、グイと鼻鎖を引かれて再び外へ曳かれました。

途中、買求めた嵌口具を店先で嵌められ、革鞭を鼻環にブラ下げられます。

「首環は如何でしょう」

女店員が余計なことをいいました。

「そうね、まあ、いいわ、帰ってから眺めるから……」

曳いて行かれた友人の夫人の邸では一人の中年の男奴隷が居り、

其の奴隷と同じ檻の中で三日程、放っておかれたのでした。

「少しゆるとめいてやる。鍵は持って行くからね。今度、締まっても知らないよ」

珠技は手錠を外して嵌め直して嵌口具を外しました。

「鞭を少し当てて上げようね」

半ダースばかり鞭打たれ、痛さと情けなさに呻きます。

「珠技さん。後手にしといてよ」

邸の夫人の言葉で、後手錠に嵌め直されて、地下室の一隅の大きな檻へ入れられた私は、一人になると、床に伏して男泣きに号泣したのでした。

夜、檻の中でその邸の男奴隷と、お互いの身の上話をしたり、奴隷勤めのコツとか云ったものを教わったり致しました。

「……捨てた女房の奴隷にされるとは、お前も運の悪い奴だなあ。ま、ともかく先刻も云った様にさ、御主人の顔色を読むのが第一さね。額を地べたこすりつけて御慈悲を願い上げるより手はないよ。ま何だか俺もいろいろなところを回らせられたけど、金持の家の女てのが一番ひどいなあ、全く品物同然だと考えてやがる……。前に居た呉服問屋じゃ下男並みに扱ってくれたけど、ここじゃ、まるで犬より以下だよ。檻のなかでも手錠なんか嵌めやがって……。女中の小娘と来た日にや面白半分みたいに鞭を当てやがるし、連れて出る時にゃ、手錠は仕方ないとしても足に鉄の玉をつけやがるんだ。どうしようもないけど癪にさわって癪にさわって……。」

(未完)

体験レポート

私の切腹プレイのすべて

山田久仁子



一時、影のうすくなつて行く様に見うけられました切腹関係の記事が、再びこの頃、誌上に姿を見せはじめましたのは、私達女性切腹に関心をよせる者には大変、嬉しい事です。

私の切腹プレイについては、貴重な誌面をさいて二度まで御載せ下さった御厚情に感謝致しております。私達女性で切腹に関心のある方々でしたら、少くとも出来たら自分でお腹を思うさまに切り開きたいという願望は、欠く事が出来ないものではないでしょうか。私達がプレイをする底には、又、切腹に関心をよせる底には、必ずこの願いがある事かもしれません。しかし、切腹プレイを現実に行う方々の告白を拝見致しましても、実際に切腹に類似した行為で腹部を傷つける例は、きわめて少ない様に思われます。

即ち、刃物を腹部にかまえ、または切腹する様な型を自分で行つて、切腹に対する満足を得るものでありますが、これはきわめて精神的なもので、切腹する時の苦痛や出血している様を想像されてプレイをするようであります。これについて実際、腹部を傷つけるわけではないのですが、腹部に例えば刃をすりつ

ぶした刃物をあてて、その苦痛から切腹を想像してその満足を得るものです。最後に自分で実際に腹部を傷つけ、或意味で本当の切腹に近い様な行為によって満足を得る等であります。

人によっては、こういうプレイの型式を始めから順にやっていく人もあるでしょうし、又いろいろの段階で止どまっておいでの方もあるかと思います。しかし一度、何等かの型で本当に刃物を腹部に突立てた経験をお持ちの方は、その時の苦痛と快感を忘れることは出来ないのではないでしょうか。たしか本誌に、そういう意味の告白があった様に記憶しております。私は前二回に御報告申し上げました様に最後の型のプレイを行っているわけでございます。しかし本当の切腹に似た行為だけに、いつもやっているわけにはまいりませんし、一度やりますと次第に気持も大胆になつていく様に思われます。

こういう意味からも、本当に切腹するのでないとおさまり、そうにもない私の切腹願望に終止符を打つという意味からも、きわめて大胆な切腹プレイを行って、こういう型のプレイに終りをつける事を思い立ったのでござい

ます。私のこの度、考えましたプレイは、左下腹部に突立てた刃物を文字通り右下腹部まで五寸程、一文字に切開くもので、江戸後期の切腹と何等変る所がございません。

このプレイを行うに当っては、相当な覚悟を必要と致しました。ちょうど本当に幸いなことに、友達のFさんが私と同じ程度に切腹に強い関心を持っていましたので、Fさんにプレイを見てもらい、看護学校の生徒だという所から、後の手当等をしてもらうことに致しました。

その後、Fさんも私の体験等から自分でもやれるという様に思われるというので、二人で切る位置を変えてやってみる事に致しました。

前回の経験では、刃物が切れないで大変苦勞致しましたので、今度は皆川様のなさった様にメスを使う事に致しました。本当は短刀を使いたいと思ったのですが、どうしても手に入らないので、あきらめました。

切る位置と大きさは、私が図一、Fさんが図二の様なもので私の場合、臍の下、二寸で大きさは五寸、深さは傷口が大きくなる点から考え、やや浅くして五分―六分に致しまし

た。Fさんも大きさと深さは同じに致しました。位置は私よりずっと下になります。以前の体験から考えて出血が相当あり、しかも今度は二人でする事です。そういう点も充分に考えました。

Fさんの部屋の板の間に白いバスタオルを敷き、その上にビニールのシートをかけた場所を二つつくり、三宝に切先を五分だけ残して繃帯でまいたメスをのせ、その他、手当に使う縫合糸や針、消毒薬、それから綺麗な水とチリ紙とガーゼ等を用意しました。この前の時は出血した血が太ももからふくらはぎ下腹部に一面にしたたって、大げさにいうと血の海になって後でこの仕末に困ったものでした。又、後始末の時、ガーゼよりチリ紙の方が良く血を吸いますので大変便利で相当、用意しました。

やり方としては、先ず私が先にやって、すっかり手当をしてからFさんがやる事にきめました。その時の姿勢については、いろいろと話し合いましたが、結局、一番腹部が緊張して都合のよい姿勢という事で立腹にきめました。切る位置を正確にするために二人共、突立てる所と切り終える所に口紅で印を

図1. 私の切腹位置
(----- 前回の傷跡)



つけました。私の場合は図一のように、この前の傷跡の少し上になります。

用意が出来ると先ず私が用意した場所の中央に座って素肌の上に着ていた浴衣を脱ぐとザッとたたんで後の方に置き、右手でメスを取上げると立上り、やや足を開き気味にする、下腹の印の所にかまえました。この時の気持の昂りは、以前以上に思えました。何かこう胸苦しくなる様な気持で、悦びと期待と怖しさが一緒になった様な気持でした。Fさんに見られているというせいか、以前の様

な刃先を見てためらう様な気持はおきませんでした。

大きく息を吸って下腹部がピンと張り切った時をねらって左手で口紅の位置を押える様にして一気に突立てました。刃が非常に切れるせいでしょいか、ザクッという様な手ごたえがして刃が楽に全部、腹部に喰い入りこの前の時と同じにジーンとしびれる様な全身の痛みが全身にむしろ快よくつたわります。すべての感覚が腹部に集中した様

でした。以前は怖る怖る引廻した様な形でしたが、今度はどうせ切る長さで深さはきまっていますのだから一思いにと覚悟をきめておりました。血がまだ刃の周囲に溢れて来ないうちに右手で力一杯それも本当に少しも手ごころを加えずに引廻しはじめました。相当、重い手ごたえがりましたが、さすがにメスは良く切れました。ぐっと傷が引きつれる様になったまま皮膚の切れるジャリ、ゾリッゾリッという様な手ごたえがして新しい痛みが全身につたわります。まったく夢中でした。

痛みと申上げるより快感と申し上げた方がよいかも知れません。前回とくらべると、まったく楽に切れて引きつれている傷口から血が勢よくタラタラと流れはじめました。そして下腹部から腿へ足へと流れはじめたのが生温い感触で感じられましたが、それも一瞬で、後は苦痛が腹部以外の感覚を奪ってしまいました。やはりヘソの下を通る時は非常に痛く体が本当にしびれる様でしたが、時間にすればほんのちょっとした間でした。それこそ苦痛といってよいか目のくらむばかりの快感といつてよいかわからない気持でした。どれ位かかったのか五寸、切り終えた時、Fさんは十秒もかかっていないと後で話してくれましたが、その時は全然わかりませんでした。

血は激しく流れ下腹部一面に文字通り紅の糸を乱した様に流れ量が多いためかビニールの上に音をたててしたたっておりまして。一思いに、それこそ一度も手をゆるめずに右下腹部まで五寸切りまわし紅の跡の所で止めましたが、全体が右下り気味になったようでした。傷口は、まったく切腹というのにふさわしいと思えました。最高一寸五分位の巾で、やや右腹部よりで大きく口を開け、傷口下側

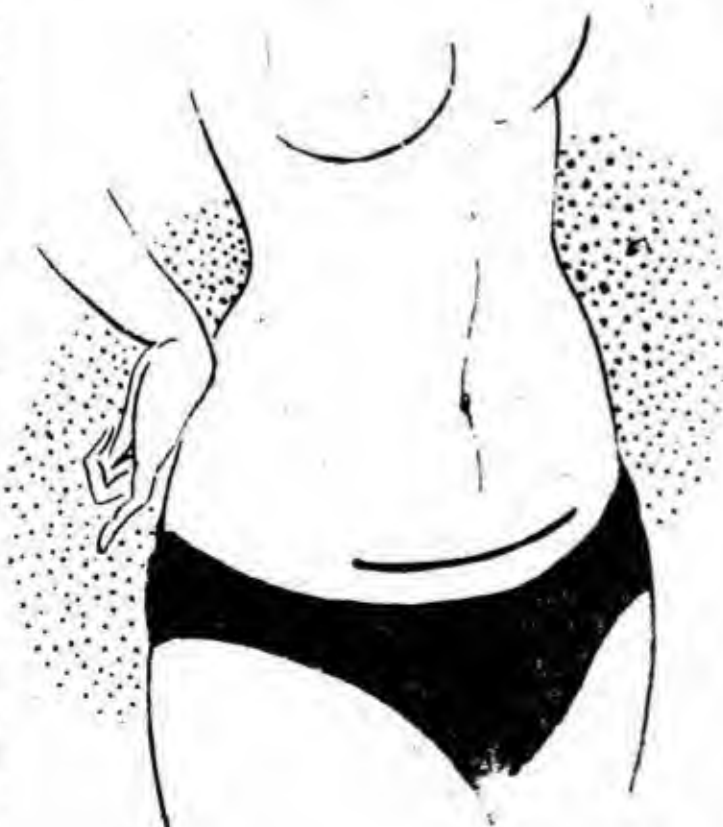
からは、まだ激しく出血していましたが、傷口から全体にわたって弾ける様に脂肪の層がはみ出し黄色く見えているのも以前と同じでした。唯、傷口が以前と比べものにならない位大きく、下腹部一杯に裂け一面に血で内腿から足全体が血まみれです。以前の体験のせいでしょいか、切り終ってから刃を抜いても以前程、怖しい気持はしませんでした。ちよつと気が遠くなる様に感じ、激しい満足感と安心感が残りました。でも、とうとう失神はしませんでした。

それでも、さすがに傷口はプレイというより、もう本物の切腹というにふさわしい様に思えました。しかし痛さはもうなく自分の事ではございますが脂肪質のついた、ふくよかな感じの下腹部が大きく口を開け、傷口一杯に脂肪がはみ出し血まみれで、肌一面に太腿から足まで鮮血にまみれ、したたった血が大きく足元にたまっているのは、本当に忘れることの出来ない光景でした。じつと立ったまま血のかたまり出すのを待ちましたが、座った場合と異って立腹ですと腹部がぴんと緊張していますので、傷口は大きく開いたままで脂肪の層の間から、しぼり出される様に血が

流れました。メスの刃先でハミ出した脂肪を押す様にしてみましたが、ほとんど痛みを感じませんでした。出血量は相当多く、コップにして半分以上、もしかすると三分の二位もあったかもしれません。何分、下腹部から足にかけて、どろどろになって半分、固まりかけた血の量も相当ありましたし、足もとに溜っているだけでも、コップに半分近くありそうでした。血が止ってから、血まみれの体をよくふいて、Fさんに手当をしてもらいました。六針、縫いましたが相当、痛く感じました。特に曲った針が傷の側のヒフにギュッと喰い入る時より傷の向側のヒフを内側から針先が持ち上げて現れる時は、さすがに痛く思いました。

私の手当が終ると次にFさんがやりました。Fさんは、こういう体験は全然ないので、切りおおせるか自信がない様でした。私と同じに浴衣を脱いでビニールの上に立ってメスを下腹部にかまえました。すぐ側で見

図2. Fさんの切腹位置



細い血管が薄っすらと透けて見えているほどでした。腹を一、二度、撫でるようにすると口紅の印の所に刃先をかまえてじつと見下していましたが、息を大きく吸うと一思いに突立てました。小さなブツツという音がして、刃が完全に腹に喰入りました。「アッ」と小さな叫び声を洩らしましたが、手ははなしませんでした。そのまま息をつく、息をつめて引きまわしはじめました。

見ていると、下腹部のヒフが右に引かれて刃の後側から血が一条、ツツと条を引いて太腿に流れ落ちました。傷口は本当に引きつ

られる様にのびて、すぐに一寸近くなりました。でも表情には苦痛の様子はなく、むしろ稍々上気して何かにつかれている様でした。

力をいれているらしく刃がぶるぶるとふるえていました。次第に傷口がギュッと伸び、血がタラタラと激しく流れはじめました。二寸ちよつとで殆んどヘソの下まで引き回しました。さすがに苦痛が激しいのかややマユをひそめて手がブルブルとふるえていました。唇をかねてFさんは引回しつづけています。始めてのプレイなのでヒフが音をたてて切り裂かれる感触が何か怖しくて、とても一思いに引き回せなかったと、後でFさんが話していました。時々手を止め、又力をいれるのです。ヘソをややすぎたあたりで苦痛のためか眼を細め、おおむく様にすると「アイタイ」と小さな呻き声を洩しました。そして、左手で左乳房をしっかりとつかんでいました。それから相当時間をかけてビリビリと引廻しましたが、それでも立派に口紅の印の所まで引きつけました。

傷口は私の時より出血が多い様で血まみれになり、ぐっと開いた傷口から脂肪がはみ出していました。自分以外の人が私の目の前で

お腹を切り、開いた傷口から脂肪の層がはみ出し血が激しくしたたって溢れる様は、初めて見ましたが美しいというより体がうずく様な光景でした。Fさんは私より上背もあって下腹部の脂肪のつき方も豊かで立派な体でしたから、白い下腹部から太腿にかけて流れる血液と一文字に切り開かれ大きく口をあけた傷口もなお凄惨な、でも完璧な感じが致しましたが、そして血が止まってから手当をしました。自分の傷口を自分で縫うのは大変やりにくそうでした。

手当が終ってから、いろいろと感想を話し合いました。姿勢について考えますと、二人共、立腹でやったわけですが、腹部がピンと緊張している点、大変有利に思えました。突立てた時は余り痛いと思わなかったのは前回と同様でしたが、刃物が非常に切れる点で今度の方が楽に突立ったようでした。今度は人に見られているという精神的な緊張があつてか、刃をかまえてためらう気持は全然ありませんでした。Fさんも夢中で突立てたが余り痛くはなかったけれど、何か思ったよりずつと精神的なショックを感じたそうです。私は何かザクツという感触でしたが、Fさんはむ

しろブシツという様な張り切ったものに刃物がつき立った感触だったそうです。引廻している間の苦痛は、この前と余り変わらず、耐えられぬ程痛いという様なものではなく、切る長さや深さに変りなくキュッと引き裂かれる様は、痛みが刃の動きにそって左から右に動いて行く全身の感覚がここに集中される様な感じでした。部分的にはヘソの下はやはり痛くて、一番激しい苦痛はヘソの下、一寸位の間を切る時でした。この点はFさんも同じで脂肪層には苦痛を感じさせる神経がなく、浅い切腹では、ほんとにヒフの切れる痛さが切腹の痛さだと考えてもよいでしょう。Fさんはヒフが切れる感触を、割合軟かな弾力のあるものがゾリゾリと切れる様な感じだったといっています。

引廻している間は本当に夢中で、しかも気が昂ぶっているために声が洩れてもわからない様です。引廻している間、左手は遊んでいる様な型になり、脇腹あたりを押えています。が、苦痛がちよつと激しい時、夢中で乳房をつかんでいる事があります。そのため、とんでもない場所に血がついていて、後で驚いた

刃物の切れるという事は非常に大切な事でちよっと切れ味が違うだけで大変楽に切れるのは本当に驚く程です。それから出血ですがこれは部位によってやや違う様ですが、余りひどい違いはありません。今度の場合、Fさんの方が私より少し余計に出血したらしいのですが、一番激しくても溢れる程度で、ザッと飛び散る程の出血はありませんでした。二人共、コップに半分から三分の二ぐらいだと思います。しかし立腹ですとどうしても血が散る様で、ビニールシートから外に散ってしまったものもありますが、大部分は両足の下に溜った様になりました。ほぼ下腹部一面、血まみれだといえると思います。傷口の型と大ききですと二人共、同じだと思います。中央部からやや右よりで大きく口をあけ、紡すい状で中央部で最高一寸―一寸五分位も開き体をそらせるともっと開きます。そして傷口に脂肪の黄っぽい層が押し出される様にハミ出して来て、ちようど溢れた水が容器から流れるといった様に下腹部から太腿に流れていきます。腹部についた血はすぐ固まりはじめどろどろになり、ふきとるとズルズルとすぐにとれました。手当は以前はバンソウ膏で充

分でしたが、五寸にもなるとまったくだめで縫合するより方法はない様です。傷跡はたしかにのこりましたが、やはり縫合した方が以前の傷跡よりずっと薄くなりました。手当は消毒を完全にして充分、注意いたしました。ただ、丸一週間以上も、お風呂に入れないのは困ってしまいました。

私達のしました切腹プレイから考え、少くとも深さが脂肪層までなら、一文字、十文字思うままに切腹出来ることが、よくわかりました。このことは逆にいいますと、皮下脂肪層の範囲の切腹は危険が殆んどなく、切腹して致命的な傷を得ることは不可能だということとであります。したがって本当の意味で切腹するためには腹壁を切開き腸を引出す程度のものでないと本質的にはプレイと変る所はありません。

今までプレイをしていて時々深く針などで突くと筋肉層に突立って鈍いガッキツとする痛みを感じましたが、おそらく腸がはみ出る程の切腹だと、激しい苦痛があるだろうと推定されます。又、脂肪層等の様に疎な組織ではありませんから引廻すのに大変、力があるだろうと思います。

皆川様が諸手引を主張されている様に多分、私達女性では片手ではムリではないかと考えられます。今回は刃物も非常に切れ、しかも深さも五分しかありませんでしたし、本当に精神的なことだわりもなかったのですが、それでも引廻すのには力一杯にやりました。これから考えて本当の切腹は相当、難かしく潔よく切腹するには気丈な方で、しかも良く切れる刃物と覚悟がいるだろうと考えられました。

私達は、お腹を思うさまにかき切ってあふれる様にはみ出してくる腸や、その他の内臓のこと、流れる鮮血と激しい苦痛に本当に憶れているのでございます。

しかしプレイとしては怖しく、これ以上のことは出来ないのではないのでしょうか。どういふ点から考えましても、私達の致しました今度のプレイが私達のこの種のプレイの最後のものになると思います。

つたない文章でまことに恐れいりますが、私達の最後のプレイを、同好の方に御報告申し上げて何かの御参考に願いたいと存じます。

(おわり)



連載小説

狩 獵 者

第五回

新 佐 川 工・画 槐

大水槽

沢本建三は、浴室に閉じこめられてしまったも同然だった。

なにかの都合で手間どっているにしても、山科が衣服をもってくるのを信じていたし、丸裸では外へもでられないから、焦々しながらも、じっと待っているしかない。

いきなり扉が開かれ、数人の男が闖入してきた。実際には二人だけだったのだが、虚を突かれた沢本には、人数を見定める余裕もなかった。

廊下でのときにくらべ、狭い浴室内では勝手が違う。しかも、二人に同時に襲いかかられては、沢本の行動範囲はまったく封じられたといっている。しまったと思う次の瞬間には、もう組み伏せられていて、腕が捻じあげられた。

「出ろッ！」

ドンと背中を突かれて、よろめきながら廊下にてた沢本は、後手に縄をかけられて、罪人のように情けない恰好だった。

「歩け！」

杉田が、沢本の毛脛を蹴る。

南は、縄尻をしっかりと握っていた。「執念深い奴らだ。俺を、いったい、どうする気だよ」

沢本が、半ばふてくされたように云うと、杉田は、軀を揺るようにして、

「さっき云った筈だぜ。俺たちと一緒にきてもらいたいのだ。おとなしく云うとおりにしていいやア、こんな乱暴をしねえでもよかったのよ。馬鹿な奴だ」

「判った。こうなったからにやしかたねえ。どこへでもいこうじゃないか。だけど、こんな恰好じゃ歩かれもしねえや。縄をといてく

れ」

「そうはいかねえさ。さっき一度ドジをふんだからな。また暴れられでもしたら、俺たちの面目がたたねえよ」

「じゃせめて、なにか着せてくれ。腰に巻くだけでもいい。さっきのタオルは、どこへやったんだ」

「フフ、恥ずかしがる柄でもねえだろう。それに、どうせ裸にされるんだ。そのままのほうがいい。手数がかからなくていい。オウ、歩かねえかよ」

沢本は諦めた。こんなところで、いつまでとせりあいをしているより、でるところへでて、早く決着をつけたほうがいい。

南に縄尻をとられた沢本は、コンクリートの階段を半分までおりたとき、下に立っている山科を見つけると、急に足を早めて、南を慌てさせた。

「こんなところにいたんですか！ ずいぶん待ったんですよ。おかげで、このありさまだ。とにかく、着るものをください」

急きこんで云う沢本を、山科は、意味の判らぬ薄笑いを浮かべ、黙って見ているだけだった。

なにかしら不気味な雰囲気を感じとった沢

本が、なおも山科に詰めようとしたとき、ピシッという音がして、沢本は肩先に鋭い痛みを覚えた。

杉田が、隠しもっていたベルトで、背後から打ちかかったのだ。

「痛ウ。ヤイ、なにをするでえ！」

怒りに険しくなった沢本の表情にはかまわず、杉田は、続けて太腿を打つと、

「とっとと歩くんだ！」

と嗷鳴り、南から縄尻をかわってとった。顔をしかめた沢本は、

「歩くよ。歩くから、打つのはやめてくれ」と云いながら、未練らしく山科を見たが、

たばこに火を点けようとしている山科には、もうとりつくしまもなかった。

牛馬のように鞭に追いたてられて、沢本は第二拷問室へ入った。

部屋の三分の一程を占めている巨大なガラス張りの水槽は、一見して水族館を想わせるが、いっぱいに湛えられた透明な水には、小魚一匹、泳いではいない。

「オイ、グズグズするな。サッサとあがるんだ！」

急きたてるように、杉田は鞭を鳴らす。

水槽の横には、三メートルあまりの高さの

縁のところまで、鉄製の階段がついていた。それをあがれと云われていることは判るが、沢本は妙に足が辣んだ。ハッキリと危険を感じたわけではない。いわば、虫がしらせたとでもいうのだろう。

「野郎、怖じ気がつきやがったのか」

舌うちした杉田は、いままで多少、手加減して打っていた鞭に、思いきり力をこめた。

「ああッ！」

骨に響くような激痛に、悲鳴をあげ、夢中で階段を二、三段あがった沢本は、そこでまた逡巡したが、あとから追ってくる鞭がそれを赦さなかった。

階段の上は、およそ半坪ほどの踊場になっていた。とうとうそこまで追いあげられてしまった沢本が、不安そうに下を見おろすと、いつのまに現れたのか、黒いガウンをまとった長身の男が立っている。そのそばに山科がいて、ガウンの男となにか話しているらしい。南はカンカンと靴音を反響させて階段を登ってきていた。

沢本は、自分の置かれた奇妙な立場が、どうやら偶然ではなかったらしいと悟りはじめたが、すべてを理解することは、とうてい無理だった。

「世話をやかせやがったぜ。サア、縄をい
てやるよ」

そう云ったのは杉田で、縄に手をかけたの
は南だった。

結びめが固く締まっているのか、南は、と
くのに手間どっている。

杉田は、右手に用心深くベルトを握ったま
まだ。

ジツとして、縄のとかれるのを待っている
沢本の躰は、当然、隙だらけだった。

「ソラ、とけた」

縄がとけると、間髪をいれず、南は沢本の
腰をドンと突いた。

「あっ！」

沢本は、叫んで、躰の重心をもとへもどそ
うともがいたが、そのまま、まっさかさまに
水槽へ落ちこんだ。

水責め

大きな水音とともに、飛沫がとび、沢本の
躰は、頭を下にして底まで沈むと、一回転し
て水面に浮きあがった。

死にものぐるいで両手をばたつかせるが、
呼吸をするたびに水を飲み、
「助けてくれエ！……」

と絶叫する声も、とぎれとぎれになる。

水中撮影のフィルムを観るように、慎之輔
たちの眼には、死と闘う哀れな溺水者の跳き
が、くまなく眺められた。

司慎之輔は、子供のころ、博覧会で海女の
実演を観たことがあったが、ガラス越しに、
水槽の中を動きまわる人間の躰の、不可思議
な魅力に心を奪われながらも、それが女でな
く、男だったら、どんなにすばらしいだろう
かと考えたものだった。その後、若い男が、
水中で苦悶する夢を、何度かみた記憶もあ
る。

慎之輔は、水族館で魚の生態を観察する少
年のような熱心さで、眼を輝かせ、息さえ弾
ませて、水槽の中の沢本の苦悶を見つめてい
た。

水中のいけにえは、物理的な現象で、思わ
ぬ変化を示すし、そのうえに激しい全身の運
動が伴って、観る者を飽きさせない。男の裸
身には興味のない山科や杉田にも、それは、
けっこう面白い見世物だった。

沢本が、水の冷たさを感じたのは最初のう
ちで、やがて、それは、全身を締めつけるよ
うな痛みとなり、いまは、皮膚の感覚もまっ
たく痺れている。

朦朧とした意識の中で、「死」への恐怖だ
けが、わずかに中枢神経を目覚めさせていた
が、硬くなった筋肉は、運動能力を阻害し、
何回か沈んでは浮きしているあいだに、脚の
動きは緩慢になり、水を掻く腕にも力が失く
なってきた。

水の充満した胃や腸の苦しさはもとより、
激しくむせかえりながら、細々と呼吸を続け
る気管は、窒息寸前にあった。

（ああ、もう駄目だ。俺は死ぬんだ！……）
急に重くなった手足が、いうことをきかな
くなった。息がつまる。躰がグイグイと底に
ひきこまれていく――。

動きを止めた沢本の躰が、ユラユラと漂う
ように沈みはじめた。

「オイ、水を抜け」

慎之輔の一声で、ただちに排水口が開かれ
る。

「山さん。水を吐かせるんだ」

完全に水が排出されるのを待って、心得た
山科は、踊場から縄梯子を使い、身軽に水槽
の底へおりた。

グッタリとのびている沢本に近よると、膝
を立て、馴れた動作で水を吐かせる。

人工呼吸の必要はなく、背中を波うたせて

多量の水を吐きだすと、沢本は、微かに呻いて息をふきかえした。

それを見た山科は、沢本の躰を邪慳に突き離して立ちあがる。

「あ、助けてくれ！ お願いだ。寒いよ。死にそうだ……」



必死で縋りつこうとする沢本の手を、スルリと逃げて山科は縄梯子のほうへいく。

「待ってくれッ！ 俺は、どうなるんだ？」

沢本は、悲痛な声をあげて、あとを追おうとしたが、それだけの力はなく、不様に前へのめった。

縄梯子は、無情にスルスルとひきあげられていく。

「だしてくれ！ 俺を、ここからだしてくれよう」

不安と恐怖で半狂乱になった沢本は、水槽の壁を叩いて喚いたが、もとより厚いガラスはビクともしない。すぐ眼の前に立っている男たちは、冷然として眺めているだけだ。

大の男が、みぐるしい泣き顔と、あさましい姿を、他人の眼に曝す屈辱は堪え難かったが、助かりたい一心の沢本には、もう見栄も外聞もなかった。

「南。もう一度、水を入れろ」

慎之輔の命令を待っていたように、南は、「へいッ」

と意気ごんだ返事をした。

天井近くにつき出ているパイプの口から、水が音を立てて落ちてきた。

「ああッ、やめてくれえッ！ 俺は、泳げないんだ。水を止めてくれ。お願いだ。助けて、助けてくれよう」

早くも、ヒタヒタと足許を浸しはじめた水に、沢本の恐怖は絶頂に達した。

声をふりしぼって号泣しながら、四方の壁を叩いてまわるが、水は刻々と増していくば

かりである。

叫んでも泣いても、無駄なことは判っていないながら、静止して死を待つわけにはいかなかった。

だが、沢本の動作も、水の抵抗で次第に鈍くなった。沢本は、慎之輔の前のガラスに両手を当てて軀を支え、甲斐ない哀願をしつづけた。

血走った眼は、カッとみひらかれ、紫色の唇は、細かく痙攣している。みるも惨めな泣き顔ながら、濃い眉や太い鼻梁は、なお男らしさをとどめ、鳥肌だった全身も、死の恐怖に戦きながら、逞しさは少しも損なわれていない。

慎之輔は、フト沢本を強く抱擁してやりたい衝動に胸が疼いたが、その酷薄な蒼白い面には、なんの変化も表れはしなかった。

水位は、ついに、沢本の頸に達した。沢本は爪先立って、少しでも溺れるまでの時間を延ばそうとしたが、水は、たちまち、くいしばった唇を濡らし、鼻腔へ迫った。

ふたたび、大水槽の中には、悲惨な、そうして、いくぶん滑稽な溺水の実演が展開される。

一回目ですでに精力をつかいはたしている

沢本は、もがく手足にも力がなく、瀕死の魚みたいに口をパクパクさせるばかりだった。それでも、かなりの時間、沢本は生きていた。

いや、溺死体となつてからも、外傷といつてはない彼の軀は、醜くふくれあがつた腹部を除けば、生きているままだった。

困難な死体の引揚作業も、山科たちが三人がかりでやっと完了し、逆さにして水を吐かせたあと、処刑室を素通りして、ひそかに外へ運びだされた。

交通事故

夜の甲州街道を、重量制限を無視して砂利を満載したダンプ・カーが、東京方面へ向けて疾走していた。スピード・メーターは八〇キロを指しているが、若い運転手は、アクセルをふかしこんだままだ。自動車は調布市内に入っていた。ノルマに追われての無理な運転で、疲労はしていたが、彼は、決していねむりなどしていなかった。それは、ヘッド・ライトの光芒の中へ、突然降って湧いたように白いものが現れたのを、ハッキリと見たところから明らかである。

もし、それが、普通に衣服を着けた人間だ

ったら、彼の右足は、すかさずブレーキ・ペダルを踏んでいたかもしれない。

(オヤ?)と一瞬、彼は我が眼を疑ったのである。

(裸の男? 馬鹿な! この寒空に――)

そう思ったのは、ほんの二、三秒ぐらいだったが、慌ててブレーキをかけ、ハンドルをきった処置は、もう遅かった。

(轢った!)

彼は、頭から血のひいていくのが判った。運転台をおりと、脚がガクガクした。道路には俯伏せになった男。

「オイ、しっかりしろ!」

願え声で云って、抱き起こそうとすると、その軀は、ゾツとするほど冷たかった。

やりきれない気持で、男の顔を覗きこみ、彼は「アッ!」と小さく叫んだ。見憶えのある顔である。会社は違うが、砂利採取場でよく一緒になる沢本という男にまちがいがなかった。

交通事故の通報で現場に急行した警官は、意外な死体の状況に首をかしげた。

被害者が裸体であることは、精神病者という推測もできる。だが、轢かれたばかりの死体が冷却し、硬直さえも起しはじめているの

はどういうことなのか？。考えるまでもなく被害者は、轢かれる前に、すでに死んでいたのだ。少くとも、死後一時間以上は経過しているともるべきだった。

奇怪な交通事故は、殺人事件として、交通課から捜査一課の手に移された。

“キャバレー殺人事件”

“体操教師殺害事件”と打続く二つの兇悪事件がまだ未解決のうちに、またまた運転手殺しが発生したわけである。

警視庁捜査一課は、近來にない緊張した空気に包まれたが、同時にまた課員の胸中には、表にこそはあらわさぬものの、焦慮と憂鬱が、ようやくわだかまりはじめていた。

三十五才の速水錬太郎は、一課の部長刑事の中では、最年少だったし、他署から抜擢さされて警

視庁に入ってから日も浅かったが、それだからといって、仕事のうゑで先輩に遠慮するよな男ではない。

彼が意見具申をひかえているのは、どこまでも確信がないからだだった。

運転手の沢本は、解剖の結果、溺水による窒息死と断定されている。泳げない彼が、過失で溺死することはありうるが、すべての状況は、やはり、人為的な溺死とみてまちがいない。溺水させて殺した死体を、しかも、裸

のまま、わざわざ自動車に轢かせた行為は、いかにも馬鹿げているが、犯人は、被害者の死体を、これみよがしに人目に曝したかったのではないかと推測すれば、容易に頷くことができる。

速水刑事のメモは、三つの殺人事件の共通点について、次のように記していた。

一、被害者が男で、年齢は三十才前後。

二、筋肉質で男性的タイプ。

三、死体の展覧性。

四、死体が裸体であること。



速水の脳の中では、警察の無能を嘲笑している殺人淫楽者の姿が、電光の明滅するように、浮かんだり消えたりした。

殺人淫楽者の犯罪は、世界史上には決して珍しくない。我が国の犯罪記録にも稀有ではなかった。連続して起こった三回の殺人に、もし同一犯人の犯行だという確証があり、被害者が女性だったとしたら、速水でなくても異常性格者の犯罪を仮定してみたかもしれない。いわば、常識が、捜査の盲点を自ら作っていたのである。

沢本建三の死体が、ダンプ・カーに轢かれたのとおなじ頃、別の場所でも交通事故が起っていた。

道玄坂を渋谷駅に向かっていったライト・ブルーのスポーツカーが、信号無視で貨客兼用車と衝突しそうになり、ハンドルをきりそこねて、電柱にぶつかったのである。

スポーツ・カーを運転していたのは、メメ映画が売出し中のスター、尾瀬達郎だった。自動車は前部がメチャメチャに壊れ、胸を強打した尾瀬は、気絶したまま病院に運び込まれた。

人気俳優でも、医師にとっては、一般人と

変りはない。ベッドに横たえられた尾瀬の躰は、負傷箇所を診るために、容赦なく衣服を脱がされた。

「あらッ、フンドシなんかしていないじゃない？」

「ホント、ずいぶんインチキね」

負傷者を前にしての、若い看護婦達の囁きは、いかにも不謹慎だが、それには理由があった。

いわゆるヌーベル・バーグの監督の一人として数えられている新庄卓が、尾瀬に目をつけたのは、偶然ともいえるようなことからだった。

“忘却の海”という、海軍兵学校を舞台にした映画のロケで、水泳訓練のシーンを撮っていたとき、六尺禪一本の尾瀬の躰に、フト新庄は気をひかれたのである。

大部屋俳優だった尾瀬には、もちろんこの映画でも役らしい役はなく、大勢の兵学校生徒に混じって、準備体操をし、海へ入るだけのカットだった。

「オイ、あの男はなんて名だ？」

「あれはと——確か、尾瀬とかいった筈ですがネ。あいつがどうかしましたか？」

助監督が怪訝そうな顔を見ると、

「うん、禪の締めかたがちょっとまずい。こへくるように云ってくれ」

と云って、新庄はパイプを咥えなおした。

五月の海岸はまだ寒く、尾瀬は肩をすぼめて顫えながら、なにごとかと、やや心配そうにやってきた。

「君、禪が少しゆるいね。なおしたまえ」

その場は、さりげなく注意しただけで、新庄は、あとから尾瀬を自宅へ呼んだ。

人ばらいをした書齋へ鍵をかけると、新庄は、尾瀬に命じた。

「裸になるんだ」

裸で身体検査を受けた経験のない尾瀬は、かなり固くなっていたが、新庄の云うとおり前を向いたり後を向いたりした。

「もういいよ。服を着たまえ」

「ハイ」

急いで縞柄のシャツを着るのを、新庄は微笑して眺めながら、

「なにかスポーツをやるかね？」

「以前ボディ・ビルをやったことはあります。でも途中でやめたんで駄目です」

「イヤ、それでよかったんだ。ボディ・ビルの見本のようなのはただじゃないよ」

筋肉質ののびのびと発達した尾瀬の体は、

今月の新版分譲品広告

充分に新庄の審美眼を満足させた。逞しい体軀を採るのは案外にたやすいが、そのうえに観賞にたえる美しさを求めるとなると、なかなかに見えは難しい。

尾瀬のマスクは、どちらかというと平凡だが、男らしさはあるし、大衆に親しみやすいという現代のスターの条件を、むしろ備えているくらいだった。

新庄卓監督の「昏い太陽」の主演に抜擢された尾瀬達郎は、スクリーンに現れるや、たちまち異常な反響をまきおこして、一躍スター

・ダムにのしあがった。

「昏い太陽」での尾瀬の役は、現代の風潮に激しいレジスタンスをいだし、意識的に六尺褌を愛用している大学の柔道部員で、彼の軀をはった抵抗も、結局は空転するだけで、最後には自滅するという深刻なストーリーだが、底を割ってみれば、尾瀬の男性美を売りものにした作品だから、褌姿の尾瀬の裸体が食傷するくらい画面にでてくる。

もともと新庄としては、氾濫する女の裸に對しての抵抗が意図の底にあって、男の裸を

梨花悠紀子悦虐図絵

大手札(9×13センチ)印画紙焼付

三枚一組二五〇円 略号(ゆき)

「鑑賞用女性」ではじめて本誌に登場した悠紀子さんの初々しいスタイル。

梨花悠紀子浣腸図絵

大手札(9×13センチ)印画紙焼付

三枚一組三〇〇円 略号(りか)

浣腸マニヤに捧げるプレゼント!

梨花悠紀子襠褌図絵

大手札(9×13センチ)印画紙焼付

三枚一組三〇〇円 略号(むつ)

はじめて、試みられたオムツの着脱フオト、オムツマニヤに是非一組!

東浦ひかる悦虐図絵

大手札(9×13センチ)印画紙焼付

三枚一組二五〇円 略号(ひか)

辻村隆の今月号掲載「私を責めて下さい」の主人公である典型的なマゾヒスト、その強烈な緊縛をお楽しみ下さい。

大塚啓子血紅切腹図絵

大手札(9×13センチ)印画紙焼付

三枚一組三〇〇円 略号(おせ)

豊満な柔肌に脇差しの切先がぐざりと突刺され、血がじわじわとにじみ出る悲愴な切腹の光景

◎お申込みは略号にて天星社宛前金にてお願い致します。着金次第嚴重包装の上急送申します。

だすために、最大限に露出できる褌を、もつともらしいこじつけで使ったわけだが、尾瀬の人気の半分は褌にあるのを知ると、驚き、かつ、ほくそ笑んだ。

予想外な興業成績に気をよくした××映画では、引続いて尾瀬達郎の第二回作品を企画し、もちろん、それにも、六尺褌を締めた主人公を活躍させた。

そして、まるで、褌シリーズのようにして、尾瀬の主演作品が次々と制作されると、彼の人気は、もはや、おもしろいものとなつた。

尾瀬の許へは、連日、彼の褌姿に憧れるファン・レターが山のように届き、娯楽映画雑誌は、競って彼の褌姿をグラビアに載せ、彼が私生活においても褌を離さないことを報じた。

ビート族のあいだでは、早くも六尺褌の流行が兆しをみせはじめ、女性の中にさえ、ひそかに褌を用いる者があるという、嘘のような話さえ伝えられている。

看護婦が尾瀬のパンツを見て幻滅を感じたのも、無理からぬことというべきだった。

(以下次号)

奇譚三十九夜物語

第五夜

辻村 隆



春はもうそこまで忍び足で来ているような宵です。窓越しの月は朧ろの笠を被って、価千金の夜が間もなくやってくるのです。

クラブは紫煙に朦々――。

ワイン氏が欧米旅行のスーベニアに、秘かに持ち帰った、パリー仕込みのサジスチックな数十葉の写真が、人々の手から手へと廻って行きました。責める女――責められる女――。そのどれもが、ピッタリと身についた黒いなめらかな衣服に美身を包んで、奇態な嗜虐器の前で、或いはうねり、踏み、背を反らし、苦悶にのたうち乍ら、調教用鞭の洗礼を受けている図なのでした。

名うての酒仙、ワイン氏は、さも快ろよげに写真に観入る人々を眺め廻していましたが、やがて、おもむろに口をきりました。

「巴里に行き乍ら、日ならずして私は無聊に苦しみました。その孤独の淋しさから逃れようと、私は友人から聞いたギャラントな三行広告のある新聞を手にとったのです。そこで私は、今皆さんが御覧になったような、激しいサジスチックな世界に、はからずも一夜を耽溺したのでした。話というのはこうです——」

ワイン氏は盃を置くと、軽い外国タバコ「ケント」を徐ろに一本抜いて、水色のフィルターを口にくわえました。

第十二話 鏡の中のデュエット

三行広告には、露骨に現わしていないが、一様に皆、暗々裡に情慾を喚ぶに充分な文句が織り込んである。表面を糊塗して暗号的に書かれてあって、例えば——

「当方男子、性質悪き方、但し誠実。英語を語り得る婦人を求む」
この文を解読するとうなる。

「当方男子サジスト。鞭打ちを好む婦人を求む」

又、この反対に、

「当方男子、性質温良。尊大にして英語を語り得る婦人を求む」
の一文を解読すれば、

「当方男子マゾヒスト。鞭を揮うことに興味ある婦人を求む」
の意味になる。

併し、こうした婉曲な三行広告のものの以外に、もっと端的なものになると、

「当方若き婦人、ブルーネット、愛情に富むデリケートな心情と誠

実な方を求む」

と云ったものや、

「当方女子、男子の方を求む」

と云ったインスタント式なものである。

彼はパリの孤独にたえきれず、そうした三行広告の一つに、行き当りばったり電話をしたのであった。

受話器から流れ出した声は意外に若かった。早速、サン・ジョルジュ街十字路の公衆電話の前まで来て欲しいと云って、プツンと電話は切れた。

彼は指定された通り、週刊誌「スウリール」を持って街へ出た。時間は午後の十時——。夜の幕はやっとおりて、華やかな巷の開幕する時間である。

約束の場所——。ボックスに凭れて、人を小馬鹿にしたような唇をして、そのくせ、黒眼勝ちの眸のブロード女が、しきりに辺りの様子を抜かりなく読み取る姿勢で、何気なく立っていた。

彼は極く自然に傍らに近付いて「スウリール」をパラ／＼とめくる。女の頬に微かな笑みが浮ぶと、そっと近づく。

「電話の方ね」

彼は渡りに舟と、諾と答える。既に意志は完全に疎通した。ゆっくりと二人は歩く。女の片腕が自然に彼の腕に絡んで、人目にはエトランゼの旅情を慰さめるアベック姿と寸分変わらない。歩き乍ら女は話しかけてくる。

「とっても素晴らしいショウがあるの。御覧にならない？」

「ショウって云うと？……」

「フフ、これよ……」

女はオーバーの下から、素早く一枚のカードを差出して彼に示した。女同志の鞭打ちの写真だ。女が女を責めるショウのある話を、彼は友人から屢々聞いていた。仲々に機会が掴めないが、掴んだ時は、是非一度見て置くべしだ。と云った友人の言葉が、彼の脳裡にフト浮んだ——。

「こいつは素晴らしい饗宴だ——。場所は何処だい——」

「すぐ、そこよ。案内するわ」

女は合点して、ずんずん歩き出す。

サン・ジョルジュ街の中心部の、整然とした区劃の一部に小喫茶がある。女は小喫茶の横の階段をトン／＼と地下に降りる。

給仕が心得顔に扉を押して、恭々しく一礼する。軽いチップを与て彼は部屋に通る。

女は彼に囁く。

「ここが、『死なない鼠』ってところよ——」

「へーえ、ル・ラ・キ・ネ・パ・モールね」

「責めて、責めて、責めた／＼しても、へとへとになっても、くたばらない女鼠の巣ってことよ。じゃあ、私の案内は終わったわ。この小部屋のも一つ向うでショウが十分も経ては始まるわ。廊下に出て右の扉の金具を叩けばゴマは開く筈だわ。御約束のギャラを頂戴するわ——」

ブロード娘ネリイは事務的に手を差出した。

「これですべてが成立するのかい——」

「勿論よ。パリ女は嘘はつかないわ。既に先客様が五名程お待ち兼ねの筈よ——」

彼は途々、ネリイから指示された紙幣を渡す。女は軽く彼の額に

キスをして、一枚のカードと黒い覆面を手渡すとバイ／＼と未練気もなく立去った。

取り残された彼は、決然として小部屋の奥の扉を開く。外は細い廊下。廊下は細く続いて、歩き出すと再びもとの扉の位置へ戻って来た。円型なのだ。廊下の左側には彼の小部屋と同じ程度の部屋が幾つも扉によって閉ざれていた。

廊下の右側にたった一個所、ネリイの云った通りの、黒っぽい扉が厳然と閉ざされていた。彼はマスクで顔を覆うと約束通り、その金具をカタ／＼と叩く。小窓が開いて、ぬっと女の顔が覗く——。彼は逸早くカードを示した。うなずいて女は扉を重々しく開く。甘美なウビガンの香がすっと吹き抜けて、彼は部屋に入る。部屋——いや、その「死なない鼠」の間は予想通り円型だった。

円型のその間はすべて鏡張りであった。扉の裏側までが御丁寧に鏡を嵌めこんで、彼がおず／＼辺りを見廻すと、緑色に輝く部屋一杯に何十、何百と云う彼が、感慨深げにあちこちに立っていた。そして彼の廻りに何百、何千と云う、見知らぬマスクの顔の男が、一杯に、この新参者のエトランゼを興味深げに観察していた。

「間もなくショウが始まるのよ。さあこのボックスにお座りなさいな。その前に御紹介しとくわ。ここにお集りの紳士は皆お得意様なの。誰もがお互いの素姓を知らないの。ここへ入れば、誰だって唯一人の男に過ぎないの——分って？……私はマダム・ドモンテル。どうぞよろしくね。ロンドの司会者よ」

マダム・ドモンテルは一同に更に云った。

「さあ皆さん。ショウが始まるのです。ここで演じる淑女達に、より快適に、より愉悦を与えるが為に、一様にみんな衣服を脱いで戴

こうじゃありませんか——。それが『死なない鼠』の部屋のルールなんです。勿論、私も脱ぎますわ——」

マダム・ドモンテルは身につけていた絹の夜会服をするりと足許に落した。白肌が年令不相応に固くしまつて、見事な曲線を曝け出した。唯一つ、黒い長い手袋が印象的だ。

心得た如く紳士達は、銘々のボックスで衣類を脱ぎ始めた。彼も亦、皆に習って意を決して、マダムに云われた如く、衣類をとった。裸の紳士達は眩しげにそわ／＼して、我が身を持て余し乍ら、小卓のワインを手にした。ボックスは鏡に沿って円く仕切られ、中央のフロアーより一段高かった。緑の灯が突然消えて、暗黒が皆を包んだ——。

ポツリとフロアーの芯に桃色のライトが浮かび、色彩のリノリュームを敷きつめたフロアーの中心に、黒いビロード張りの長方形の拷問台が置かれてあった。

ライトの中心に手鎖をはめられた裸女が、二人の黒いピッタリと身についたタイツ靴をはいた女に小突かれる様にして、台に打伏した。パリのマザリーヌ街の特殊靴屋の最新モードである。太腿の上迄、柔かい革紐でピッタリと締め上げ、膝頭の屈曲も自由な柔かい皮タイツが、ハイヒールの先からずっと続いているのだ。

台上の女に金色のコルセットが二人の女達の手で嵌められ、蜂腰にするため、直径十五センチぐらいになるまでに、胴をくびり出した。コルセットの紐が二人の女によってぐ／＼力任せに引っ張られる。台上の犠牲の女の胴はくびれにくびれて、絶間なく悲鳴が妖しく洩れ出した。

蜂腰は確かに女を美しく見せた。

第一段階のコルセットを終えて、嵌口具が嵌められた。ハート型の皮が女の口に当てられると、両側の皮バンドが女のうなじで引き絞られて、しっかりと締めつけられた。

「皆さん。女鼠の第一号、クリスチーヌの準備段階は終わりました。彼女の今宵の遊びを『地獄のハンモック』と云う愉しみでお目にかけるとしましょう」

マダム・ドモンテルは恭々しく紹介して、さっと右手を挙げた。クリスチーヌは弱々しく台上に仰向けに身体を横たえた。彼女の手鎖が外されると、心得た二人の女が、丸いメートル半程のパイプを二本とり出し、その両先端についた皮バンドで、しっかりと女の両手首と両脚首をパイプに密着させて固定した。大の字にクリスチーヌは四肢をパイプに固定させて台上に伸び切っていた。マダム・ドモンテルが把手を廻すと、ガラ／＼と天井から細い頑丈な鎖が垂れ下って、その先端についた鈎を、クリスチーヌのコルセットの環にはめた。

尚、別の把手によって二本の鎖が天井より垂れ下り、両手足のパイプと連結した。

パイプの鎖がハンドルでジリ／＼引き上げられると、腰を落したく、の字型にクリスチーヌの体が一寸、二寸と宙に浮き始めた。更に一尺、二尺と体は上って、コルセットの中央の鎖もジリ／＼上ると、いつしか彼女の体は部屋の中央で三本の鎖に吊られて宙に揺れていた。スポットがその姿を照らし出し、台を素早く傍らによせると、ポツカリと暗黒に赤く、クリスチーヌの体のみが浮き上った。

二人の女は両側からクリスチーヌの体を揺すった。ゆら／＼と、人間ハンモックは右に左に、ミシ／＼と骨のきしみを静かに震わせ

て揺れつづけた。二人の女の手には細いしなやかな鞭が握られた。尖端が三本に割れて、これで打たれると、三筋の鞭跡が華やかに白い肌に浮彫りされる。

揺れた美体が近づくと、いきなりピシリと鞭が豊かな乳房にとんだ。声にならぬ呻きが洩れた。交互にピシリ／＼と右の乳房に左の乳房に、二人の両側の女から、鞭は生きものの如く流れた。二十回——三十回——女鼠は苦悶に、吊られた身を宙に蠕動させて揺れ続ける。全身に限なく鞭が行き亘って、女のうなじが反って、ブロードの髪が垂れ、激痛の蠕動が止った様に思われた。

ギリ／＼と鎖が逸早く、地上に落ちて、女の体はズシンとフロアに転がった。死んだように動かない、

そして暗黒になって、「地獄のハンモック」は終わった。

第二回の開幕である。男達の間から期せずして、熱い溜息が洩れた。

再び台上——そして二匹目の女鼠にも、コルセットが前者と等しく二人の女によって装填された。嵌口具はなかった。

「次はマドレーヌなる奴隷で御座います。この奴隷が一番喜ぶ愉しみは、愛玩用ペットになることだそうです。では『家畜人マド公』なるショウを御覧に入れるとしましょう」

マダム・ドモンテルの気どった声につれて、マドレーヌの首に、きら／＼光る金色の首輪がはめられ、鎖が台上の一端に結ばれた。

マドレーヌはそこへ、膝を落して四ツ這いになると、両手首をつなぐ、三十センチの手鎖がはめられ、太腿と太腿をつなぐ皮バンドが、二十センチの間隔でとりつけられ、その皮

バンドと手首のくさりが細いロープで連結された。立つにも立てない這った儘の姿勢になったのだ。

一人の女は首につけた鎖を台から外すと、グイ／＼引張った。ヨチ／＼と両手脚を交互に短かく運ばせて、マドレーヌはフロアを一周した。少しでも歩みをとめると、もう一人の女の鞭が容赦なく臀に飛んだ。

「どうか、家畜人マド公に餌を投げてやって下さい。口で受けないと、鞭の罰を与えることになっています——」

マダムの愉しげな声——。

つられて、誰かがチーズの一片を抛ると、マドレーヌは要領よく、それを口で受け止めた。偶に受けそこねると、鞭がとんだ。

このチャーミングな家畜の調教が始まった。マドレーヌにふさわ



しい、白い尻尾がとりつけられた。

男達の前で臀を振ると、白い尻尾が調子よく左右に揺れた。尻尾の振りが悪いと、容赦なくムチはとんだ。痛くとも彼女の悲鳴はキャン／＼と叫ばねばならなかった。まかり間違つて人間の言葉の呻きをもらすと、家畜に与えられた恩典は見物の男達の慾するままに舌で舐めねばならなかった。それが例え足の裏であつても……。

そしてこれは尚、序の口であつた。本当のショウはこれからである。一人の女がマドレーヌの背に馬乗りになり、鎖を握つて尻をひっぱたいた。早駆けである。ヨタ／＼と走って横ざまに倒れると、別製の、太い、見るだに恐怖を覚える革鞭が、皮も破れよと、臀部に飛び交うた。

マドレーヌは遂に人間の悲鳴を挙げつづけた。二人の女はマドレーヌを転がすと、太腿と両手をつないだ細紐に、天井からガラ／＼音を立てて垂れ下つた鎖の鉤を引っかけて、合図と共に引き上げた。鎖の鉤は太腿の皮バンドの方にずれて、彼女の体は太腿を上にして、逆さに家畜吊りに吊り下つた。首輪の鎖を引き絞つて台上に固定させると、宙にムの子に浮いた裸身に、二人の女の鞭が数限りなく飛んだ。血が滲んで、それがいつか細い糸を引いて、ポタ／＼と台上に垂れ落ちた。

「キャンと啼け！ キャンと……」女は叫ぶ。

「キャン、ヒッ、キャン」

息も絶え／＼にマドレーヌはキャンと呻き続けた。

度ぎつい刺激が、紳士達を声なくさせた。彼のハートも音を立て



てドキ／＼と波打っていた。

第三回——。

「では最後のショウとして女鼠第三号ジャンヌは、紳士の皆様方によつて鞭打って戴きましょう。我と思わん方はどうぞ——」

おし

マダム・ドモンテルの声は益々華やいだ。これぞパリの暗黒街に巣喰う魔女だろうか。

「題して、『裸女の宙吊りキリスト』と申します」

声が終ると、スポットが中央を照らした。嵌口具は二枚の皮で舌を挟んで、ぐっと後で締めつけてある。コルセットはない。

台上のジャンヌの両手が水平に横に延ばされて、二米程の平たい木が背からあてられ、両手はしっかりと横木に皮バンドで締めつけられた。ガラ／＼と中央の鎖が下って、横木の真中の穴に鉤が入った。揃えた両足首を鎖で縛り、鉄丸が一個とりつけられた。ジャンヌの体は全身鞭痕がこびりついて、白い肌に縞をつくっていた。鞭につぐ鞭で、癒える間もないのであろうか。ギシ／＼と鎖をききまかせながら、ジャンヌの体は立ち上った。把手を握るマダムの腕に力が籠って、驢でジャンヌは立錐形に宙に吊された。鉄の玉がすっかりフロアを離れ、介添えの女の立ち上った眼の高さに、ジャンヌの胸があった。宙吊りのキリストは観念したように眼を閉じていた。彼女の両脚が僅かに宙に折れかかっていた。更に鉄の玉が一個追加され、ジャンヌの体は垂直にすっかり伸びきった。

常連らしい紳士が一人、フロアに降り立った。女から鞭を受取ると、嗜虐に我を忘れて、鞭にうなりを生じさせた。鞭の激しさに、ジャンヌの体はゆらめく。忽ち、新らしい桃色の鞭痕がくつきりと三筋、四筋、ジャンヌの腰に、腹に走る――。

古い鞭傷は又しても破れて血をふく。細身の身体が宙に揺れる。勢いづいて又一人、紳士が降り立つ。ショウの最後を飾るように、紳士二人、無心に鞭をふる。返り血が紳士の手を濡らす。

彼を除いて、五人の紳士は入れ替り立ち替り、ジャンヌを鞭打つ

た。ジャンヌの快楽は疼痛に変わり、とめ度なく、無言の涙が頬を伝う。

ずたずたに肌を切り裂かれて、スポットに照らし出されたジャンヌの半身は赤く紅に染まった。

「紳士方は席にお戻り下さい。では私が最後に錦上華を添えて終る事にします」

マダムの声に、我に帰って紳士達はぞろぞろとボックスに戻る。

グッタリと垂れ下った受難の女キリストの前にマダムは立ち、だかると、女に云いつけて一束の吹き針をもってこさせた。

「私の名人芸を御覧に入れましょう。皆さんのお望みの個所を吹き当てて御覧に入れます。さあ仰有って下さい――」

マダム・ドモンテルは小さい筒を口に啣えると、紳士の方を見渡した。

「右の乳首だ――」誰かが叫んだ。

「よろしい……」

マダムはジャンヌの位置から、約五米程の間隔をとると、フツと口に含んだ針を吹いた。ピクリとジャンヌの体は動いて、小さい針は見事に彼女の右乳首に命中した。

続いて起る紳士の注文に、一本／＼狙らいはあやまたず、ジャンヌの体に、針は肌をつらぬいてささった。

三十本――四十本――

全身、針鼠になってジャンヌは既に身動きもしなかった。

キラ／＼とライトを浴びて、全身に針の洗礼を受け、妖しくきらめいていた。

「ジャンヌの楽しい遊びは終わりました。大丈夫、この娘はこれが何

よりの楽しみですもの——。さあこの針鼠をそっと下して御覧——鉄の玉を外され、ジャンヌは足をフロアにつけて、辛うじて、天井からの鎖に吊られて立っていた。

嵌口具が外された——。フーッと深い呼吸が彼女の口から洩れた。

「さあ、ジャンヌや。愉しませてくださった紳士方に御礼をお云い——」

マダム・ドモンテルの声に、正気づいたかの様に、ジャンヌは全身針鼠の体を、紳士の方に振りむけた。パッと緑の照明がついた。

針鼠ジャンヌの体が、一瞬、何十、何百となく鏡にうつって、彼女は力ない笑みを浮べ、円型のフロアを囲む紳士の群れに、顔で会釈をつづけた。鏡に写った何万本の針は、キラ／＼と輝き、妖しい夢幻の夢から紳士を醒めさせた。

彼の硬直した体は、漸やくほぐれ始めた——。

鏡の中のデュエットを見つめ乍ら、彼は慌ただしく衣服を纏い始めるのであった——。

—— ——— ———

「と云うわけで、この写真はその時のスーベニアなんです。こうして話をし乍ら、写真を見て戴くと、又、格別の味わいでしょ——」
ワイン氏は語り終って、盃をとり上げたのでした。彼の話は長く、予定時間をオーバーしましたので、引続き、ナイロン氏が口をきりました。ごく短かいお話だと前置して……

第十三話 女は夜手錠する

「バタ臭い話になりますが、これは請売りの話なんですから、その

おつもりで——。

アメリカはカリフォルニア州のアルカタという州立病院の出来事です。クリスマス・イブも間近に控え、ジングルベルの音が頻りに街から街に流れていた頃です」

× ——— × ——— ×

彼の異常性愛は、妻の腹部が月毎に膨れるに比例して昂じていった。朝出勤する時に、彼女の部屋の鍵をしっかりと掛け、インスタント食品をしこたま買込んでおいて一切、妻の外出を禁じた。彼は一分の違いもなく帰宅すると妻に手錠をはめ、彼女の身の辺り一切をこまめに世話をしやるのであった。

一度、妻が流産してからは、彼は妻の妊娠に対し極度に神経を尖らせていた。最初は妻の行動を制限する程度の束縛が、いつしか彼の異常嗜虐を生んで、今では妻に手錠をしておかないと、仕事をしていたても、一日中、そわ／＼と落着かなかった。

夜寝る時は、彼女の片手と、彼の片手が二本の手錠によって確っかりと結ばれており、念のいったことに、彼と彼女の片足が同じく足かせによって連結していたのである。妻は彼の異常な迄の行為を夫の妻に対する激しい愛の表現であると、甘受していた。事実、夫は彼女をこよなく愛していたのである。

その夜は、いつになく寒気が厳しかった。床につくと、例の如く、妻と夫は手足を互いに連結し合った。

突然、陣痛が妻の身に襲った——。激しくのたうつ彼女に慌てた彼は、手錠を外そうとして、何時も置いてある、ベッドぎわの机の手錠の鍵を探し、大急ぎで鍵穴に差込んだ処、慌てて逆に差込んだ為、どうしても開かない。力をこめているうちに鍵はポキッと折

れて鍵穴に残ってしまった——。

妻の出産は近づいている。切羽つまって、彼は卓上の電話で救急車を呼んだ。

寒気を震わすサイレンの音が近づき、救急車が停って、慌ただしく部屋の扉を叩いた救急員が、やっとして扉を押し開いた時、そこに妻を横抱きにして、床に打伏した彼と彼女の姿を発見した。

夫と妻が、手足を手錠、足かせで結びつけている異様な有様に、救急員は驚いてしまったが、早速手錠を解こうと改めた処、鍵穴に



にと運ばれた。

一時間半後、帝王切開によって無事に男児を分娩したが、その間、夫は初期の目的を達したかの様に、妻のその一部始終を手錠ごしにしっかり両手を握りしめ、出産がすむと、ホッとしたのか、くなくと妻の横に崩折れてしまった。

やむなく警官は、手術室で、白衣マスクの姿で、手錠、足枷を根気よく、ギシ／＼とやすりで切ってやらねばならなかった。

妻との手錠がようやく切れると、その場で彼は、改めて、警察の

鍵が折れ込んでしまっている。しかも不幸なことに、足かせの鍵が同一の鍵で開閉出来る様になっている。仕方なく、手錠、足かせでくっついたままの二人を救急車に乗せると、アルカタ州立病院の産婦人科室へ担ぎ込んだ。

前代未聞の珍事に、病院内は忽ち大騒ぎとなった。既に彼女は一刻の猶予も出来ない。不自然なこの儘の姿では、到底、正常分娩は望むべくもない。州の警官がかけつけ、夫婦はくっついた儘でとも角、手術室へ

手錠を両手にしっかりと受けねばならなかった。

妻が承知の上であつたが、事件となつた以上、妻に対する人権じゅうりんの罪で、彼はそれから三カ月、妻と別れて、今度はひとりっきりの手錠の生活を送らねばならなかった。

× — × — ×

「過ぎたるは及ばざるが如し。この女性の名は、エメリイ・クインという女であると、ニュースでは報じていましたが、実話にしては一寸面白い話じゃないかと思ひます」

ナイロン氏の話はあつさりと終りました。女給仕が香り高いモカのコーヒーをついで廻ります。紫煙とコーヒーの匂いがミックスして、なごやかな雰囲気があるルームの隅々まで充ち溢れていました。雑談が夕騒のひくようにおさまると、ドクター氏が久し振りに話を始めたものです。

第十四話 牛裂き散華

「御家騒動に巻き込まれて、若殿に一服盛った許りにその典医はおろか、女房から一人娘まで惨殺された痛ましい記録があるのです。映画なら、さしづめ、盛り終つて御役目のすんだ処で、悪臣の手でパッサリでチョンになるのですが……。藩の名や、殿様の名前は、ここにさして必要ありませんから、四国のさる大名にしておきしよう——」

— ○ — ○ —

震える手で若殿に差し出した薬湯の椀を、侍女の松山に取り上げられた時、御殿医の抱庵は一瞬、身の破滅を覚った。唇が蒼白になり、肩が小刻みに浪を打った。

松山は静かに立上ると庭に出た。泉水に見事な緋鯉が数匹、悠々と泳いでいた。

サラ／＼と薬湯が泉水にこぼれると、それまで静かに遊泳していた鯉が、忽ち激しく水を蹴り、尻尾を屈曲させて、寸時にして白い腹を見せた。

二番家老某の密命をうけ、刃を凝せられ、己むなく若殿謀殺を計つた彼の、小心さが、忽ちにして侍女に見破られてしまったのだ。バラ／＼と現われた家臣達によって、雁字搦目に縛り上げられた彼は、太縄で、ギリ／＼と庭の松の樹に逆吊りにされた。

「ええい、誰に頼まれた。ええッ、云わぬか」

吟味役によって、彼は弓折れで全身を打擲され、くわい頭の、短い頭髪は既にさんばらに元結をきらして乱れ、血は頭に下って、もうろうとしていた。

「そ、それは……あの……」

「ええい、未だ云わぬか。ええい／＼！」

白状しても、白状しなくとも、殺される事に変わりはない。それなら、あの悪家老の名を告げて、と、彼は嗔れた声を振り絞ろうとする毎に、口を塞ぐかのように、顔面に激しい鞭がとび交い、唇はさけ、鼻血はどく／＼と臉に溢れた。

この吟味役が、悪家老の幕下であることを、抱庵は恐らく知るところもなく、哀れにも、撲殺された。ヨレ／＼の逆吊りの姿を、三日三晩、松の樹に曝していた。

この謀殺未遂は一家断絶、罪は親戚縁者に迄及んだ。それ程に大殿の怒りは激しかった。

この地は闘牛の盛んな地である。殊に大殿は日頃、闘牛を好んだ。

抱庵の女房のやすは、衆人環視の囲いの中へ、真赤な囚衣を着せられ、その上を荒縄で犇々と縛られた上、囲いの中央の杭に佇立して縛りつけられた。

猛牛のうちでも、殊更、気の荒い牡牛が、囲いの中へ放された。

衆人の視線が息をのむうち、猛牛は狂い立って、赤い着物のやすを目掛けて、角をふり立てて暴進した。

「ギャーッ」と悲鳴が天にこだまして、やすの腹部に、ズブリとすどい角が突きささった。牡牛は尚もえぐるように、足をふみならし、土をけて、角に力を入れた。

ズタ／＼に赤い囚衣はさけ散り、ドロ／＼と腸が流れ出した。牡牛は血を見て更に狂い立った。暴進してくると、一瞬、角を下げて飛び上り、やすの乳房の辺りにぐさりと角を立てた。

牛の荒れるに任せた数刻――

杭に縛られていたやすの体は、いつしか荒縄を喰い切られて、牛に曳摺り廻され、手足をぶらぶらさせて、ボロ屑のように、全身を真赤に染めて、草原に散らばっていた。

血に狂ったように、大殿は、更に抱庵の娘、きねを牛裂きの私刑に処しようとした。

眼隠しをされ、二の腕を高々と荒縄でくくられたきねが、囲いの中央に引き据えられた時、流石に衆人の中から、怨嗟と、同情のつぶやきがひそ／＼と洩れた。

二匹の牛に太綱がかけられ、その両端が、きねの両脚に固く結びつけられた。

処刑役が、二匹の牛の尻を激しく棒で打つと、驚いたように、牛は走った。暫し牛は並行して走り、きねは牛に曳摺られて、草むら

をズルズルと滑った。

牛がゆっくりと止る。後ろ手の両手は、すり傷と、挫傷と、脱臼で十六才のきねは、断末魔の悲鳴を挙げて慟哭していた。

容赦なく大殿の手が再び挙った。

流石に躊躇していた処刑役も詮方なげに、のろのろと牛に近づくと、さっと棒を尻に振り下した。今度は牛は両反対に走った。

異様な骨の響きが空間に伝わって、両脚だけが長々と、別の生き物のように宙に浮いて、二匹の牛の太綱につながっていた。裂かれた辺りの草を、鮮血が忽ちに赤く染め、無惨に若い蕾を散らしていた。

むき出た腿の白さのみが、妙にくっきりと眼を蔽った群衆の印象に残ったのだった。

――〇――〇――

「大殿はその後、怨霊に憑かれたのか、あらぬ事を口走って、遂々狂い死にしたそうです。悪家老の手を待つ迄もなく、若殿も某日、牛に蹴られて、それがもとで亡くなり、彼等のたくらみは成功したかに見えたが、家老の立てた暗君が災いして、小国に転封されたそうです。――どうも血なまぐさいお話になって恐縮です」

おぞまじげな、退屈男達の視線の中で、ドクター氏は申訳なさそうに腰を下しました。

大名の暴君時代の、封建色の濃い古い昔を偲ぶように皆、黙りてくっていました。

時計の針は間もなく明日を示しそうです。

八人の退屈男は一樣に立上って、クラブの紫煙から、夜のしじまへと三々五々に散って行きました。

(第五夜・終り)